
リターンズ・クライン ～生まれる筈のない悪魔の子～

花形 茶屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リターンズ・クライン　　生まれる筈のない悪魔の子

【Nコード】

N7311T

【作者名】

花形　茶屋

【あらすじ】

生まれるはずではなかった悪魔の子が生まれた。

世界の危機は回避され、異界の産物は全て消滅したはずだった。

そして一つの物語が終幕迎えた。

だが、物語は終わらず、新たな命の息吹とともに物語は再開を告げた。

神は新たに自らの子を世界へと放ったのだ――。

001：開始の一手手前で（前書き）

この小説は、作者の初作品であり、アニメ版アスラクライン2の
エンド後の物語です。

誤植を直しました。

操↓操緒

001：開始の一步手前で

雲一つなく、青天なき白濁とした空。

大海の紺よりも濃厚な深淵が眼下に広がっている。

何処までも続く鋼色の螺旋階段は、二つの対極を結ぶ中央色。コントラストカラー

天にも地にも何かの姿はなく、そこはただ白く、ただ黒く、まるで命の灯っていない——いや、命の燃え尽きた残滓のような世界だった。

白濁とした世界と深淵を現す世界が混ざり合う。

そんな世界にわたしは取り残されたかのように、ひとり存在していた。

ふと、存在の軽薄なその世界で、何かが軋むような音がした。

それはとても重苦しく、時折躓くように音を鳴らしていた。

まるで、この残滓の世界がまだ生きているかのように、稼働を続ける部品たち。視界を埋め尽くすほどの数を占める一方で、それが何かは見当もつかないものだった。

わたしの背後に築き上げられた歯車の壁。

ギリギリと。

あるいは、ガタガタと。

止まりそうदैいて、止まることはなく。

動きそうदै、やはり動けない。

そんな歯車がいくつも並び、何かを成していた。

アナログな機械仕掛け。

その動力源は何なのか。

それを知らせるものがある。

この無数の歯車たちの中で唯一異なるもの。

歯車の奥底に見つけた円柱状の水槽。

何故、それがこの機械の動力になっているのかは、理解できなかった。

それを見た途端、これが何を成しているのか理解できたわけではない。

しかし、これは見ていてあまり心地良くない物であるとだけは、第六感で感知できていたのだろう。

そう思っている一方で、わたしの何らかの干渉をしても、それが意味をなさないどころか、干渉という行動に結果が伴わないということもおのずと悟っていた。

なぜならば、これはきつと夢だから。

夢でいくら頑張っても、所詮覚めてしまう虚無の現実なのだ。

その時、一層大きな軋みが鳴り響き、歯車の稼働率が上がった。

見間違いか。

水槽の中にある動力源となるモノの影が、薄くなっているような気がした。

歯車いのちは回り続ける。

くるくるくるくる、と。

あるいは、じわじわと。

——水槽の中身、少女の魂を喰らい続けて。

朝の目覚め。

それは鼻孔を擽る朝餉くすくのにおいによって引き起こされる。

だが、最近は初夏の暑さが厳しいため、目覚めはさほど良くはない。むしろ、一度このべたつく汗を流さなければ、一日を乗り切れる気がしないほどだった。どちらにしても登校中に暑さで汗をかくだろうが、これは気分の問題であり、重要なことであることに変わりはないだろう。

寝乱れた服を着つけ直して母屋へと向かう。

勝手口へと一歩を進める度に、食欲が増加する。

わたしは専ら朝はしっかりと食事を取るタイプだったりする。同年代の女子からは、大食らいだといわれたりもするが、なんとわたしは女子ならば誰もが羨ましがらるであろう、いくら食べても太りにくいという体質の持ち主だったのだ！

食事をするという行為に心弾ませつつ、勝手口の扉へと手をかけようとしたが、扉はひとりでに開いてしまった。

「おはようございます、奏華」

「おはようございまーす」

腰ほどまで伸びる黒髪を紙紐で結わえた女性に迎えられ、わたしは礼儀足らずも欠伸をしつつ勝手口をくぐった。

「もうすぐ、できますから」

少なめな言動を受け取り、わたしは食事の席に着く。

石造りで、未だ窯で料理をするという古めかしい台所。

そこに一人立ち、包丁を休みなく刻む女の人こそ私の母である。

母はおかずを作る一方で、汁物と炊飯をする窯の火加減も忘れずにチェックをしていた。

しかし、このご時世石造りの台所など何処にもないだろうけれど、うちはそういう家庭だった。

小高い丘にある一際大きい、それも平安時代のような規格外の領地を持ったお屋敷があるのだが、実はそこが今わたしがいる場所——つまり、わたしはそんな規格外な家庭に生まれた。

「お母様、お爺様とお父様は？」

朝食の支度を進める母を壁の格子越しに見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・まだ、忙しい、見たいです・・・・・・・・」

母は、その寂しさを背中で語っていた。

わたしの家庭は規格外の敷地ばかりではなく、その仕事も例外的だった。

いわゆる『ヤ』の付く職業というものである。

わたしはそれほど気にしてはいないのだが、母はどうも幼い頃よりこの仕事に不満はないが、思うところがあるような話し方だった。父に継がれた今はそこまで苛烈ではないが、祖父の代はそれはそれは毎日が闘争の嵐だったと父の秘書である八伎^{やぎ}さんが話してくれた。

八伎さんは、昔こそ祖父の秘書として先陣を仕切っていたらしいが、今では父の相談役という立場で裏から？組？を支えていた。八伎さんは隠居後も、書類整理や？組？の本拠地の守護などが日課となるほどにまで、まじめな人物だった。

そもそもこんな職柄を中学生である自分に語られているのかというと、それは八伎さんから教えられたことであり、なによりも母の意向だった。

嫌いだったからこそ、後々知った時にショックを受けないように。だが、そうだからといって間違った認識、その仕事をする上での考え方が自分にとっての当り前にならないようにと教えられたのだ。

そして、お家柄や曾祖母と母による舞の稽古もさることながら、わたしが一番印象深く記憶していたのは、父の教えだった。

母が語る父は、壮大で優しく、かつこいい人だ。

だが、その実態は娘のわたしから見ても、もう少し頑張ってほしいと思ってしまうのが、正直なところだったりする。

確かに、祖父と仕事の話をする父は、厳しく強面な雰囲気放つていて、少し怖気づいてしまうけれど、やっぱりふとした時に見せる表情や仕草がいつもの気弱な父を思い起こさせるのだ。

結論から言つて、わたしの父は？やる時はやれるが、やれない時はとことんやれない人？であると。

そんな父がある時、こういったのだ。

『奏華。僕はね、ホントは怖くてしょうがないんだよ。いつ死んじやうかわからないし』

わたしは正直信じられない思いだった。

父はダメなところがある人だ、弱音も母の前じゃよく言う人だったし。けれど、「死んじゃう」なんてあきらめたことを言う人じゃなかった。頑張つて、頑張つてわたし達を守ってくれている人が、守ることをあきらめるようなことを言う。

これ以上ない衝撃だったのを今でも覚えている。

その時、わたしは言った。

お母様はお父様のことをすごく強い人だと言っていたのに、と。今思い返せば、どちらもどう反応すればいいか疑問な事を言っていた。ああ、はい、そうですかというわけにもいかないが、何か言わなければならぬようなセリフ。

だが、父はわたしの疑問に答えず、わたしへ新たな問いを投げかけた。

『お前も、いつか重大な選択をする時が来るよ。それはお前だけじゃなくて、僕や奏、他にもたくさんの人が考えて、悩んで、苦しんできた瞬間だよ』

『……お父様は何を選んだの？』

父は過去を思い出すように、空を仰ぎ、

『……僕はいろんな人を守りたかった。僕は正直何もできない、ちっぽけな人間だと自分のことを考えていた。でも、やらなくちゃいけないくて、その為に力が必要で、奏の力も必要だった』

『お母様の力？』

『ああ、奏は僕よりもずっと強い、今も昔もね。それは知ってるだろう？』

父に言われて思い返してみれば、常日頃から夫婦の形勢を有利にしているのは、どちらかというやはり母だっただろう。父も押し通すときは押し通すけれど、それは母も同意の上でのこと。母の意向とそる形になれば、父は最後に妥協案を出す。

夫婦喧嘩はそれほどしない。

けれど、父は少し人の心に鈍感な面がある。

『——お母様のこと、好き?』

私はそんな問いかけをする。

母は私の目から言っても、美人だと思う。そんな母と結婚した父に不満があるとは思えないけれど、決定的に言葉にされなければわからない感情というものがあるはずだ。

『ああ。その結果が今の世界であり、お前だからね。もし、今の世界が消えることになっても、それこそ世界が初めからになったとしても、僕は奏と奏華を選ぶよ』

父の大きな手が私の頭を撫でる。

『お父様はもうお母様を選んだから?』

『そうだよ。僕は奏を選んだ。もしかしたら、僕の人生の中で最大の選択だったかもしれない。』

父は苦笑いのまま、春の庭先に目を向けた。

その横顔はどこか満ち足りていたが、父の過去に残る何かが表情を鈍くさせていた。

わたしが疑問を発する前に、

『奏華、お前は絶対的な運命を前にして、何を願いたい?』

そう父は最後に訊いた。

正直、小学生の娘に、人生の選択云々は難しすぎた。

だが、話の中にあつた『母を選ぶことが自分の最大の選択』という言葉が気にかかった点は、幼くしても目ざとい観察眼を持っていたのだと思う。

その後、会話を聞かれた父が母に涙目で何かを訴え掛けられていたが、その詳細までは知らないで終わった。

『奏華、ペルセフォネに、朝ご飯を上げてきて下さい』

二人だけのちよっぴり静寂な朝食後、わたしは両親が昔から飼っている赤いトカゲに餌をやりに行った。一見して「あれ、これってドラゴンじゃない?」と思わせる外見をするこの赤色で、翼が生え

ていて、角もある小型犬並みの大トカゲ。

しかし、その性格は温厚で、人懐っこい一面がある。

「ペルー」

いつも野放しでどこにいるのかわからないペルセフォネだが、呼ばずぐに姿を現していた。どこからやってきたのか、どれだけ聴覚が良いのかが疑わしいことこの上ない。

「キュル〜」

食事にがつがつとむさぼる姿は、やはり肉食獣を思わせ、昔あげた生肉を牙と爪で引き裂いていた様子はまさに恐竜だと思った。

休日なら食べ終わるまで待って、食器を回収するのだけれど、今日は平日。バリバリ登校日だった。

こんな蒸し暑い日は、短縮授業にしてほしいと心底願う。隕石が降ってくるなんてのはあり得ないだろうが、ちょっと先走った台風がやって来たとかなら臨時休校になる――ならないか。

そんな考えるだけ徒労なことで時間を割いていると、もはや寝汗を流す時間もなかった。

「こっちで、我慢するかな」

制服に着替え、鞆に教科書等と汗拭き用のウェットティッシュを入れる。

「お弁当」

「あ。ありがとう、いつてきまーす」

玄関先に来るまで忘れていた本日の昼食を母から受け取り、わたしは玄関を飛び出した。

「行つてらっしゃい」

一度だけ振り返り、母の笑顔に背を押され、わたしは今日一日分の活力をもらう。

「奏つ、奏はどこだ!？」

智春は、木造建築の廊下が軋むのも構わずに走っていた。

普段組合をまとめる身として、日ごろから威厳のある行動を取れと義父から言われていたが、今回ばかりは、彼の言葉が頭のどこにもない。

「と、智春さんっ!？」

大きな屋敷の庭を掃除していた奏は、慌てて廊下を走る夫を見つけて、箒を抱いたまま彼に駆け寄っていった。

「奏、大変なんだ!」

「ですから、何が――」

妻の言葉もまともに耳に入れずに、智春は一人で慌て、事態の異常さを告げた。

「操緒が、小っちゃい操緒が出たんだよ!！」

001：開始の一步手前で（後書き）

初めまして、花形茶屋です。

この話は、わたしがアスラクラインを久々に見て、刺激されたために作ったものですので、過度な期待と設定の不一致はしないでください。

更新は不定期ですのであしからず。

002：失われた存在（前書き）

理解力が少ない分、アニメと原作の設定が混ざっている事があります。

基本的には、アニメの知識を使用していますが、使うところは使っています。

まあ、それでも間違いがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

今回は、改変された世界の異常を体现する人物の話です。

002：失われた存在

夜風が吹く。

本来ならば、湾岸沖から潮の香りを乗せてくるはずの風。

それがなぜ、今日に限っては火薬のにおいを濃密に含んでいた。

「発射エ——っつ！——！」

黒衣の女の声が響く。

漁船の集う港に、付近の住民を一発で叩き起こす爆撃が鳴り響いた。地面を揺るがすほどの衝撃。

新たに女が腕より取り出したライフルを構える。

そのスコープの中心には、一人の少年が映し出されている。

少年は、この状況下において決定的に目立つ、白い外套を纏っていた。黒髪に、何やら面をしているらしく、顔までは見て取れない。だが、背丈、身のこなしから、十代後か、半ばであるだろうと黒衣の女は予想をつけていた。

「運が良かったら、命までは取られないかも——ねっ！」
照準を合わせ、引き金を引く。

それだけの行為に、女は心頭を滅却し、意を決し、その顔から表情を消し去る。無心になり、心臓より送られる振動をすらも押し殺した手にほんのわずかな力を込めた。

閑散とした海に、一発の銃声は響いた。

弾丸は命中した。

目標は、被弾の衝撃で地面に倒れている。

「捕獲完了かしら？　ずいぶん逃げて来たわね」

彼女は、射撃を開始する前に現在位置を確認していた。

日本の関東は、東京湾。

女は、背中より飛行機具を展開し、倉庫の上から飛び立つ。

黒崎朱湊は、現在ロイヤル・ターク・ンサエティ王立科学狂会に所属している。その任務は、十年前に消失した遺産の収集と悪魔の技術の回収である。

しかし、どちらも存在する可能性があるというだけで、確たる証拠は何一つない。であるからして、黒崎朱湊という人間は、基本的に旅人である。定期的な調査結果さえ本部に送れば、資金は受動的に手元に届く。

だが、今回のような異例もあった。

「お顔拝見しまーす」

朱湊は白い少年の仮面に手をかけた。

だが、結果としてそれは朱湊にとつて、とんでもない内部機密を知ってしまった時とじくらしい衝撃を与えた。普段笑顔を振りまくポジティブさを持っている彼女だったが、この時だけはその取り柄を失いかけた。

実際に内部機密を明かしてしまった時もあったが、その時は武力行使という術すべを取り、何とか逃げ切ったが、今回はそうもいかなかった。

標的の少年は、彼のある能力を買って王立科学狂会よりスカウトという形で接触されていたが、彼はそれを突っ撥ねた。その後、しつこく付きまとった本部の使者達を薙ぎ倒し、施設を破壊。莫大な損害の下、彼には損害賠償を理由に、四の五の言わせず研究に付き合わせるという方針が立った。

だが、今まで追跡と接触に何度も手間取っていた。

そこで浮上したのが、『歩く爆薬庫』とまで言われた武装人間である黒崎朱湊の存在だった。

朱湊は、依頼を受けた時、南国でバカンスという名の調査中だったため、資料は受け取れず、連絡一本で依頼を受けていた。

これが黒崎朱湊の衝撃の正体。

彼女は、仮面の少年がかつての戦友と瓜二つだということを知らなかったのだ。

今思い返しても、不思議な少年だった後輩。

夏目智春。

仮面を剥いでみた少年によって、思い起こされた記憶。

現在は嵩月組の組長をしているはずの彼が、なぜこんなところで、
よりにもよって王立科学狂会に搜索及び捕縛命令が出されているのか。

疑問の海を漂う朱湮だったが、やがて思い出す。

彼は今、奏と結婚し、男女の二子を儲けていたことを。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

それでも問題はあった。

なぜ、智春と奏の息子が、ということだ。

ここは日本であり、彼らが住まう地からそこそ離れた場所だ。
何か事情があるのであれば、納得するが、常識から考えて、こんなところに子供が夜な夜なうろついているわけもない。
そして何よりも。

嵩月智直は、十年前より行方不明となっていた。

今まで自分を含めた彼らの友人が、度々気にかけて搜索を行っていた人物が、なぜ今頃になって、それも日本の、この場所で見つかったのか。

そもそも王立科学狂会は、嵩月智直の存在を知っていたのか。
これによって、今後の疑問の糸口はかなり変わってくるはずだ。

加えて、かつての友たちの子供であり、行方の知れなかった人物でもあるが、それ以上の疑問を彼は残している。

朱湮が何にしても、彼を連れて行こうと手をかけたその時、疑問の種は浮上した。

「黒炎ッ!!」

朱湮の鼻先を意識を取り戻した智直の手が振るわれた。

その手には、轟々と燃え上がる黒い炎が灯っている。

そしてその手を開くと、溶けた鉛が零れ落ち、地面に焼付いた。

「……………やっぱり、それは、悪魔の力……………」

「」

朱湮の顔が険しくなる。

目に意識を集中し、熱探知を作動する。

だが、事実にはつきりと彼の手に灯るものが、高温の炎だということを実証していた。

「しつこい女だな、俺は何もやましいことはしてないぞ?」

「五ヶ所近くの研究所破壊に、数十人の負傷者を出し、あと私の武器の代金を払わずに逃げられると思ってるのぉ?」

「最後のは明らかにお前の責任だろうがっ!!」

智直の突込みにやや笑みを浮かべる。

まるで昔の彼に言われているような錯覚に見舞われつつ、朱湮はシンプルに拳銃を両手に構える。

「投降しなさい。別に取って食うわけじゃないの。たぶん研究の手伝いをさせられるくらいよ」

「断る。俺にはやることがある。こんなところまで追ってきやがって……………どこまでお前らは俺の邪魔をすれば気が済むんだ……………」

「だから、素直に渡しときなさいって。それとも、あなたの目的つてのを果たしてからでもいいわよ？ それくらいだったら、上も目をつぶってくれるでしょう」

朱湮は照準を合わせる。

狙うのは、智直の左太腿と右腕。

正直、友人の息子を打つことは、命を奪うわけではないとわかっていても、抵抗があつた。

しかし、彼の力は見逃すことはできない。

何よりも、息子の行方を今も気にかけている両親^{とも}に見逃したとは言えない。

「さあ、大人しく――」

朱湮が最後の通達をしようとした時、智直の方から黒炎を消した。だが、その表情は少しも投降に応じるものではない。むしろ、より犯行の意思を見せていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・悪い、琴波^{ことは}・・・・・・・・・・」

智直が何かとつぶやいた。

それとともに、彼の背後に人影が現れる。

「まさか、射影体っ!？」

半透明の少女。

青い衣服に身を包んだ金髪の少女は、小さく頷き、消えた。

「――鎮め、蛍石^{フローライト}ッ!」

智直の声に彼の影が震え、揺らぎ、爆散する。

『闇より重き沈黙より這い出でし——其は科学の時が弱めし万物の
ことわり
理』

少女の声が機械のものへと変動しながら、顕現の呪文を唱えた。
歯車の動く音と機械の軋む音が響く。

だが、彼の影から現れたのは、かつて機巧魔神と呼ばれた機械仕
掛けの悪魔の右腕のみだった。特に特徴的な部位はなく、その体色
は緑、青、紫へとトーンをずらしたように、所々に色違いだった。

「鎮める、蛍石ツ！」
フロライト

悪魔の顕現は、腕にとどまり、だが、それでも朱湮の何倍も
あった。

大きく振り上げられた右腕が、朱湮へと急接近する。

「くっ、まさか機巧魔神魔でまで——それも悪魔の身で
っ!？」

朱湮は背中のブースターを最大出力で噴射させる。

だが、それでも回避はぎりぎりだった。

この世界は、二巡目の世界だといわれている。

実際その証明として、かつて悪魔や機巧魔神と呼ばれる存在、そ
して超弦重力炉といわれる一巡目の遺産が存在していた。

だが、十年前のあの改変によって、悪魔の力も機巧魔神、そして
超弦重力炉も消えてしまった。
イグナイター

夏目智春が、因果律制御装置を使用したことによって、消滅する
はずだった世界は、未来を切り開いたのだ。

嵩月奏も悪魔の力を失い、普通の人間になった。
水無神操緒も副葬処女ではなくなった。機巧魔神の呪縛から解き
離れた。

平穏と平和が訪れた。

そう思っていたはずなのに。

「嵩月智直！ あなたは、何者なのよ！？」

朱理の言葉は、智直には届かない。

機械仕掛けの悪魔の稼働音が、彼に届くすべての音を遮断してい
たからだ。

フロアライト
「蛍石、鎮圧しろ！」

彼の声に、機巧魔神の動きが変わる。

機械の体の繋ぎ目と眼が、緑光へと輝く。

それとともに魔力の放出が始まる。

苛烈な稼働音に合わせて、智直の影から、機巧魔神の体があらわ
になる。

腕と変わらず、シンプルな造りだった。強いて言うのであれば、
左右非対称であるということだ。右手が球体人形のように柔らかく、
なめらかな造りであるのに対し、左腕は武骨に、まさに悪魔のよう
に節々が刺々しい。頭部の装飾も、右の側面に角があり、左の側面
はシスターのような布に覆われていた。

その姿は、まるで悪魔と修道者をちぐはぐにつなぎ合わせたかの
ような姿だった。

『闇より重き沈黙より這い出でし——其は科学の時が早めるモノの理』
ことわり

少女の声から機械質な声へと変わりながら、呪文が唱えられる。

機巧魔神の対象に魔方陣が浮かび上がり、何かが起ころうとしていた。

「くっ」

朱湮は過去の経験から、その脅威を察知し、空へと回避しようとした。

彼女の予想通り、機巧魔神の体に浮かび上がった魔方陣が、流れ落ちるように地面に広がっていく。

それは地面、壁、そして海面でさえも例外でなかった。

半径数十メートルに広がった魔方陣の数々。

だが、それは淡く発行するだけで、特に何かを起こす様子はない。

「何をしようとしたのかはわからないけど、空の上じゃ意味はないよね」

「それはどうかな——落とせ。フローライト 蛍石」

「なっ!？」

智直の言葉に、淡かった魔法陣の光が強化される。それともに、朱湮の体に異変が起きた。

直後に朱湮のブースターに最大出力の噴射が連続稼働する。

だが——

「——っ、出力が下がってる!？」

朱湮の慌てる様子を見て、智直が罍の作動に笑みを浮かべた。

フローライト

「蛍石の魔法陣は、事象の促進だ。もしくは弱体化と言ってもいい。その有効範囲は、上空にいたところで変わらない。この魔法陣にお前は重なっている。お前のブースターの出力は、蛍石の力で消費率を数倍に促進させている。そのうち、燃料が尽きて落ちるだろう」

装甲のつなぎ目を発行させる機巧魔神を背後に控えさせている智直は、翡翠の瞳を朱湊から外した。

もはや落下の衝撃で彼女との鬼ごっこは幕を閉じる。そう考えたからだった。

だが、朱湊はそれを隙として認識した。

もはや、飛行能力は失われるだろう。そうなれば、五、六階の高さから落ちることになる。そうなれば、ブースターを含め、射撃武器の修理が必要となる。それは軽くても一日はかかるだろう。

そうなれば、ターゲット嵩月智直を逃がしてしまうことになる。

だからこそ、一矢報いる。

腕と脚のミサイルを展開し、照準は機巧魔神。

『トモナオッ!』

「デ発射エ——ッ!——!」

朱湊の行動に気付いた少女の叫び。

不意を突かれた少年の表情。

そして、今夜最後の爆音が鳴り響いた。

操緒が現れた。

最初はそう思っていたしまったけれど、よく考えれば、そんなこと

あるわけがなかった。

八丈さんが蒼白な顔をして、お客様ですと言ってきた時に、どうしたのだろう、あの八丈さんがこれほどまで取り乱す相手などいただろうかと不思議に思っていた。

だが、実際僕も慌てていた。

客間に押し込むように入れた奏も、目をぱちくりさせている。

今も大きく見開かれていて、驚きを継続させている姿は、とても珍しい。

「お初にお目にかかります。私は環奈^{かんな}と言います」

テーブルを挟む、一礼する茶髪の少女。

恐らく自分たちの子供とそう変わらぬ年齢だろう。

茶髪と少し勝気な瞳が、彼女を思い起こさせる一方で、その雰囲気はとても物静かで、天真爛漫な彼女とは大きな違いを感じる。あとは、彼女がポニーだったのに対して、この環奈という少女はサイドテールだ。

「……………えーと、あなたは――」

初めに口を開いたのは、意外にも奏だった。

やはりかつての友人に瓜二つの客人が気にかかってしまったのだろう。

「環奈、ちゃん、だったよね？」

僕が再度確認を取ると、環奈は、身をただし、

「夏目智春様、嵩月奏様。私の母は水無神操緒。そして私はその娘」
そして環奈は、続けた。

「この度は、母の他界を知らせに日本へやってきました」

「——ねえ、ニアちゃん」

どこまで拡散しているのか。

果てしなく、地平線もないこの世界で、二人の存在が浮かび上がる。

真つ暗な——まるで、？科学の力が出でる闇？のように暗い世界。

水無神操緒は、この空間に不釣り合いな椅子の背に寄りかかりながら、唯一の話し相手に声をかけた。

「操緒、今話しかけるな。もう少しで新しい脱出方法が浮かびそうなんだ」

金髪碧眼、今年でちょうど二十歳を迎える女。

アニア・フォルチュナ・ソメシエル・ミク・クラウゼンブルヒ。

ラック・イーター

ルーマニア出身の元上位悪魔『運喰らい』で、機巧魔神の制御系の研究をするクラウゼンブルヒの一族に生まれ、十歳の時に日本へやってきた。

スタビライザ

当時は、行方不明の姉と、安全装置というプラグインを内蔵した機巧魔神の調査にやってきた。

まあ、その時の内蔵した機巧魔神というのは、自分が贄となっていた？？鐵？だったのだが、そう考えると、その運命にも感謝するというものだ。水無神操緒が？鐵の副葬処女で、アニアが機巧魔神の研究をしていたことで、そしてアニアの姉クルステイナが日本で行方不明になり、結果としてクルステイナのことは残念なことになったが、こうして操緒とアニアは友人として、かつての戦友としてともにいることができるのだ。

それ故に、操緒はアニアの考えを多少なりともわかるようになった

ていた。

「ニアちゃん、脱出方法って言っても、此処ってアレでしょ？ ツバルツツルト？の中と同じなんでしょ？」

「シュバルツシュルトだ」

操緒の誤りを的確に訂正するアニア。

「そう、それ。シュバルツシュルト、それって、副葬処女を取りこむ時に出てきたやつでしょ。あと、一巡目で悪魔化したトモの力だった奴」

今でも鮮明のあの年代のことは記憶に残っている。

幽霊同等の射影体という姿になってしまった自分。

物を食べることも、気持ちよく運動することもない、感情の薄れて行く生活で、生きがいは薄く、ただ軽薄になっていく自分の存在と運命にあがく人の姿が記憶されている。

「もともとシュバルツシュルトとは、ブラックホールに訳される。

光も逃さない重力の集束。智春が一巡目の世界で悪魔化した時に出した？闇の巨人？も似たようなものだ。ただこっちは、本来呑み込むだけだったエネルギーを固定化したものだったということだろう。私も詳しい調査を行っていないからわからんがな」

十年前は、両サイドにリボンで大きく束ねていた。そして一巡目の世界で再開した時は、毛先がいくつもツインしたゆるふわヘヤーだった。

そして二十歳になったアニアは、一度髪を短く切りそろえ、今現在背中の真ん中あたりに、やはりくるっと癖のついた髪型をしていた。

アニアは解けない問題を必死に頭からひねり出すように、髪をくしゃくしゃと掻いた。

「やっぱり今のところ無理なの？」

操緒に結論を先に言われ、アニアは顔をしかめて、そして椅子にふんぞり返った。

「……やはり今のところは無理だな。そもそも此処が副葬

処女の契約を行う時に使用されるシュバルツシュルトの闇ならば、
此処は異界という事になる。副葬処女は機巧魔神の中に入れらるが、
私達はそうなっていない。そもそも機巧魔神が失われた今、母艦で
ある『うずしお』もないだろう」

「つまり、ホントにどこでもない世界ってこと？」

「何処かではあるだろうが、恐らく私達の世界ではない。二巡目で
はなく、もっと別の場所だ」

アニアの言葉は、何処か核心を捉えていると言っているような物
言いだった。

いや、核心を捉えているのではなく、やはりまだ予想の域を脱し
ないが、それ以外に予想が立てられない、情報が少ないというこ
ろだろう。

「デウス・メッセンジャー
？神？の分離体？」

操緒の言葉にアニアが震える。

情報が少ない。

過去の情報はどこまでが通用するか分からない。
そこに現れた新たな情報。

『私の使命は、世界の修正により干渉が困難になった母体の代わり
に、この世界の仕組みを再考し直すことです。加えて、修正者及び
その関係者の一時的な排除が命じられています』

「……………ノ・ン・ヒューマン非人間とかいったか……………何な
のだ、あいつは……………」

アニアは突然現れた者のことを思い出し、爪を噛んだ。

これまで脱出の糸口を探し続けたが、やはり敵の情報を分析することの方が先らしい。

そこで操緒もぼやく。

「？神？^{デウス}なんて、聞いたことないよねー」

^{デウス・エクス・マキナ}

「奴の言葉から察するに、？神？とは【機械仕掛けの神】を指していると思われる。^{アスラ・マキナ}【機械仕掛けの悪魔】があるのだ。^{デウス・エクス・マキナ}【機械仕掛けの神】がいてもおかしくあるまい」

そう結論付けるアニアだったが、内心は分からない事だらけだった。

^{ノン・ヒューマン} 非人間、^{シン} 機獣子、^{チルド・マキナ} 機神子。

自分たちを閉じ込めた者が口にした、気掛かりな単語。

それらを総称して、？神^{デウス・メッセンジャー}の分離体？と呼んでいた。

アニアと操緒の脳裏に浮かぶ二人の姿。

日本で幸福な家庭を築けていると良い、と願う。

今こうして始まった事態に出来れば関わらずに平穏な日々を送ってほしいと。

だが、そう思う一方で、誰よりも早く自分たちを助けに来てくれることを願う。

かつて自分を救いだしてくれた時のように。

姉のような暖かな腕^{かいな}で癒してくれた時のように。

齒車は、完全に動き始めた。

002：失われた存在（後書き）

複数人登場です。

ネタばれに思われるところがあるでしょうが、これはこれですったので。

朱里の機械設定とか機巧魔神の仕組みとか、あとシュバルツシュルトの闇と闇の巨人の設定は、ほとんど独自の考えのもとなので、何かここはちよつと思っ点があれば、ご意見宜しくお願いします。

次回は洛芦和のことを書こうと思います。

003：科学とオカルトな日常の始まり（前書き）

まあ、高校生活初日ということ、それほど濃くはありません。

003：科　學とオカルトな日常の始まり

「これを持って今年度入学式を終了します。生徒は外に掲示されているクラス分け表より、自分のクラスへ移動してください」

司会の言葉にばらばらと散る新入生たち。

わたしもその流れに従い、会場を後にした。

事前に振り分けられたクラスの確認は終わっている。

わたしの所属クラスは、1年9組。担任は誰だったか忘れてしまった。紹介はされたのだが、長い式典というものは睡魔が付いて回るものだが、初日から居眠りをしてしまうなんて格好悪い。眠たいけど、眠れない、そんな境界線をふらつきながらだったため、ろくに自分のクラスのこととは知れていなかった。

「奏華、そんなところに突っ立てるとおいて行けますよ？」

不意に声をかけられ、背後へと振り返る。

サイドテールの茶髪を揺らし、胸元に光る紫色の光が時より彼女の動きに合わせて踊っている。言葉の端だけ丁寧な口調を用いて、眉間にやや皺がより取っ付きにくそうな水無神環奈がいた。

「水無神さんも同じクラス？」

「はい、1年間お願いします。それと私のことは、環奈でいいですよ？　これまでずっとそう呼んでますが、いざと呼ぼうとして、母と違いないと紛らわしいでしょう」

そうして、わたしは彼女のことを環奈と呼ぶことになった。

1年9組の教室へとやってきたわたし達だったが、もうすでにいくつかの輪ができていた。

教室内を見回すが、知り合いはそんなにいなかった。

超教派のミッション系な高校だけあって、宗教的思想があると勘違いしている人が多いのかも。実際は宗教活動など活発ではなく、自主性に任せた自由奔放な校風だと両親が語ってくれた。

わたしは両親が通った高校に行くのは少し抵抗があったが、それもこの高校にある【科学部】というものに興味があつたからだ。

中学も半ば、夏も盛りの八月中旬。

わたしはそれまで目指していた高校への進路をきっぱりと切り捨てた。

そして、わたしは今、洛^{らく}芦^ろ和^わ高校の制服に身を包んでいた。

「操緒さん、が………亡くなった………?」

3年前、わたしは眩暈を起こすほどの衝撃^{ショック}を受けた。

まだ数か月程度の中学で一日を終えて帰宅。敷地の入り口である大きな門をくぐってからの道のりは長く、軽く登山のような山道を登る。

「ただいまー」

玄関の引き戸がガラガラと音を鳴らす。

「お帰りなさいませ、奏華お嬢様」

まず、出迎えてくれたのは、八丈さんだった。

八丈さんは、わたしのことをなぜかお嬢様と呼ぶ。呼ばなくていいと言っているのに、そう呼ぶ。社長の——組長の娘だからそうな

るのかもしれないけれど、そんな器じゃない。自覚のない身としては、引け目を感じて、反応に困ってしまう。

「ただいま、八枝さん——それにperlセフォネ」

八枝さんより遅れて、奥からバタバタと音を立てて駆け寄ってくる赤トカゲ。足に乗りかかり、よじ登ろうとするため、ニーソックスがずると下がってしまった。最近、わたしがえさを与えるため、両親よりもわたしという時間が多くなりつつある。それでも夜は母か父の部屋へ行くのだけれどね。

「奏華お嬢様、お父上方が呼びです。帰宅しだい客間へ来てほしいとのことですよ」

「……………はい、わかりました。着替えたらいくと伝えてください」

八枝さんに伝言を言って、わたしは自室へと向かった。

自室につくまでの間、わたしは何かあったのだと気付く。

八枝さんは、母はお母様だが、家族間の用事がある時にはしっかりと「お父上」といつていた。普段は「社長」などと呼んでいたから、余計にその点について敏感に反応できた。

「失礼します、奏華です」

わたしは着替えると伝えたが、制服のまま客間へと来ていた。

着替えが面倒だということもあったが、どういった服装をすればいいか考えられなかったからというのが大きい。正装ならば和服だが、すぐに来てほしいようだったし。

「入ってきてくれ」

すぐに中から父の声が聞こえてきた。

ふすまを開け、中を除く。

そこには、父と母がいて、知らない女の子がいた。

「……………」

だが、どこかで見たような容姿をしていて、既視感を覚える。

特に結い上げた茶髪と、やや勝気な瞳が記憶から誰かの姿を思い起こさせる。だが、それが明確に誰とは言えなくて、結局思い出せ

ないままわたしは席に着いた。

「操緒のことは覚えてるか？」

「——あ」

その名前を聞いた途端、見知らぬ少女についての疑問が綻びを入れた。

父も、わたしの様子から覚えていること察して話を進める。

「この子は水無神環奈ちゃん。操緒の娘さんらしい」

そうだ。

思い出した。

わたしと操緒さんは、ちょっとした交流があっただった。

その交流とは、なんてことはない。ただのメル友という間柄で、週に一度か二度の割合で、近況報告などを含めた些細なことを報告し合っていた。

その始まりは、たまたま操緒さんが日本で調べ物をするため訪れた時、偶然街で出会って声をかけられたというありふれたものだった。

今日学校でこんなことがあった、昔の両親はどんな人だったのかなどといったちよつと本人には訊きづらい話題を主としていたのだが、それもここ一か月近く返信が来ていなかったため、少し気がかりだったのだ。

「どうして、操緒さんの娘さんが？」

そう訊くと、環奈さんを含め、両親ともに言いづらそうな重苦しい表情を作っていた。

こういう顔をする時、それは決まってよくないことが起こった事を証明していて、操緒さんの娘さんがいるということから、そのよくないことは操緒さんに関係があることだろう。

実際その予想は、当たっていた。

操緒さんの死に際については、教えてもらえなかった。

メル友程度の浅い関係ではあったが、両親の共通の友であることもあり、親交もあった。

だから、あのお日様のような人が最後に何を伝えようとして、亡くなったのか知りたかった。

「奏華、母さんと一緒に環奈ちゃんの部屋を用意してこい。しばらく、此処に住むことになるから」

そういつて、父は無理やりわたしと母を退室させた。

わたしはもつと訊きたいことがあったのだが、母がそれを良しとしなかった。むしろ母は父の意向に従うように無言で促していた。

母に背を押されて退室する。

だが、やはり納得はいかなかった。

環奈が嵩月家に居候することが決まってから、約3年。

滞在期間は、操緒さんの話に時々出てくる？ニアちゃん？という人が見つかるまでだそうだ。

操緒さんの死後、ニアさんどこかへ行方を眩ませたらしい。

環奈にとって幸いしたことは、資金面で苦渋することはなかったということだ。ニヤさんは、実家から資金面の提供を受けていたという。環奈の育ての親である二人は、自分たちがいなくなった時の緊急措置として様々な暗証番号を伝えられていた。そしてこれからの生活をどうすればいいかと考えた末、彼女たちの共通の知り合いである嵩月家を訪ねたらしい。

「奏華、部活はどうするの？」

高校生活初日は説明会で終わった。あとは自己紹介やらクラス委員長決めやらで片付き、先生の話がよろつとして終わり。

ちなみに、担任の名前は大原おおはらという。ジャージ姿の体育会系女教

師。

環奈の話では、この人も両親たちの知り合いだという。

中央列三番目にいるわたしと廊下側より二列目の最後尾にいる環奈を見て、大原杏^{あん}先生は驚いていた。素直な性格をしているらしく、その反応はまるで子供のようだった。

そんなことがあった今は放課後。

「ちよつと見ておきたいところがあるの」

「どこです？」

「科学部よ。知ってる？」

「ええ。母やニアさんから話を聞いてますから。母たちを含め、奏華のご両親が所属していた部活で、活動目的は？黒科学の探求？だったかな？」

「黒科学？ 黒魔術じゃなくて？」

環奈の説明に疑問を抱きつつ、歩みは科学部の部室へと向いていた。

「科学というものは、魔術から生まれたと言われているらしくて、魔術には？黒魔術？と「白魔術」が存在する。ならば、それぞれから発展した？黒科学？と「白科学」があると考え、その？黒科学？を研究するのが目的で、この科学部とつながりを持っているのが【ロイヤル・ダーク・ソサエティ 王立科学狂会】。昔は英国女王の名の下に悪魔という存在を保護しようとしていたとか」

環奈の口から次々に飛び出す専門用語。

わたしはそれを少しずつ理解しようとしていたが、実際理解できたのは、科学部はオカルト的な部活だという結論に達した。

「……………ここ、で合ってるよね」

扉上の表札を見る。

そこにはしっかりと手書きで？科学部？と書かれていたが、その裏には「化学準備室」と書かれていた。

「失礼しまーす」

ノックを二回して、扉に手をかける。

「・・・・・・・・・・」

だが、中には人の気配はなかった。

そのくせ、やたら目立つ物品が存在感を放って陳列していた。不気味な仮面や機械の手、怪しい刀剣やコンパス、ランタンなど部屋のいたるところに置かれていて、本当に一体何を調べたいのか、甚だ疑問である。

その時、奥の扉が開いた。

「ん？　もしかして新入生？」

現れたのは、黒い白衣——黒い時点で白衣ではない、黒衣だ——を着た男が牛乳とアンパン片手に現れた。これから張り込み調査でもするのだろうか？

「入部希望？　——っていうか、君たちさ」

その男は、ぼさぼさの髪に武骨なゴーグルを頭に装着していて、何やら訝しげな表情でわたしと環奈を見つめている。

「ご両親が洛高の卒業生だったりしない？」

わたしたちは予想もしなかったことを訊かれて、顔を見合わせる。「俺が察するに、君のお母さんは嵩月奏さん、そこでこっちは水無神操緒かな？」

男はわたしを指さした後、環奈へ向いた。

「わたしは嵩月奏華です。母たちを知ってるんですか？」

「あなたは誰ですか？　ここの顧問ですか？」

「如何にも、と言いたところだが、俺は樋口琢磨^{ひぐちたくま}。ただのOBだ。オカルト研究が趣味だからこうして此処に通っているわけ。普通の博物館より此処は面白い物がそろっているからな。智春たちはその頃よく馬鹿やった仲だよ」

樋口さんは、それから「それにしても・・・・・・・・・・」と環奈のこ

とを見ていた。

「どうしました？」

「いや、ちよつと意外だな。操緒は、智春以上の相手を見つけたんだと」

「ああ、そう言う事ですか。違いますよ、私は外見がすつごく似てるだけのただの養子です。血の繋がりはありません」

「え、そうなのっ!？」

わたしと樋口さんは驚きに声を上げてしまった。

親と瓜二つの子供も相違ないが、これほどまで似ている赤の他人というのも珍しい。絶対どこかで血の繋がりを感ずてしまう。

「実際は物心つく前から操緒さんに育てられましたから、感覚的には実の親子と言っても過言ではありませんけどね」

「なるほどね。同級生の子供か、年を感じるなあ。好きなことばかりやってるから余計に」

樋口さんはストローを咥え、牛乳を飲む。

父や母たちと同年代ということは、樋口さんは今年で36歳のはずだ。三十路は過ぎたが、それほど年を取っているようには見えなかった。恐らくストレスを抱かない生活をしているため、余計そういった不満が体に現れないためだろう。

「さて、どうする？ 入部するなら顧問に言っておいてあげるけど？」

「その顧問という方は、今どこにいるんですか？」

「多分、ペットの鳥に餌をやりに行ってると思うが、すぐ――」

「また、来ていたのですね。樋口さん、此処は休憩所じゃないのですよ」

がらりと科学部の扉が開く。

現れたのは、黒髪をなびかせる綺麗な女性。青く透明感のある雪の結晶の髪飾りをしていた。

「……氷羽子さん……？」

「——嵩月家の……奏華さんでしたよね？」

昔の写真でも何度が拝見し、実際にあったこともあった女性。

鳳島氷羽子さん。

両親のアルバムでは、ゴシックスタイルの衣服と帽子を被っていたけれど、今は普通に教師らしくスーツを着ていた。その手に資料をファイリングしたボードを持ち、どこかの社長秘書のような威厳を感じる。

嵩月家と鳳島家は、他にも華島家、風斎家と合わせて《花鳥風月の四名家》などと呼ばれている。だから、年に数回ある顔合わせ時に集会所で見かけることがあった。他の四名家とは、まだ交流がなかったが、氷羽子とだけは挨拶を交わしたことがあったのだ。

しかし、まさか高校で教師をしていたとは。

「……大それた動機はありませんよ。ただ、やってみたかった、そんな理由です」

氷羽子さんは、デスクに資料を置いて、戸棚からカップを三つ取り出す。手早い身のこなしで紅茶を三杯注いで、並べる。

「何はともあれ、ご入学おめでとうございます。この場では余所の組長の妹ではなく、一人の教師としてあなたたちの入学を祝いますよ」

「ありがとうございます」

「それで、奏華さんは知っていますが、そちらの子は？」

氷羽子さんの視線が環奈へと向く。

その様子は、やはり樋口さんやわたしのように訝しげだった。

「水無神環奈と言います。ご察しかと思いますが、水無神操緒の娘ですが、実子ではありません」

「そうですか。似ていますね。育った環境に影響されたのでしょうか？ まあ、なにせよ、ここへ来たということは、少なからず？

科学部？へ興味があつたという事ですね。それでは――」

氷羽子さんは、デスクの中を漁り、二枚の書類を取り出した。書類と言つても、ハガキ程度の大きさの物で、「入部届」と書かれ、六芒星を飾つたデザインが描かれていた。

「まだ、初日ですし、他の部を見るのもいいと思いますが、これを差し上げましょう。署名した後、此処か職員室の私のところまで持つて来てください」

氷羽子さんから入部届を受け取り、わたし達はしばらく部の活動や昔話を聞かせてもらった。

氷羽子さんと樋口さん、それと様子を見に来た大原先生が集い、話題は昔話一点となった。

どうも話に聞くと、高校二年の年が一番騒がしかったらしい。

父の不幸体質から事件に巻き込まれる回数は数知れず、ついには知り合いだったということ第三生徒会の会長にまでなつていたという。

ここでわたしとしては疑問を持たざるを得ないのだが、

「第三生徒会つてなんですか？」

初めから目にはついていたが、この学校には第一から第三までの三つの生徒会が存在していた。どう考えても不思議なことだ。

だが、わたしの疑問に答えたのは、氷羽子さんでも、樋口さんでも、ましてや大原先生でもなく、環奈だった。

「というか、思いつきり入学式で説明されていたのに、覚えていないということは、睡魔と闘つていて碌に話も聞けてなかった、というだけですよね？ 夜遅くまで趣味に没頭してるからですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うーっ」

正論だっただけに、何も言い返せず、わたしはただ唸るだけだった。

しかし、そんなわたしを見て、大原先生が笑いをもらした。

「懐かしいなー。嵩月さんもよくそうやってたんだよ」

「そういや、そうだったな。でも、怒った時も、困った時も、嵩月は美人で胸も大きかったから怖いというより萌えだった！ ネコミミだった！」

「樋口さん、気持ち悪い言動で次世代を担う子を冒さないでください」

ただ純粹に大原先生は思い出に浸っていただけなのに、樋口さんが当時の想いを暴露し、氷羽子さんに思いつきり両断されていた。

最近俺への風当たりがひどくない、と言いついて樋口さんは、肩を落としている。

まあ、女性の中に一人男が混じっているから、そうなることもないか。

「・・・・・・・・・・娘としては、あまり聞きたくなかったことだけれどね・・・・・・・・」

「聞いてしまう所にいるんだから、あきらめたらどうです？ それに入部したら、恐らくこんなことが毎日起こります。そしてオカルト的なものもいっぱいいます」

言われて、再認識する。

そして軽いため息が出ちゃう。女の子だもん。

——というネタをやるのではなく、ホントは非科学的なものにあまり興味はなのだ。

わたしは日常をありのまま、のんびりと暮らしていたいだけ。

父がいて、母がいて、祖父や曾祖母が、それに八枝さんやペルセフォネも。環奈だつてすでにうちの家族みたいなものだし。

闘争とかがたまにおこるからかもしれない。平和が一番良いと思う。

昔話をいっぱい聞かせてもらった後、わたし達は第三生徒会を訪

ねた。それに氷羽子さんも同行してくれたため、面白いくらい警戒されなかった。

氷羽子さんが同行してくれたのは、科学部が第三生徒会に所属する部活動だからだという。

第三生徒会は、校内の文化系クラブや学業を取り仕切っているらしい。

ちなみに、第一生徒会は、校内の治安維持、加えて運動部を管轄している。

第二生徒会は、委員会を管轄しているらしい。

それぞれに宗教的思想があったらしいのだが、今は活動内容だけが受け継がれ、あまりその思想というものは目立ったところを見せないらしい。

第三生徒会には、歴代会長・副会長の顔写真なんてものもあり、そこに若かりし頃の父が映っていたことは、驚きでもあり、嬉しくもあり、ちよっぴり恥ずかしくもあった。

まあ、生徒会長なんて経験を積んだからこそ、今うちの組をまとめることができているのかもしれないと思えば、それも吉だったのだろう。

「そういえば、なぜ奏華は科学部への入部を希望するのですか？」

入部届は、明日にでも決めて提出すると氷羽子さんに伝え、わたし達は下校した。

帰りに商店街を散策して、買い食いなんてものもしてみようとしたが、環奈に止められた。

なんでも、夕飯がおいしく食べられないという事らしい。

意外と食に関してうるさい人だったりするのかな？

まあ、何にしてもわたしの入部希望の動機についてだが、これは環奈になら話も大丈夫だろう。ちゃんと口止すれば、言わないだろうし。

「わたしは、
科學部に残されたお兄ちゃんの手がかりを探すつもり
なの」

003・科学とオカルトな日常の始まり（後書き）

既存キャラのしゃべり方や態度の不具合は、目をつぶってください。

次回は新キャラを出そうと思っています。
男女両方です。

004：襲来（前書き）

今回は前段階です。

クラスメイトの男女と、第三生徒会長と部長登場。

004：襲来

洛校には、悪魔や幽霊が住んでいる。

入学式から二週間が経過するこの日、隣席の女子——木浪神美更きらかみみさらからそんな噂を聞いた。

美更は、きめ細やかなライトグリーンの長髪を持ち、その性格はまるで好奇心旺盛な子供そのものだった。

珍しい物には手を触れ、愉快なことに笑い、悲しい時に涙を流す。本当に、純真無垢な子供を成長させたかのような少女だった。

「朱鷺川ときかわ！」

美更がその男子の名前を叫ぶ。

いつもは名前で呼び合い、甘々な雰囲気を出していた彼女が、今は緊張を露わにした強面をしていた。

彼女の視線の先には、黒髪で長身の男子。本名を朱鷺川正ただし。180cmはあろうかという背丈を持ち、その手には灰色の手袋が装着されている。サングラスに隠れた視線がいつも以上の眼力を持っており、殺伐とした雰囲気漂っていた。

「なん、なの………あれ」

校庭に佇む朱鷺川に対して、空を飛行し、尾を翻す異形の生き物がいた。

翼は西洋竜のように皮での滑空を主とした造り、だがそれと相反するように目がなかった。

まるで初めからそうだったかのように、目蓋はなく、顔半分が何もなかった。

だが、代わりにウサギのように耳が大きくとがっていた。

最後に口から覗く牙が認識した途端、その生き物が何に近い生き

物かを理解した。

校舎よりも高い位置を選歌していたソレは、突如翼を大きく羽ばたかせ、飛行を中断した。

その行動の意図にいち早く気が付いたのは、やはり美更だった。

「朱鷺川、早くっ！」

美更が再度声を張り上げる。

彼と彼女の距離は、大体100メートル強。

美更が彼に走り寄ろうとしたが、その前に上空のソレが動いた。

——いや、落ちたと言ったほうが適切かもしれない。

まるで、投下されたミサイルのように。

弾丸と化したソレが、地上を、朱鷺川正を標点として落下し始めたのだ。

間に合うとは思えない。

第一に、間に合ったところで何かできるとは思えない。美更のように、細く繊細な少女があのかげ物を打破できる手段を持ち合わせているとは考えられなかった。

だが、術を持っているのは、彼女ではなかった。

「——約定せよ、紺碧玉」
ザファイリア

朱鷺川の声がこちらに届く前に、爆音と地響きがわたし達を襲う。校庭全体に舞い上がった砂塵に阻まれ、状況の把握ができない。美更はどうなった。

朱鷺川はなぜ、少しも逃げようとしなかった。

その答えは、機械室な声が証明した。

「闇より虚^{むな}しき伽藍^{がらん}より広がりし——其は科学の祝詞^{おもひ}が治める理想郷」

砂塵が突風に弾かれ、状況の幕が上がった。

そこに現れたのは、紺碧色の巨人。

だが、それを生物として認識してしまうには、少しばかり抵抗を抱く。

なぜならば、それはひどく節々を軋ませ、見かけどおり機械の体を持っていたからだ。

およそ生物としては認められず、だが、その動きは完全に機械の動きではなかった。

「行つてきまーす」

環奈と声をそろえて、玄関を飛び出す。

「行つてらっしゃい」

母の笑顔に送られて、わたしの足取りはいつも通り軽やかに、滑らかに、未だ新鮮味のある学校生活を謳歌しようと通学路を踏みし

める。

「いつ見ても建物の数が多い学校だね」

大きな校舎が1つ、生徒会の建物が3つ、体育館とプールもあったし、図書館もあった。

何を以て生徒会を3つも設立したのかは不明だし、何よりもそれを踏まえて敷地が優々とあることに疑問を抱かずにはいられない。

「見ても数が変わらないのは当たり前のこと。…….」
「けど、私の目から見ても、この学校はちょっと異常かも知れない前にもこんなところ見たから慣れたと思ったんですけど、こういう型破りな物への耐性はどうもつかないみたいですね」

「前にもって、わたしの家に来る前によその学校にいたの？」

「それは行ってましたよ。何を言ってるんですか、中学は義務教育ですよ？」

環奈はさも当然という顔をする。

たしかにそうだが、両親の話では、環奈のお母さん、つまりは操緒さんと一緒にいたアニアさんという方がすごい秀才らしい。だから、てっきりその人に教鞭をとってもらっていたのかと思っていたのだ。

実際、環奈は洛高に入学した時の新鮮味あふれる反応は見ていて面白かった。

3年前、わたしの家にやって来てから今年の春入学するまでの間、彼女の希望で、環奈は独学を進めていた。

学費は気にしなくてもいいと、両親が言っていたが、結局環奈はそれを断り続けた。

それどころか、環奈はわたしが中学に行っている間に、八丈さんから仕事をもらったり、大原酒店にまで父のコネでバイトに行っていたというのだ。

そのことを本人に問い詰めると、

「居候の身は、下宿代を払う必要があると思ったからですよ」
なんてことを口にしたのだ、あの子は。

そして今も同じようなことを言う。

「そろそろ嵩月家を出て、一人暮らしでもしましょう」
突発的に、環奈はこういうことをよく言い出す。

そこにどんな意図が込められているのか。それはわたしの図れるところにはないだろう。

環奈は変わり者だった。

変わり者であるが故に、新生活にふさわしい人材かもしれない。
平和すぎるのも考え物で、それは変わり映えしなくてもいいという事ではないのだから。

「かーなちゃんっ！ どーん！！」

「うわぁっ」

そして、このように背後からの奇襲も新鮮味あふれる学校生活には必要かもしれない。

「うりうりっ」

しかし、だからと言って、人の頬を引っ張ったり、わき腹を擦るような行為は控えてもらいたいのが本音だったりする。

「むー、かなちゃんが反応してくれない！ 環奈ちゃん！ かなちゃんが無視するー！」

「そういえば、奏華。今日は早く帰る予定でしたね？」

「うん。今日は月に一回大お婆様がいらっしやって稽古してくれる日だからね」

わたしはあえて彼女を無視する流れに乗っかり、話題を切り替えた。

しかし、そこで黙っている木浪神美更ではなかった。

「話を——聞きなさああああいつ——！！」

結局、その直後に保護者役の朱鷺川正が来るまでその騒ぎは、校

庭から校舎内に響き渡っていた。

「それでね、この学校って、超教派のミッションスクールでしょう。そういうオカルト的な噂や現象が多いらしいのよ。私の情報じゃ、第二生徒会長も怪談チックな噂の持ち主らしいわ」

オカルト話を嬉々として話し続ける美更。その笑顔は、太陽のように輝かしい。

だが、ごめんなさい。わたしはそういう話、別に好きじゃないのよ。

奏華の胸中を知らずにいる美更だったが、どう見ても奏華自身嫌がっている様子はなかった。好きではないだけで、嫌いでもないという感じ。

奏華は、日常をこよなく愛する女の子なのだ。

「美更」

放課後、いつものように部室へと向かう途中、声がかかった。

化学準備室兼科学部の扉の前で、佇む男子の姿があった。

彼は、わたし、環奈、美更というもはやお馴染みの女子三人を見つめ、その中の一人に目を向けていた。

「今日は来たんだね、正くん！」
ただし

サングラスをかけた黒髪の男子。背は180cm前後といったところだ。

名前を朱鷺川正。

緑のグラスの下に隠された眼光は、いつも睨みを利かせているように見えるが、それが彼の素顔なのだった。奏華も始めてみた時は、おおと思っただが、組員の人、特に怒った八伎ほどではなかった。

八伎さんを怒らせたことは、ほとんどないけれど、昔何度かあった。どれも幼いわたし達が度の過ぎた悪戯していた時だ。あとは、組の抗争があった時、わたし達が危険にさらされた時の八伎さんは

ほんとに容赦がなかった。

「これからはもう逃がさないからね、ちゃんと部活には参加しない！」

「はいはい。人前で抱き着くのはやめようねえ？」

見かけ不良っぽい雰囲気を出している朱鷺川くんだが、今現在のように甘える美更の姿を見れば、彼の素性も知れてくるというものだ。

いや、ホントに。人前では自重してください、美更ちゃん。

「なんだかイラつくので、どうか余所やって下さい。今日は部活に来なくてもいいですよ」

環奈が部室前でいちやつく二人に対して、やや辛辣な言葉をぶつける。

まあ、自分も似たようなことを思っていたから、どうすることもできないけれど、やっぱりカンナの言葉にはどこかとげを感じる。それが彼女の個性なのかもしれないけれど。

「それで、何で扉で私を待ってたの？」

「別にお前を待ってたわけじゃない」

朱鷺川くんが仏頂面にそう受け流す。

扉をいつもの鋭い眼光で見据える彼は、さりげなく自分の腕に腕を絡める美更の対応を後回しに、説明を開始する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・中から変な物音と異臭がするんだよ・・・・・・・・」

彼の言った通り、部室の扉前にまで来ると、自分の中の危険信号が唸りを上げている。

「うつ・・・・・・・・」

ハンカチを取り出して、口と鼻に当てる。

扉越しでも分かる硫黄臭。

誰か中に人の気配があることがわかる物音。

明らかにここは、「触るな、危険！」の気配をむんむんとさせていた。

「あなたたち、そこで何をしているのですか？」

わたし達が中を確かめるかと、いざ決意した時、タイミング良くも悪くも登場した氷羽子さん。いつも通りの黒いスーツを着こなして、手には書類を挟んだボードを持っていた。

「どうもこうもないですよ」

「……………ホント、何があっただんでしょね……………」

氷羽子さんは、扉の前まで来て、異変を感じ取った。

そして、なぜかあきれた様子を見せるのだった。

その時、扉が開き、立ち込める黒煙とともに出て来た人物は、

「ゴホッ、ゴホッ、うえつくっ!？」

初めて見た生徒ならば、不審人物として通報しかねない怪しさを纏った男性。ゴーグルに黒衣、宗教的、もしくは呪術的な装飾品で身を固めた人物は、もちろんオカルトマニアの樋口さん以外の何者でなかった。

「樋口さん、またあなたですか？」

どうやら、氷羽子さんは樋口さんの仕業だとわかっていたようだ。今日は三つ編みにした黒髪を後ろに払い、ヒールをカツカツ鳴らして、樋口さんに近寄る。そして以外にも胸倉をつかみあげた。

「……………いい加減にしてください、今度問題を起こしたら――潰しますよ?」

氷羽子さんは、みんなの前でそう一言告げると、樋口さんを連行していった。

「……………」

襟首を猫のようにつかまれて、引きずられていく樋口さんは、苦笑いが絶えなかった。

というか、どこか諦めているような顔だった。

わたし達は角に消える二人を見送った。

やっぱり鳳島家の組長の妹というだけはあるのかもしれない。

「・・・・・・・・これを俺たちに、どうしろっていうんだよ・・・・・・・・」

「あ」

朱鷺川くんの声に、わたし達は現状を再認識する。

黙々と上がる黒煙。

異臭を放つ鍋らしきものが机の上に乗せられている。その設置は、ガスバーナーで加熱し、いくつもの試験管へと管が伸びていて、まるで何か魔術的な、あるいは錬金術的な雰囲気を感じた。

いや、感じたのではなく、樋口さんという人はそういう人だった。数日前のことだ。

何やら『特別性』という意味ありげな饅頭をもらったのだが、それが壊滅的に不味く、気が付けば、数時間が経過していたという出来事があったのだ。

その時は、大原先生がちょうど見たところだったらしく、気絶しているわたしを見て、大慌てだったらしい。加えて、樋口さんも頭にこぶを作って気絶していたので、きっと先生から制裁を受けたのだろう。

というか、何で樋口さんはこう自由に洛港に出入りできるのかが不思議でならない。

OBだからといって、そうはいはいやってこれるとは思えないだけだ。

結局、樋口さんが何を生成しようとしていたのかは、謎に包まれたままに終わった。

窓という窓を開け放ち、扉も開け放って、空気の循環をより良くしようとする。

「とりあえず、こんな部でも四人はいるもんなんだな」

朱鷺川くんが、ふとそんなことをつぶやく。

だが、それには激しく同意したいものだ。非難、否定したいわけじゃないが、わたしもそういうオカルトという物はあまり信じていない。

なぜ、それはひとえに我が家業が日常離れしているからだ。言い直せば、十分非日常的な毎日を送ろうというのに、今更摩訶不思議の一つ出てきたところで何も問題はない、ということだ。

「今後の活動方針などは、どうしましょうか？」

「？黒科学？の研究なんでしょう？」

「でも、黒科学なんて実際どんなものかわからないわ。黒魔術なら、少しは分かるんだけどねー」

「黒魔術の方を詳しく知ってるあんたにわたしはびつくりだ」

美更の意外な告白に軽く口をはさむ程度の突込みをしておく。

放っておくと、この子はすぐにボケを連発していくから。

朱鷺川くんは、今はあえて何も言わないようにしているみたいで、わたしとしては自分の彼女の相手くらいしておいてほしいと思うばかりだ。

木浪神美更と朱鷺川正は、わたし達と出会う以前からよく二人でいるところ目撃されていた。

入学して、まだ二週間も経たない内に一組の男女の噂は、わたし達の耳にも少しは入って来ていた。仲睦まじく、男子の方がややそ

つけないように見えるらしいが、それでも問題なく見えていた。

しかし、驚くことに、この二人はつい三日前に交際が始まったばかりだった。

一週間前に、わたし達は科学部で初めて顔を合わせた。

その時に、環奈が臆することなく、直球に尋ねて確かめたのだ。

「……………二人は交際してるのですか？」

環奈の問いを耳にした二人は、それまで兄と妹、若干の年齢差があるカップルのように仲良く休憩していたが、ゼンマイが切れたかのように、ピタリと動作を停止したのだ。

「……………あ、ううゝ、っ——」

その時も朱鷺川くんは、少しだけ難しそうな顔をしただけで、赤面することなく、ただ黙っているだけだったし。

逆に、美更の方は思いつきり赤面していて、もう林檎のように赤かった。可愛かったけれど、朱鷺川くんと目が合つと小さな動物のように縮こまって、ひたすらおろおろとしていた。

それでピンときた。

この二人は、すでに初々しい恋人そのものだ。

それは環奈も理解したらしく、わたしとさほど変わらない感想を述べていた。

だが、彼らにとって、じゃあ、改めて恋人ねとはいかないみたい。しばらく、どうしようもなく重苦しい雰囲気が漂っていた。

しかし、何かと頭の回転が速く、直球なカンナが此処でも頼りになった。

「なら、デートでもすればいいのでは？」

まあ、これが決定打となったわけだ。

そして、一日デートの末、改めてカップル成立。

しかし、意外だったことは、朱鷺川くんの方が最後に告白を切り出したことだった。

彼は何かと受身な体制だと思っていたから、陰から見守っていたわたし達は正直、男だと感嘆してしまった。

その後は、いつものように、時にはいつも以上にベタベタな（主に美更が）二人の関係が出来上がったというわけだ。

見ていて、あらあらとしか感想が言えないのだ、これが。

「第三生徒会室だったかしら？」

「何で、部長なのに部室にいないだよ……」

恋人たちの話の内容より、察することができる人は、理解できているだろう。

今現在、私達は第三生徒会室へと赴いている。

私こと水無神環奈は、それほど化学やら魔術やらに興味はない。

あるとすれば、将来をどうしようかとか、本当の両親を探すべきかとか、自分に関する事だけだ。

「ねえ、環奈。部長の名前とか知ってる？」

私と並んで廊下を歩む奏華が、無垢な表情で尋ねてきた。

横一線に切りそろえられた漆黒のボブカットが揺れ、同じく黒瞳は水晶のように曇りがない。

初めて彼女を見た時、母たちの遺品の中にあつた嵩月奏の写真を思い出した。髪が短いだけで、実によく似ている。

けれど、その性格はどこにでもある一般的な女の子だった。

「？モモさん？というニツクネームくらいしかわかりません。でも、確か男子だったはずですよ？」

先の質問に答え、私は、ふーんとやや興味の薄れた返事をする奏華を再び見る。

今日は、両側頭部より編んだ三つ編みを後頭部で留める髪型だった。今朝、いつも以上にご機嫌な様子だったので、尋ねると「お母様がやってくれたの！」とすぐ眩しい笑顔で答えてくれた。

奏さんは、器用で、優しい。それは私も知っていることだ。

実の娘が甘えるのも無理はないかもしれない。

「大体、何で三つも生徒会があるんだよ。紛らわしいだろう？」

「昔からそうだったってこの間、話したじゃん。宗教的な問題なんだよー。ローマカトリックに、プロテスタント系カルヴァニズム、聖公会系キリスト教の三つの習わしに沿って、それぞれ第一生徒会・神聖防衛隊、第二生徒会・巡礼者商連合、第三生徒会・王立科学狂会があるの。私も詳しい教えは知らないけれどね」

「確か、三つの生徒会でそれぞれ役割分担しているんでしたね」

事前に調べていた内容に則った流れだったので、つつい話に割り込んでしまった。

「そうよ。えーと、第一生徒会は学園の治安維持と運動部を、第二生徒会は委員会を運営していて、第三生徒会は文化系クラブや学業を取りまとめているはず。……。ただ、神聖防衛隊はちよつと横暴なところがあるし、巡礼者商連合は報酬さえもらえればいろんなことをやるけれど、怪しい。王立科学狂会も悪魔や魔術、さつき言った黒科学の研究をするなんて言う、やっぱり怪しい面があったりするわ」

自分の知る以上の情報を得られて、私は少し驚きと戸惑いを抱く。恐らく規模が大きいため、役割分担をしたのだろうが、どうも欠陥部分が目立つような気がする。

「失礼します」

そうこうしているうちに、第三生徒会棟生徒会長室へと行き着いた。

中から入室許可の声を聴き、朱鷺川正が扉を開ける。

「おや、はじめましての人間だな。青さん、知り合いかい？」

「馬鹿者。ここは生徒会長室だ。我が校の生徒ならば、来て当然だが」
——しかし、何用かな？ 見たところ四人とも一年のようだが」

白髪交じりの眼鏡の男子が、訪問した私たちを選別するような視線を向けた。

会話の流れから言って、彼が第三生徒会長で間違いないようだ。

「我が部の部長を迎えに来ました。ここによくいるとの事ですが、科学部部长は、あなたでよろしいのですか？」

朱鷺川正や木浪神美更より前へ出て、私は来客用と思わしきソファーに沈む男子に向けて言葉をかける。

座っているために、背丈のほどは分らない。

髪は薄い茶髪で、瞳の色が青い。外国人かと思ったが、日系の外国人かもしれない。ジャラジャラと首や腕に付けられた髑髏や十字架の彫刻が施された装飾品をぶら下げ、長く嵩月のような礼儀作法を十分にわきまえた家庭いた私としては、それが素行の悪さへと直接つながった。

男子は席を立ち、一つ頷く。

「如何にも。俺は現科学部部长こと百々^{もいじま}似鳥^{ますな}巻砂。皆からはモモさんと呼ばれている。自分的にはモモさんはいただけなのだが、我が部員は無条件で許可しよう！」

後半部分は、正直どうでもいいことだった。

「部長ー、俺ら正直入部したてでなにをすればいいか、わかんないんですけど……」

そう朱鷺川正が発言すると、部長の高笑いしそんな態度がピシりと固まった。

おかしい状況を察したのか、第三生徒会長が訝しげな表情で、

「巻砂^{ますな}、お前まさか、部員放ったらかして、遊んでたのか」

「あー、あははははっ……………わり
い」

乾いた笑いの後に、弱々しい部長の謝罪が生徒会長室に消えて行った。

とりあえず、残りの部員をかき集めて、部室に行くから先に言って待っているとお達しを受け、私達は、来た道をそのまま戻っていた。

第三生徒会棟を出た時だ。

その異形のものに出会ったのは。

「――約定せよ、紺碧玉^{ザフィリア}」

大型の機械が歯車を回すように、軋みを上げる。

そして、機械仕掛けの悪魔を目を覚ます。

「闇より虚^{むな}しき伽藍^{がらん}より広が^{ひろ}りし——其は科学の祝詞^{おもひ}が治める理想郷」

004：襲来（後書き）

急いで更新したので、誤字脱字は見逃してもらいたいです。
でも、とてもひどいのがあったご指摘ください

それでは次回まで、サイチェン再会♪

005：困惑と安らぎ（前書き）

今回は、次回を長くしようと思い、短くしました。

主人公は出てません、よろしくお願いします。

005：困惑と安らぎ

3年前——夜。

月下を映す水面を崩す錦鯉が、数匹ゆっくりと漂っている。

映された月は、そこにあるようでいて、実在しない。

赤と白を纏う姿は、とても鮮やかで、月に照らされる白は銀に見える、赤は銀と化した白により一層鮮明に浮かび上がっている。夜の闇を孕んだ水底や岩陰が黒く彩られ、水中はまるで夜空の様なのだろう。

そこを泳ぐ彼らは、空中を飛行するように——。

「智春さん」

その声を僕は振り向くことなく判断できる。

彼女と僕は、同じ時間を共有しようと誓い、励み、支え合ってきた、人生の伴侶としてお互いを認め合った関係を築きあげてきた。

「……………眠れないんですか……………やっぱり……………」

「奏は、どう思う……………あの環奈という子のこと」

妻の姿を確認することに、苦労はいらない。

昔見た浴衣姿のように、薄い水色の着物をまとい、その肩に萌木

色の上着を羽織っていた。黒曜石のように滑らかできめ細やかな髪は、何物にも縛られることなく、だが、彼女の心の揺らぎを表すかのように、ゆらゆらとまとまることなく風に弄ばれていた。

「私は、信じてみます。……操緒さんは、本当に苦しめられたから、もしかしたらもつと早かったかもしれない。頑張った分だけ、負担も大きかったんだと思います……」

奏の言葉は、言葉足らずだったけれど、核心をついていた。

機械仕掛けの悪魔に生贄としてとられ、魂を蝕まれていた幼馴染。

その命は、限りなく不安定で、吹けば飛んで行ってしまうかもしれないほど、頼りなかったのかもしれない。見える物ではないからわからない、見える物でもあいつは僕らには見せなかったかもしれない。

『………そうか。うん。——尻に敷かれないように頑張んなよー？』

それが、僕の知る彼女の最後の言葉。

彼女の心の最奥に触れた瞬間であり、彼女が僕の下から旅立つ日の前日のことだった。

「あの、冷えますから——」

そういつて、奏は自分の羽織っていた上着を僕の肩に掛けようとした。

「あ、」

僕は彼女の行為を無碍にはしない。

けれど、それは彼女を第一に考えるという僕の考えが矛盾しなければ、問題がないということだ。

「僕がそれを着たら、奏が冷えるだろう？　もう奏は戻っていいよ。僕はもう少しここにいますから」

奏の手を止め、上着を再び奏の肩にかけてあげる。

しかし、奏は困ったように眉を顰め、踵を返そうとしない。

昔から、彼女は意地っ張りなところがあつた。

譲らないところをちゃんと知っている。

昔味わった感覚を思い出す。

「でも、智春さんは、私の旦那さんで、組をまとめる人でもありません。体調管理は、私がします。ですから――」

外にいますのであるならば、と上着を僕に突きつける。

意地を張る奏の表情に、彼女の優しさを感じる。

キリキリと精神力を削られる家業に身を置く者として、この一時はひどく切ない。そして愛おしい。

永遠は望まない――けれど、それ故にこの時間が終わってしまうのが切ない。

闇に触れている――でも、光とともに、むしろ彼女が僕の光で、僕の帰りを待っていてくれている。それが、そんな彼女が愛おしくて仕方がない。

「もう少しここに居ようか……」

突きつけられる彼女の上着を手に、彼女と自分の身体を包み込む。やや固まりはしたものの、奏は静かにその背を預けてきた。

昔なら、こんなことは絶対にやれない。お互いに奥手だの、じれったいと揶揄される遠慮深い性格をしていた。

夜露に濡れる芝を避け、腰を下ろす。

月だけが僕らを照らし、背後の家屋からは物音一つしない。

「——これから、どうするんですか」

目を閉じ、眠ったかと思えば、奏は静かに問いかけてきた。

これから——それは、操緒のことだろうか。それともあの環奈という子のことが。

「奏が信じるんだ。僕も環奈ちゃんを信じてみるよ。奏華の友達にもなってもらえそうだしね」

「……そう、なってくれるといいですね」

「何か不安なことでもあるの？」

僕は、彼女の言葉に何かすつきりしないものを感じた。

僕の問いに、奏は体をやや強張らせ、

「……………ニアちゃん、は、今どこにいますでしょう……………」

彼女を包む僕の袂の一端を握りしめる奏。

そう。気付くべきは、あの天才的な頭脳を持つ金髪碧眼の少女の所在だった。

環奈は、水無神操緒とニア・フォルチュナに育てられた孤児だった。彼女の唯一の所持品であるペンダントを除いて、彼女を識別するものはない。

しかし、ニアという天才に教鞭を取ってもらっていたということもあり、環奈自身の学力には目を見張るものがあつた。

娘の奏華は、学校の宿題を奏に尋ねることが度々あつたが、その様子を見ていた環奈に奏華が興味を持ち、どれくらい勉強ができるのか尋ねたらしい。そして、環奈にわからないところはなかった。

無論、中学校に成り立てのそうかに比べてやや知っている程度だ

が、それでも中学2年半ばまでの知識はあった。環奈は、それ以上に雑学に富んでいた。だから、知識も2年半ばという中途半端な物なのだろう。

雑学というのもアニアの研究によるものが多いらしい。

操緒に拾われ、彼女が他界するその日まで、おおよそ8年だという。それほど期間生活を共にしていたものが、わずか13歳の少女を放置して姿をくらますだろうか。

少なくとも、自分たちの知るニアは、そんなことはしない。

人の運を容赦なく喰らっていたが、それは彼女にとって照れ隠しだと今にして思う。姉に先立たれ、もとより強がりな性格から、さらに虚勢を張っていた。

そんな中、彼女が奏に甘えたり、操緒と悪だくみをしたり、そして僕をからかうことが日々の休息だったのかもしれない。

「ニアちゃん、探さないんですか……?」

その言葉が、胸に刺さる。

アニアのことは本当に心配だ。

けれど、それ以上に僕には守るものがある。

「操緒とアニアのことは、朱涅さんに伝えておくよ。僕にはここで守るべき人たちがいるから、ここを離れるわけにはいかない」

「っ——」

僕はより一層奏を強く抱きしめる。

わずかに腕の中で温もりが熱くなるのを感じた。

005：困惑と安らぎ（後書き）

今回は、前回おいてきた内容の続きです。

二体目の機巧魔神。

そして、その副葬処女は――？

乞うご期待くださいませ♪

006：真実の一端（前書き）

行間を一行あけることが多くなりました。

文を目立つようにしたのだから仕方がないのかもしれませんが、少しすっきりしすぎる気がします。

006：真実の一端

科学部の部長を探し、第三生徒会へとやってきたはずのわたし達。
いや、確かに科学部部长である百々ももいしま似鳥ますな巻砂には、面会した。その場にいた第三生徒会長にも面識を果たした。

そして——異形のモノは現れた。

皮の翼をもち、目を失い、刺々しい身体を窄め、弾丸のように落下する蝙蝠のような生き物。それが狙うのは、一点。
その標準の先には、一人の少年がいるはずだった。

青の巨人。

フルアーマ
全装備で隙間なく、ロボットのようにも見えた。
巨人の両腕に捕えられた怪物は、翼をばたつかせ、解放を願うかのように泣き続けた。

ザファイリア
「紺碧玉、——消してしまえ」

朱鷺川正の意図に従う紺碧色の巨人。腕に魔法陣が展開し、腕そのものも機械で作られた翼を展開させるように拡がった。

『我は問う。――演操者、我が主。汝が望むは、煉獄か、氷河か――』

「彫刻と化せ」

展開された腕の魔法陣に新たな呪印が刻まれる。

それは青白く発行し、腕より空中に四散した。

「ギツ、キシイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイッ」

四散した呪印は、なぜか、異形の蝙蝠の姿を模した生き物の身体に刻まれていた。それも、紺碧の巨人の腕に刻まれていたものよりも、深く、細かいものだった。

刻まれた呪印は流動し、まるでキリキリと捕縛者を締め上げているようだ。それを事実としているのが、異形の蝙蝠の苦痛の叫びだった。

ユキツモリネムリイザサカリキエヤミウマレカノモノネミリハジマル
『雪積眠誘。光消闇生。彼者眠始。』

「――」
断末魔は上がらなかった。

怪物が声をからす前に、呪印が怪物の全身を埋め尽くした途端に、怪物は冷凍されたからだ。徐々にではなく、一瞬にも等しい、瞬きをする合間に怪物は、氷塊に閉じ込められていた。

空中で氷に包まれた怪物は、地響きを立てて地面に突き刺さる。

わたしは、嵩月奏華は、今自分が見ていた光景が現実か夢か、明確な区別ができないでいた。

朱鷺川正は、その腕の中に意識のないと思われる木浪神美更を抱いている。

そして、彼らの背後に控える紺碧色の巨人。

戦闘終了となった時点で、それは静かに地面の中に消えて行つた。宛ら時計塔の中で回る歯車の音のように、重量な軋む音を立てながら、彼らの影へと沈んでいく。沈みきつた後に残つた影は、ゆつくりと朱鷺川正の等身大へと変化する。

「美更を保健室に寝かせてくる」

朱鷺川くんは、わたしの脇を通り過ぎる際にそれだけ残して去つて行つた。

目の前には、未だ威圧感のある異形が翼を広げたまま停止している。

わたしの中に生まれる様々なものは、一つの言葉で片付けられる。

なぜ？

なぜ、あんな怪物が現れたのか。

なぜ、此処なのか。

なぜ、あの巨人が人の影に沈んだのか。

なぜ、朱鷺川くんが、あんな・・・・・・・・・・。

脳裏に蘇るのは、怪物を圧制する巨人。そしてその巨人が影に沈む様子。

「そこの生徒、無駄な抵抗をせずに降伏しなさい」

混乱の渦に沈む最中、複数の足音が背後から忍び寄っていた。振り返った其処には、白い改造制服を着こなす一団と桜の散る黒い扇を構える女子がわたしを取り囲むように陣形を取っていた。

「身元の確認が取れました」

白服の一団をかき分け、紺のスーツに身を包む高校生とは思えない女性が、扇の女子へと近づく。

彼女は一つ、二つ、頷いて、

「嵩月奏華、任意同行を願います」

犯したはずのない罪に恐怖を覚える。

しかし、わたしはもっと意外なことに気が付いた。

木浪神美更と朱鷺川正がいないことは納得できる。

だが、水無神環奈はどこへ行った？

「嵩月奏華、君は先ほど見た異形のモノについて何か知っているか

な？」

尋問されている。

用意された二つの椅子。中世ヨーロッパのゴシック調の椅子に座るは、わたしを含めて二人。

黒い扇を振り、あくまでも上から目線の調子を維持している。

足を組み、腕を組み、優雅さをアピールしているようにも見えた。

「自己紹介がまだだったな、來已咲^{くるいさき}だ。この第二生徒会の会長をしている」

來已咲先輩は、隣に視線を向けた。

そこにはまるで幽鬼のように不気味な男が経っていた。もとはきめ細かくサラサラの髪だったのかもしれないが、今は色が抜け、バサバサと傷んだ髪をしている。

目元には深く隈が浮かび上がり、その商店も定まっているのかも定かではないほど空ろな瞳。

だが、それに相反して、制服が清潔感があり、白く輝いていた。

色白のため、遠目からは全身真っ白な、雪原にでもいれば、その姿は捉えきれないだろう。

「これは、千々丘雪丸^{ちぢあか ゆきまる}。一応こんなのも第一生徒会会長よ」

「はあ……」

わたしは曖昧な返事をする。

突然連行されて、自己紹介されても、大概の人は困るだろう。

もう一度言おう。

わたしは、なぜかあの場にいたというだけで、第一生徒会が所有する礼拝堂地下へと連行された。

もっと正確に言うならば、私は後ろ手に手錠を付けられ、身動きができない状態だった。

目の前のテーブルにお茶を用意されても、どうやって飲みと飲むのか、訊きたいものだ。

「さて、質問を繰り返そう」

來已咲会長は、紅茶を一口。

そして、受け皿とカップを両手にもち、確かに優雅なふるまいをしていた。

「あなたは、あの怪物と紺碧色の巨人について何か知っていることはあるのか？」

空気が一転する。

まるで冷水をぶっかけられたかのような緊張を感じる。

獲物を逃がすまいと、今にも食いつかんばかりの眼光をぶつけてくる。

その隣でぼうーっとしている千々丘会長は、特に何も言わない。

それどころか、わたし達の会話に興味を持っていないようだった。

「……わたし、あれについて何も知りません。……ただ、朱鷺川くんたちが何か関係しているかもしれない事しか……」

わたしは恐る恐る答えるが、それで事足りるとは思えず、身を縮めて、來已咲会長の次の言葉を待った。

「朱鷺川と木浪神が関係していることは、もうすでにわかっている事よ。私が知りたいのは、あなた自身が何か知っているのかという事だけ」

來已咲会長は、私にだけ目を向けていた。

それが、何を意味しているのか。

私は直感的に悟った。

私は、何か疑われている。

そう思った途端に、私は今日までの私の行動を走馬灯のように振り返った。

「あ、勘違いしないでもらいたい。私は、君が事件の要因を握っているとは、これっぽっちも思っていない」

「へ？」

思いがけない言葉だっただけに、私は声を漏らしてしまった。

「私たちがなぜ、君を此処に呼んで、尚且つ拘束までしているか。それは偏に君の兄が原因だと言ってもいい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今度こそ、私の口から言葉が消えた。

「まず、これは大前提に聞いてもらいたいのだが、この世界は滅びから修正された世界だ」

来已咲会長は、人差し指を立てて、私に語りかける。

「もともと、この世界は？二巡目の世界？であり、？一巡目の世界？が滅び始めたところで生まれたのだ」

次に中指を立てて、

「そして、世界の滅びを回避するために、人間は？悪魔？と契約をした」

「・・・・・・・・悪魔、ですか・・・？」

「悪魔だ。実際に私は見たことがないから明確なことは言えない。だが、それは人と変わらない姿をしているという」

さらに、薬指を立て、

「世界の滅びを回避するために、悪魔と契約した人間が作り出した存在、それが機械仕掛けの悪魔——アスラ・マキーナ機巧魔神だ」

「・・・・・・・・・・アスラ、マキーナ？」

「機巧魔神は、人間一人を生贄として、もう一人の人間が操ることで動作する。その力は個々に様々なものがあつた。重力制御、空間切断能力、極低温化、時間停止、物質爆砕、物質液化、魔力拡散、大気掌握、——そして、空間制御能力。当時、この空間制御能力という物は、世界の力ギだと言われるほど重要なものだった」

來已咲会長の言葉に、私はただ聞くしかなかった。

重力や空間などと言われても、私には到底わからないことだらけだ。

だが、しかし。

聞きたいことがないと言えば、嘘になる。

これは、会長の話を聞いていて、考察したことであり、実際には間違つていればいいと思う事でもあつた。

そうでなければ、彼は誰かの犠牲の上に力を手に入れているという事になってしまう。

機械仕掛けの悪魔。

そこから浮かぶ一体の巨人の姿。

紺碧色の巨人。

あれが機械仕掛けの悪魔だとすれば——。

「………あれが、アスラ・マキナ機巧魔神？」

來已咲会長は、私の疑問を肯定した。

「朱鷺川正は、木浪神美更を副葬処女と呼ばれる生贄にして機巧魔神『紺碧玉』を使役している」
ベリアル・ドール

來已咲会長は、思っていたよりも、絶大な威力の爆弾を投下した。

そして、より私の疑念が増えることを口にした。

「嵩月奏華。君は、何か異能の力を持っているかい？———そう、御両親のようにな」

006：真実の一端（後書き）

次回。

両親の過去について知った娘が、どう動くのか。

そのあたりを書こうと思っています。

007：錆びた歯車（前書き）

話を飛ばしていました。

すみません。

ごめんなさい。

この話がないと、次話の「メイソウ」に続きません。

ごめんなさい。

007：錆びた齒車

「お父様、お話があります」

嵩月組の組長である智春は、事態に目を向いて驚いていた。一段高い位置にいる自分は、両側にずらりと並ぶ部下たち。彼らも突然破るように叩き開いた人物に、驚きを隠せないでいた。そんな自分たちよりも驚愕を露わにしていなが、確かに動きがぎこちない八伎が、侵入者の下へ赴く。

「お嬢様。今は会議中に御座います。組長へのお話は後程お願いしたいので――」

「了承できません。退いて下さい、八伎さん」

その言葉に、今度こそ八伎は身を強張らせた。

それは、驚きからではない。

彼女、嵩月奏華より感じた畏怖によるものだった。

高座にいる自分には、この状況が良く見て取れた。八伎をはじめ、組員のほとんどが我が娘に畏れおそをなしていた。

そして、智春もその少女の姿に、かつての妻の姿を見た。
瞳に宿る確かに滾っている闘志。

「奏華、一先ず下がれ。お前が話そうとしている話は、大体予想がついている。だから、すぐに会議を終わらす。三十分程度待てるだろう?」

智春は、はじめ組長としての顔を見せ、奏華に圧力を与え、最後に父としての顔を見せた。

それまで、眉間にしわを寄せ、眉を吊り上げていた少女は、自分の要求が聞き届けられたと感じ、一礼して襖を静かに閉じた。

だが、すぐに閉じた襖とは、別の襖が開き、一度安堵した組員が再度表情を強張らせる。

「婿殿、なんやら奏華がえらい怖い顔していたが、何かしたのか?」
会議室に現れたのは、所用で会議に出られなかった先代組長だった。

「何か大事な話があるらしくて、会議室に乗り込んできたんです」
「…………正直驚きました。お帰りになった途端、お父上に面会したいと言い出して、会議中だと言っても、全く聞く耳持たずですみません」

「いや、八丈さんが、気負う必要はありませんよ。?譲らないところは譲らない?。奏に似たんでしょう」

智春の言葉に、先代組長であり、奏の父も、「確かに怒った時の奏に似ていたな」と零していた。

中庭を覗ける廊下を闊歩していたわたしの歩みは、徐々に速度を落としていく。

庭と言っても、そこいらの武家屋敷にあるような数メートル四方の小さなものじゃない。丁寧な模様を描く砂紋や大きな池を含めて、様々なものが点在している本格的な庭園だ。

山一つ丸々敷地なので、普通に散策するだけで、いい運動になるだろう。

しかし、そんな森林浴を楽しめる景色を前にしても、心の中には視界を灰色に霞ませる後悔の身が渦巻いている。

やってしまった。

奏華は、後々母にお叱りを受けるだろうと覚悟を持とうとしながら、縁側に腰を掛けた。

だが、腰を落ち着かせたところで、転がりだした——いや、自ら転がしたモノは元には戻らない。覆水盆に返らず、だ。

『君のご両親はね、かつては世界を救った英雄だった。父親である夏目智春は、幼馴染を副葬処女にして機巧魔神を操り、母親である嵩月奏は悪魔の名家のご令嬢としての姿を持っていたんだよ？』

第一生徒会の所有する礼拝堂で、來已咲会長より聞かされた話が脳裏に流れた。

聞かされた時点では、話の半分程度しか信じようとしてなかった。だが、両親の名前が出た途端に、奏華は恐ろしくなった。

父が、他人の、それも幼馴染を犠牲にして力を手に入れていたことに。

そして、母が人ではなかったという事にも疑い、虚実であることを願った。

しかし、來已咲会長から聞かされた話には、悪魔の話も含まれていた。

『悪魔とは、失樂園や怪談で話される存在とは、全くと異なる存在なんだ。外見は私たちと変わらず、人間の容姿を持ち、その身に宿す力のみが彼らの異形を表すもの。その力は様々で、氷だったり、風だったり、雷だったり、そして嵩月家は炎を操る家系だった。それもただの炎じゃない、地獄の業火という、炎系の最上級能力だ』
ここまでであれば、漫画やアニメに出てくる超能力者と大差ないだろうと考えていた。

しかし、あらゆる事象に副作用や代償があることを知った。

『悪魔は世界に拒まれる存在、本来いない存在だ。それを根絶やしにする一派もあれば、保護しようとする一派もあった。だが、彼らにとつて、最も重要なことは魔力を消費して力を行使することで、自身の存在が軽薄になっていくこと。』

？非在化？と言ってね、雄型悪魔の場合、愛した者の記憶を失う。

これは恋愛小説などといった《愛》に関するもので代用が利く。だが、雌型悪魔、つまり君のお母さんの場合はそうもいかなかった。

雌型悪魔の非在化のパターンは、言葉通り存在を消される』

奏華は、その話を聞いた瞬間、身の内が凍る思いだった。

その現象が死に直結するものと、すぐに理解することができたからだ。

もし、その後に雌型悪魔が非在化防止のために人間のパートナーを必要とすることを聞いていなければ、すぐに母の下へ飛んで行っただろう。

悪魔と契約した後、二人の関係の鎡かすがいとなる存在【ドウター使い魔】という契約者の男性を守る存在が生まれる事、そして両親の場合、それがペルセフォネであることを知った。

使い魔は、ペルセフォネのように火蜥蜴サラマンダーであれば、氷の鳥の場合も、軟体のスライムのようなものなどと様々だという。それは家系

によるものもあれば、個々に発達したものも存在するらしい。

契約方法は、言葉通り？約束の契り？らしい。つまり、公言しにくい、熱烈な愛情表現。

だが、その悪魔も、機巧魔神と言われる機械仕掛けの悪魔も、【世界の滅び】とともに消え去ったらしい。

【世界の滅び】を前にして、それを打開しようと下は多々あれど、他の人々はそれをついぞ達成することはできなかったようだ。

しかし、今がこうしてあるという事は、誰かが現実のものとしたということ。

それはわたしのよく知る人たちだった。

夏目智春。

嵩月奏。

水無神操緒。

アニア・フォルチュナ。

この四人が【世界の滅び】を防いだ。

アニアさんは、操緒さんを通して知っていたが、そこまで交流はなかった。けれど、その人柄は、操緒さんの話から伺えた。思いやりのある、ちよつと素直じゃない人。

彼らの名を聞いた時、わたしはなぜか納得をしてしまった。

納得に至る思考の海で、わたしは父の言葉を思い出していた。

『奏華、お前は絶対的な運命を前にして、何を願いたい？』

数年前、小学生の娘に選択云々の話をする、やや気弱な面を見せる父。

あの人が、わたしに投げかけた言葉は、当時のわたしには難しいだけのお説教にしか感じられなかった。

けれど、今なら、少しわかる。

あの言葉、きつと世界を救う過程であの人が、あの人なりに悩んで、苦しんだことを言っているのだ。

でも、どんなにすごい事しても、人の上にある成功には憤りを感じる。

だが、父は確かに大きな選択を前にして、？確固たる決意？を持っていたのだろう。

そう、わたしは想像する。

ならば、わたしが選ぶモノは？

それが何なのか、何を求めているのか、何のために、何を犠牲に。

選ぶ時、わたしはその選ぶことの重さを知り、それに耐えられるかどうか、自信がなかった。

「先程会議を中断させてしまった事、お詫びします」

相對する娘が深く頭を下げている。

その姿は礼儀という物を知っているようにも見えるが、事実形だけで、話を進めたい思いという胸中が感じられた。

だが、それは彼女の親である自分も同じ。

この子がどこで、何の要因によって、あの事実を知ったのか。

私達はそれを知りたい。

そして、何よりもこの子に害をもたらす存在を遠ざけ、最悪消さなければならぬのだ。

「・・・・・・奏華・・・・・・」

私は自然と愛娘の名前を零していた。

だが、顔を上げた彼女は、娘の瞳には強い炎が宿っていた。

かつて彼がわたしも同じ目をしていることを語っていた。その時は、決まって私が譲れない、譲らない問題を前にした時だったと思う。

そうでなくても、？本気？を決めていた。

「——話は、朱湮さん、知り合いから聞いている。でも、一応訊いておこうか。何の相談なんだ、奏華？」

私と、彼と、わたし達の娘を残した重い空気の漂う部屋で、ようやく話を切り出した彼は、何かあったということを察しながらも、その事項を本人から訊き出そうとする。

きっと私も訊こうとするけれど、一度線を引かれれば、身を引いてしまう。

彼が切り出してくれたことに感謝する。

奏華は、深く、静かに呼吸し、

「お父様、お母様、わたしにお二人の過去をお聞かせ下さい」

向けられた視線と放たれた言葉を跳ね除ける事は、もうできない。いつかは話さなければならぬ。

そう考えて、でも、知らない法が良いも知れないと思っていた。

我が子に向ける愛情と、信頼を左右する真実を隠していたことの罪悪感。

「お母様は、？悪魔？だった。そうですね？」

先に話の矛先を向けられた私は、的中する事実^{かなで}に身を震わせた。知られてしまった恐怖。

「^{かなで}教えなかった罪意識。
「奏」

私の隣に構えていた彼が、私の肩に手を置き、諭すように名前を呼んでいた。

そこには、答えよう、知りたいこと全てをこの子に答えようという意思が感じられる。

掌に感じる湿り気と上昇する心拍数。

私は一度目を閉じ、

「はい。私は、悪魔でした」

「なぜ、わたしにその事を教えて下さらなかったのですか？」

娘の言葉が胸に刺さる。

でも、答えると決めたのだ。

「隠そうと、思っていたわけではありません。もう、この世界には悪魔も、その悪魔に対抗する、機巧魔神という物も消滅してしまった。だから――」

「もうこの世にない物だから、話さなくも良いと？」

「違います。すぐく、危険なものだから。私は、私達はあなたが大切だから、そういうものに関わってほしくなかった」

「でも、わたしはもう知りました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこで私はどう答えればいいのか、見失った。

この子に対して、何が幸せなことなのか。

わからない。

わたしには、わからない。

「お父様、あなたは幼馴染を生贄に機巧魔神の力を手にしていたんですよね？」

私が答えを詰まらせたことで、矛先は彼に向けられた。

でも、その言葉は、良くない。

「――言葉を選んでください」

私は声を張っていた。

普段大声を上げない私を見て、空気が震えているのを感じた。

でも、どんなにその言葉が正しくても、どんなにありありと表現されていたとしても。

そんな言葉で、彼と彼女のことを語ってほしくない！

体に熱が籠る。

目頭が熱い。

かつて未熟さから激情した時、無意識の全身から炎を放っていた感覚を思い出した。

私が勝手に激昂していると、不意に頭に大きな手が被された。

「奏、少し落ち着いてくれ。話が進まない」

誰かくらい解っている。

私が長年想いを抱き続け、その想いを受け止めてくれた人。

「怒ってくれたのは、うれしいけれど、本当のことだし、でも、操緒は後悔してないと言ってくれた。それで十分だよ。——でも、奏華。奏の言う通りだと思う。操緒に対しても失礼だから」

「……………ごめんなさい」

智春さんの言葉に、謝罪する奏華。

私も、諭されたこともあり、心が落ち着く。彼の感謝の言葉に癒される。

娘の失言を顧みても、彼が赦したのならば、私も赦そうという気持ちになる。

「すべて話そう。僕らの過去を、そしてお前が選ぶ道の助けとなるために」

「まず、僕らの過去を話すには、この世界の成り立ちについて話さなくちゃならない」

「何故そこまで拡がるのですか？」

「僕の兄、夏目直貴なおたかが異なる世界の僕だからだ」

父の話が始まり、最初のところでわたしは躓いた。

もう一人のお父様が、伯父にあたる人？

訳が分からない。

奏華は、機巧魔神や悪魔、世界の滅びが存在していたことは聞いていたが、『一巡目の世界』が存在することは聞いていなかったのだ。

「この世界は『二巡目の世界』なんだ。二番目の世界、つまり一番目の世界が存在するんだよ。『一巡目』が終末を迎えようとした時、この世界『二巡目』が始まった」

「つまり、お父様は『二巡目』の人間ですが、伯父様は『一巡目』のお父様となるわけですか？」

「そう。巡りが良いな。僕はさんざん悩んでわかったのに……」

わたしの物分かりの良さを褒めてくれた父は、かつての自分の愚鈍さに苦い顔をしている。

だが、すぐに復活して、咳払いを一つ。

「『一巡目』の僕曰く、僕は？保険？だったらしい」

「保険？ 何のためのですか？」

「アイツは『一巡目』の世界を救えないから、未来に、『二巡目』に希望を見出したんだ。そしてその目的を達成できなかった時、僕らがその役目を引き継ぐように仕組んでたんだ」

奏華はその言葉から考えた。

伯父が世界を救おうとしていた。

けれど、実際世界を救ったのは、伯父ではなく、父たちだった。

ならば、伯父は――。

「『一巡目』の僕は、ある人の策略に嵌まり、殺されてしまった。そして、彼の思惑通り、僕らは世界を救う保険として動いていたわけだよ」

奏華の予想通り、伯父はすでに亡くなっていた。

顔も合わせたことのない人だが、その墓石は見たことがあった。

「アイツは特殊な存在だったんだ。『二順目の自分^{ボク}』と統合することもできず、悪魔となり、機巧魔神の演操者でもあるから、世界の拒絶は激しかった。普通の悪魔よりもはやい速度で非在化していたんだ」

「……………伯父様は悪魔になったのですか？ もともとは人間であるのに？」

「悪魔という存在は、『二巡目』にやってきた『一巡目』の人間で、その子孫たちのことを表すんだよ」

新たな事実。

けれど、もういちいち驚いていられない。

わたしは知る決意をしている。

ならば、全部受け止めなければならない。

「科学部に所属していたことは知ってるか？ 僕がまだ機巧魔神や悪魔なんてものを知らなかった頃、中学入学当初、僕らは海外旅行に行こうとして、飛行機が墜落。操緒は僕を助けるために、自ら副葬処女になった。勿論、はじめは知らないから、単なる幽霊が憑いている、くらいにしか思ってた。だから、操緒がもとの人間に戻れた時、僕は報われた気がしたんだ」

わたしは、黙って聞いている。

昔話を語る父はどこか哀愁を滲んでいる。

罪意識を感じているようにも見えて、だけれど、抱えているすべてを知ることできないことが、かえってわたしの心にも引つ掛かりを持たせる。

「僕が奏と出会ったのは、高校に入学する直前だったなあ。僕は母の再婚と高校入学をきっかけに一人暮らしを始めて、その晩、奏は引越して間もない屋敷に忍びこんできたんだ」

「え？」

秘められた過去の話を聞くはずだったのに、なぜか両親のなれ初

めの話を聞かされそうになり、母の意外な行動に思わず声を上げてしまった。

母も、そんな言い表されるとは思ってたらしく、けれど、事実らしい。赤面して、うつむいているだけで、何も反論をしようとしてない。

「まあ、実際、揉め事から守ろうとして、屋敷にあった？イクストラクタ？を回収しに来ただけなんだけどね。？イクストラクタ？というのは、機巧魔神を召喚する際に演操者の体内にナノマシンを注入するトランクのことで、悪魔と神聖防衛隊がそれを取り合って争いを起こすんだよ」

「……基本的なことを聞きますが、なぜそんなものがお父さんの引越先の屋敷にあったのですか？ 当時は何も知らないただの幽霊憑きだったと思うたのでしょうか？」

「それがね、全部アニキ、直貴の仕組んだことだったんだよ。黒崎朱理っていう人がそのトランクを昼間の内に僕と操緒のモノだと言っただけで行った」

やれやれと言った様子を見せ、あ、その人は僕らの先輩で、破天荒だけれど、結構助けてもらってたんだよと父は付け足した。

「わかんないなりに、やれることをやっていこうと考えて行動していたけれど、結局は全部思い通りに行動させられたんだよ。――

――そりゃあ、そうだよ。だって、自分自身のことだもんね。今だろうと、昔だろうと、世界が違ってたって、自分のことくらい理解できるだろうさ。だから、僕は目の前に怒っている事だけでも、自分の力で解決できるようにしようとしたんだと思う」

静かに、かつての自分を顧みる父。

わたしは何を聞くべきか悩んだ。

父の中では、きっとすべて解決しているのかもしれない。

けれど、それはわたしが知るところじゃないし、もしかしたら、今も何か残してきた問題に悩んでいるのかもしれない。

「――最終的に、お父様とお母様は、何をしたかったのですか、

話を聞く限りでは、世界を救うなどという前に、自分自身のこと
で悩まれているようにしか聞き取れなかったのですが？」

最終的には、直球で尋ねるしかなかった。

他に言葉を知っているわけではないから、仕方がない。

「僕は、みんながいる世界を救いたかった。大切な人といつまでも一緒に居たかったから」

「私は、智春さんのことを知りたかったんです。どんな時もこの人の隣で、どんな彼も見逃したくなかった」

わたしの両親は、後悔のない真っ直ぐな瞳をしていた。

結局、わかったことは変わらない。

わたしの両親は、決意を以て、自分の行動に責を以てして行動したという事。

果たして、わたしは何者で、兄はどこにいて、選択とは何のだろう。

わたしの胸の中で渦巻く問題は、さらにその輪廻を大きくしていた。

娘に過去を語り終え、夜も更け、彼は自分の寝室で差し込む月光を見つめていた。

「……………智春さん」

襖の隙間から覗くように現れたのは、やはりというか己の妻だった。

「……………よかった、んでしょか……………」

「奏華に話したのか？」

「……………はい」

奏は静かに手に手を握り、その定まらぬ瞳には、後悔の色が浮かんでいた。

しかし、その気持ちもわからなくもない。

何せ、自分たちはまだすべてを話したというわけではないのだから。

智春は、月光に瞳を揺らめかせる奏の肩を静かに抱く。

「……………大丈夫だよ、奏。智直はきつと無事だよ……………」

「……………」

「……………でもっ!？」

夜更けの静けさに奏の声が反響する。

智春は右手を支えに、泣き崩れる奏をより一層強く抱きしめる。

彼女の痛みによる涙は、自分の傷に静かに浸透していく。

智春は視線を庭先のどこというわけでもなく、ただ虚空に一人の少年を見ようとしていた。

——
智直^{ともなお}、一体お前は何をしてる？

朱湮からの報告を秘かに受けていた自分たちは、彼女の兄の詳細についてだけは語らなかった。

007：錆びた歯車（後書き）

両親の過去話を聞きだした回でした。

次回からは間違えないように気を付けます。

008：メイソウ（前書き）

次回予告といいつつ、これまで何度か伏線を立てていきましたが、次回に伏線が説かれていないことに気づきます。

すみません

008：メイソウ

つい先日、と言っても昨夜のことだが、礼拝堂とその周辺が損傷した。

そのことについての事後処理の書類が、第二生徒会にも回ってきた。

当事者であるから、書類に目を通すというのは、当然かもしれないが、これは本来第一生徒会の仕事であると考ええる。

あそこの役割が治安維持であるから、それが破られたことに対する責任はあちらが負うのが正当だろう。

しかし、そういう現状が控えているにもかかわらず、第二生徒会会長のデスクには、二、三本の書類の塔が立っていた。

こうして書類整理を手伝っているのだから、自分はあの男に甘いと考える来已咲音姫おとめだった。

千々丘雪丸ちちおか ゆきまるという男子は、来已咲音姫にとって、なかなか、そこそこ、まあまあ、いや、絶対不可欠に大切な存在であることを述べておこう。

「音姫おとめ、書類を持って行っただろう」

そんな彼女にとって大物は、やや眉間にしわを寄せ、会長室の扉を開けていた。

「そんなに怒らないでほしい。あなたのことを考えての行動だと少しは察してくれるとうれしい。そしてその功労に対する言葉をくれると、さらにうれしいな」

悪びれもせず、むしろ笑顔でそう言ってみる。

堂々とした直球な言葉だが、それでは彼は靡かない、揺るがない。「いいから、書類をよこせ。それはこちらの仕事だ。勝手をされては困る」

そっけなく、背後に控えさせていた部下にピサの塔の如し書類を

運ぶように指示する。

お茶でもいかがと誘ったが、余計な手間が増えてしまったため今から仕事だ、そう返して第一生徒会長は、第二生徒会室を後にした。

仕事が一気に減ったために、音姫はお茶の時間としゃれ込む。

本当なら、先程帰って行った男にも付き合ってほしかったが、それはもういい。

「ふふっ」

自分の手に残る一枚の書類。

それは鍵付の引き出しに閉まっていたものであり、先日の事件報告書だった。

『重要参考人：高月智直』

そう書かれている欄を見て、先日二人きりで過去話をした仲である我が校の女子生徒を思い出す。

高月奏華。

彼女は彼の妹であることは間違いない。

もし間違いがあるのであれば、この重要参考人が本当に高月智直であるかという事だろう。

まあ、そこはどうでもいい。

子供の一人や二人。それもまだまだ心の未成熟なガキがどう考えようと、世界は揺るがない。

問題は、この被害をもたらした異形の数々。

デウス・メッセンジャー
？神の分離体？。

何の目的で現れたのか。

それは分からないが、その結果行われたことがある。

嵩月智直の奪取。

彼が何の関係があつたのか。

奴らは何の目的で彼を利用するのか。

『神より産み落とされし——我は血肉に憑きし科学の魂』

人と機械の身体を持った少女。

『神によって拾われ——我、この世に加えられし者』

獣を模した、かつての自立型・機巧護衛機カスタム・マキーナに酷似した獅子。

『神が手によって操られしみちびか——我が身は科学に染まる悪魔の力』

まがう事無く、機巧魔神アスラ・マキーナだった。

それらは突然、空間を切り裂いて現れた。

嵩月智直を拘束、監査していた礼拝堂地下に。

黒崎朱湊によって、確保された彼は、睡眠薬によって意識を失っており、そう簡単には目攻めないだろうと、彼女は言っていた。

それで安心したわけではないが、油断はしていたのかもしれない。

突発的な奇襲に、誰もが反応できずに、されるがまま攻撃を受け、負傷。

礼拝堂地下は崩れ、地上まで穴が開いた。

埋もれずに何とか這い出てきた私が見たものは、機械の翼でそれを浮遊する白髪の少女。

その少女に抱えられた嵩月智直だった。

意識を失ったのは、そのすぐ後。

報告としては、苦しい物となる。

雪丸には、失態を慰められながらも、注意され、

朱湊先輩は頭を抱え、

嵩月夫妻に至っては、夫人が声を殺して泣いていて、それを嵩月氏が静かに肩を抱いていた。

今後自分たちがすべき行動は、大きく見て、世界の真実を知ること。

なぜ、悪魔が再び生まれたのか。その経緯は。

必要とあれば、嵩月奏華も利用することになるかもしれない。

家に帰りたくない日がある。
それが今日この時だった。

お山の坂道がきついからでもない。
仰々しい八伎さんや組員の人たちが出迎えてくれるのが、嫌だからではない。

父や母がわたしに隠していた現実を知ったからではない。

目標を失ったからだ。

洛芦和高校に入学したのは、ある人からあそこに入れば、もしかしたらいい情報が入るかもしれないと教えてもらったからだ。

偏差値が高いわけでもなく、超教派的なところがややあるだけの普通の高校だと思っていた。

初めて両親に洛高に入学したいと言った時、二人は驚いたような顔をしていた。

誰からあそここのことを聞いたのかと聞かれたが、それは聞くほどのことではないと考えていた。

生徒会が三つもある学校なんて、あそこくらいだし、オカルトな

噂が多い事でも有名だし。

まあ、その時は叔母さんが話してくれたと、誤魔化した。

でも、さらなる真実を知ったわたしは、これから自分にできる事が何か、見出せなかった。

今日、再び、今度は自分から第二生徒会を訪れた時、わたしはそこ入ろうと思っていた。

けれど、それは来已咲会長の話によって、言い出せないまま、終わった。

「嵩月智直。それが君の探し人だろう？」

なぜか知っていた。

どこで知ったのか。

「なるほど。でも無理だねえ」

長年探し続けていた。

それだというのに、？あの人？は昨夜洛高に現れたというのだ。どこに行ったのか。

どうしてやってきたのか。

どんな姿をしていたのか。

聞きたいことは山ほどあるのに、会長はそれを突っ撥ねて、拒否をした。

「だって、君と彼では存在的に別次元のものだからだよ――」

―彼は悪魔さ」

悪魔？

その言葉は、確かに、わたしにとって別次元の存在を表していた。
嫌悪するほどではないが、いい気分はしない。

何よりも人ではないというところに、違和感と不安を抱く。

だが、より問題なのは。

悪魔だとして、わたしはトモナ才君に何をしてあげれる？

その一点が、わたしの疑念と崩落を加速させた。

「美更、部活に行かなくて良かったのか？　いつもは俺に來いって言い続けてたのに」

朱鷺川正はやや嫌味を交えつつ、隣の席に腰を落ち着かせない彼女に言う。

ぼーっとしているようでいるけれど、その足は絶えず貧乏ゆすりを起こし、持っている本もここに来て一ページも捲られた様子がない。

もはや一行目の文は覚えてしまった。

「――俺から伝えてやってもいいんだぞ」

己の秘密を暴露する勇気がないのであれば、その片棒を担うのも相棒の務めだろう。

しかし、美更は首を横に振った。

「自分で伝えるわ」

すくっと、起立し、座っていた場所に文庫本を置く。

そいつは、振り返らずに、言った。

耳の端まで赤くするところが、どうしようもなく、子供っぽく、しかし、嫌いじゃない。

「ありがとう」

一言告げるのに、どれだけ緊張してんだか。

朱鷺川は、走り去っていく美更の背に、

「あまり離れるなよ、半径500m!」

そう叫んで、忠告する。

実際、その範囲から抜けたことはないが、もし万が一出ようものなら、強制的にぶっ倒れる。

俺、朱鷺川正は『紺碧玉』^{ザリフィア}の演操者である。

それは、同時に木浪神美更の命を奪うものという事にもなる。

『紺碧玉』の副葬処女は、木浪神美更。
これに間違いはない。

ならば、疑問を持つことだろう。

機巧魔神という存在を知る者にとって、木浪神美更は存在が矛盾している。

機巧魔神の贄となったものは、基本的にシユバルツシユルトの闇によつて別次元に取り込まれる。そして機巧魔神の中枢にあるカプセルに封じられた副葬処女を砕かれれば、死に直結する。

現実への干渉は、基本的に演操者、悪魔、霊感の高い人間にしか見えないはず。触れることなどできない。

しかし、美更は視認されれば、触れることもできる。

その答えは、機能拡張端子。

過去に？安定装置？というプラグインによつて、一般人にも視認される副葬処女もいたようだ。
だが、自分たちが使用したのは、そんなものの比じゃないと言えるだろう。何しろ、見えて、触れて、温かいのだから。

プロジェクター
投影装置。

『紺碧玉』の能力は、？条件結界？。演操者の任意で、ある程度まで空間を歪め、世界を創造する。

「傷を負わない」結界ならば、いくら切られようが、撃たれようが、

痛みも傷もないという風に。

範囲も指定できるが、最大でも一キロが限界だった。

これが木浪神美更とどう関係するのかというと、投影装置は映像を座標に映し出すと同時に質量も反映させている。

これによって、木浪神美更の第二の身体が生まれるというわけだ。

そして次に、『紺碧玉』の能力で、？二つの対象を接合？させる。射影体である美更を人造の身体に重ね、接合させる。

これでおおよそ完成。

だが、これには『紺碧玉』の能力を定位的に更新しなければならなかったため、本来ならば、あまりつかえたものではない。

機巧魔神は贅である美更の魂を削らなければ、稼働しないからだ。

しかし、木浪神美更は、笑いながらこういった。

「短ろぅが、長かろぅが、太けりやいいのりよっ」

クサイ台詞を吐いておいて、噛む。

どうしようもない。

まったく、救われるよ。

008：メイソウ（後書き）

本当にいろいろやろうと思っていましたが、今回は一度ここで止めます。次回からです。

次回には、あれこれやった後に、一度ほのぼの学園生活に移行しようと考えています。

009: Nightmare 1 + Decide + (前書き)

三部ほどに分けて、「真実編」としようと思います。
まずは、主人公の意思表明とします。

「本当に知りたいことは、自分の手でつかむものだよ。その掴んだ代償に何が待ってようと、それを求めようとしない限り、求めた代償も存在しない。要は行動しなくちゃ何も始まらないってこと」

それが誰の言葉だったか。

「差当り、あなたの叔母ちゃんからは、この学校をお勧めすることくらいかな？」

そこで思いだした。

わたしにその学校案内の資料をくれた女の人。

わたしの叔母に当たる一人の女性。

そのみや かずは
苑宮和葉さん。

言う事はためになるけれど、時々大胆さを感じるあの雰囲気。

父とは血の繋がらない義理の兄妹だという。ならば、わたしとも血は繋がっていないことになり、戸籍上の関係であるが、やはり義理でも兄妹だと感じる面があり、どこか面持というか、纏う空気という物が似ていた。

だからだろう。

わたしが、初対面の女性に対して、十数分で心を緩めたのは。

「けれど、良く考えなくちゃだめだよ。あなたが思っているほど、あなたのことを思ってくれる人がいるか否か。あなたが見たほど、みんながそうであるか否か。誰にだって、わからないことがある、他人のことも、——そして自分のこともね」

「人生振り返る前に、夢で現実を砕く方がよっぽど難しくて、失敗した時、痛いんだから」

わたしには、難しい話だった。

これからどうするか。

学校にいる間も思いつかないし、かといって帰ってくればそれで前より居場所がないように感じるし。

そう考えた時、ふと思い出したのが、父の妹で、わたしの叔母に当たる苑宮和葉さんのことだった。

和葉叔母さんは、今までに五回も会った事のない人で、面識はあったけれど、おのずと会おうとして会えるような人じゃなかった。

というか、今どこに住んでいるだったけ？

何処かわからないけれど、多分まだ旅行中のはず。
いくらなんでも長い新婚旅行だ。

苑宮和葉は、現在獅子倉^{こしぐら}和葉へと名が変わった。

それがつい一年前のことだ。相手はよく知らないが、話ではそれほど悪い人ではないらしい。というよりも、世間的にはやっと結婚したかという感じが嬉しい。

まあ、三十過ぎても独り身で、実母の店を守ろうとしていたし、此処だけの話、おばさんは意外とブラコンだったという。

あれやこれやと何かをする時、困ったときにはいつも父に相談を持ちかけていたらしい。

しかし、何はともあれ、ご結婚おめでとう。それじゃあ、新婚旅行はどこにしよう。海外に知り合いがいるからそのあたりに行けばと両親が進め、じゃあ、海外で。そうして旅立ったのが、一年前だ。長すぎるよ、叔母さん。

実際手紙こそ送られるが、電話はなく、今どこにいるのかすら不明だ。

「というか、操緒さんたちいないのに、まだ海外にいたのか……」

環奈が来ているのだから、操緒さんたちがなくなった事は確かだし、——もしかすると、環奈が叔母さんたちのことを知っているかもしれない。

動き出したのは、衝動的、突発的なもの。

「確か、この時間は大原酒店でバイトかな……」

「もう終わりました」

「——あつそ」

縁側で一人黙々と、ぐるぐると悩んでいるうちに、時間は刻一刻と過ぎていたようだ。当たり前だけど。

「おかえり」

「ただいま。何をしていたんですか？」

いつもはサイドテールにしている髪を今はポニーにしている環奈。恐らく、動きやすいようにとの事だろう。髪留めをほどこき、バサバサと緊張をほぐすように髪を振る。

「環奈はさ、向こうで獅子倉和葉って女の人に会ったことない？」

「獅子倉、和葉、ですか。確か奏華のお父さんの妹ですね。確か一年前にご結婚して——というか、奏華。私は三年前にこちらに来ているのです。海外で会えるわけがないでしょう」

「あ」

言われてみればそうだ。

まったくもって考えが浅慮だ。

どうにかしてる。

わたしは何を考えていたのやら。

もしかして焦ってるのか。

自分に何ができるかわからない故に、自分ではない誰かに答えを求めているのか。

「ふう」

ばかばかしい。

もうどうしようもなく、アホらしい。

自分以外が自分を導いてくれるのなら、これ以上ないくらい楽しいのは決まってる。

指示を出してくれるのだ。自分はその指示に従ってれば、いいのだ。

けれど、それは機械と同じだ。

プログラミングされた命令をこなすだけの作業用ロボット。

「考えが足りないな」

「そうですね。奏華は些か考えが甘い」

「はつきり言いますね」

そう言い返すも、やはりその通りなのだろう。

わたしはまだ考えて、選ぶには、経験も知識も乏しいのだ。

「それはあなたが此処にいるからではないのですか？　こんなところで赤く染まる日を眺め、呆けている間にも世界は回り続けます。終わり続けます。始まります。真実を知ってしまったのでしょうか？　ならば、それを受け止めるか、否定するか。二つに一つなんですよ」

「悪魔や演操者だった両親のことも、朱鷺川と木浪神のことも、――そして嵩月智直のことも。すべてあなたが一人で決める事です。あなたは一人では何もできない。けれど、決断だけは一人でしなければならないのですよ」

「おや、我が部員君」

そんな誰とも判別付かない呼称をされ、一応の思いで振り返る。すると、そこには茶髪と青目とじゃらついた装飾品が特徴の我が部の部長・百々ももいじま似鳥ますな巻砂が、第三生徒会長に後ろ襟首を掴まれ、地面に足を引き摺っていた。

「ども」

「はい、こんにちは。丁度良い、我が部員よ。青さんから僕を開放

してくれ」

わたしは状況の把握に混乱しながらも、どちらが悪なのか見定めようとした。

しかし、なんとなく、部長に非を感じる。

ふるふる。

白髪交じりの「青さん」は、静かに首を振った。

「何もしなくていい」と、言っている。

いや、実際に言っていないが、そう感じた。

「あの、部長」

「何かな、我が部員よ」

「失礼します」

「何故だっ!？」

少々騒がしい先輩をよそに、わたしは第三生徒会長に会釈して立ち去ろうとした。

「嵩月奏華」

呼び止められたことに、疑問と不安しか感じない。
だが、それも考えすぎだったようだ。

「青井^{ひのとみ}丁巳。それが私の名だ。「青さん」と呼ぶよりは呼びやすく
なっただろう。——それと、あまり考えすぎるな。わからないこ
とを考えるより、わかっていることがどこへ繋がっているのか、そ

う考えたほうが建設的だ」

わたしが何を言われたのかを理解する前に、第三生徒会長・青井丁巳さんは、騒ぐ子供のような部長を引き摺って町の方へと向かっていった。

ふとしたところで、思わぬ人と遭遇。

しかし、青井会長の言葉は思いの外、わたしに活路を見出していた。

「僕のことはどうなってるんだ――――！！！！」

「お前への説教なら、これからいくらでもしてやる」

「扱いがひどいっ！？」

伯母の言葉を思い出し、友人に諭され、先輩方（会長だけが）にも助言をいただき、わたしはとある場所へと向かっていた。別にそこへ行って何か決意を固める物があるわけでもないけれど。一人でいたい。そう思った時、ふと思いついた。

めいおうてい
鳴桜邸。

洛芦和高校に入学すると決まった時、叔母が父に此処の力をわたしに渡してほしいと預けて行ったらしい。

わたしにとって、和葉叔母さんは不思議な人だけれど、その不思議さに少し憧れる部分はあった。

「うわっ、埃っぽい」

実家からでも、此処からでも洛高には通えるけれど、もし友達を集めてお泊り会や勉強会をするとすれば、間違いなく、実家ではなく、此処を選ぶ。だって、顔に傷のあるスーツの人が徘徊する場所じゃあ、落ち着かないでしょ？

とはいっても、此処に来るのは、まだ片手にも満たない回数だったけど。

最近使われた様子はなく、当たり前だけれど、籠っていた空気と外の新鮮な空気が入れ替わり、まるで家そのものが生きているように、空気を吸い込んでいた。

舞い込む気流により空中に散布される埃が差し込む陽光にきらめく。

誰も使っていないとはいえ、せめて定期的な掃除を使用とは思わないのか。

あ、そういう意味では、わたしが掃除すべきだったのかもしれない。此処の鍵を受け取っているのは、わたしで、スベアがあるのかはわからないが、わたしが知る限りではこの一本のみ。わたし以外に来る者もないこの家は、わたしが来なければ、単なる幽霊屋敷のなのだった。

「でも、電気も水も通ってるんだよね。もう少し有効活用しよう」
家のあちこちの窓を開け放ち、空気の循環を促す。

そして、わたしは一階の奥部屋で、非常倉庫のような扉を見つけ

た。

どこの一般家庭にでもあるような、普通の扉。

どこかおかしいと思えば、おかしいし、おかしくないと思えば、それほど気にならないようなもの。

わたしは変だと思った。だから、開けてみるのは、自然なことだ
と思う。

この時、もし、？あれ？が、？黒いあれ？が出たらという考えは
少しもなかった。

それどころか、この扉を開ける事が、わたしという存在を明確に
するかもしれないという予感もした。

変だけれど、その扉を開けるという事が、わたしに新たな光をも
たらすのでは、まだ隠されたことが明示されるのでは、と思っ
てしまっ

た。そのパンドラの箱から出てくるものは、必ず希望だと思っ
ていたこと。

それがいけなかつたんだと思う。

希望は入っている。

けれど、その前にはありとあらゆる、この世に存在するすべての
不幸が、不吉が、良くない物、災厄が詰まっている。

それがパンドラの箱なのだ。

出てきたのは、一冊の本。

銘を『MEMORIAL』

著者は、嵩月智直
明之城あけのじょう琴葉ことばとなっていた。

009: Nightmare 1 + Decide + (後書き)

次回は「Nightmare 2 + Memorial Book
+」になります。

長らく滞りましたが、ようやく更新です。

しかし、猛暑ですね。わたしはもうノートPCのキーボードが暑くて、そのたびにやる気が霧散します。

それではよろしくどうぞ♪

『MEMORIAL』という一冊の書物。

著者は、あけのじょうこ 嵩月智直、明之城琴葉。

片方は兄の名前だが、もう一方は見たことも耳にしたこともない名前だった。

見たところ、何処にでもあるような日記帳のようにも見える。厚いハードカバーで表紙には『MEMORIAL』。裏表紙に二人の名前が刻まれているところを見ると、特注品とみて間違いないかもしれない。

しかし、問題は、何故こんなものが此処に、それもこんな見つかりにくいところに保管されていたかということだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

特注品であると思われるが、これには鍵が付いていなかった。

よって、いつでも中を覗き見る事は、容易だ。

また、奏華の目的は嵩月智直を探し出すことである。

明確な理由はない。

だが、当時5歳だった自分は、兄である智直にとっても頼り、甘えていた。

色褪せない記憶の中の自分たちは、今ほど難しく物事を考えずに過ごしていた。

ブラコン、ではない、はず。あの叔母にしてこの姪ありなどという事では、絶対ないとは思うのだが、やはり少し思うところはあるかもしれない。

いるはずのない人が、いない。

いた人が、いない。

それだけで、わたしの中の何かを明確に狂わせているような気がしてならない。

カチリ、カチリと回る歯車の先端、プラモデルのパーツを綺麗に

切り取れなかった部品のように、違和感な凸面がある。本来かみ合うはずの歯車との間に異物があることによって、噛み合う瞬間が遅れ、さらにその歯車は周囲の歯車にズレを伝える。

つまり、わたしに？魔？が差したのだ。

わたしの手が表紙を捲ろうとした時、彼女は現れた。

『ダメエエエーーーーッ！！！！』

突然上がった叫び声に、わたしはびくりと肩を揺らし、背後を振り替えた。

青空に羽ばたく金色の鳥。

周囲の目を引くような涼音の声。

そんな女の人がわたしに飛びかかっていた。

けれど、その人の身体を透して、わたしは外の光を見た。

奥部屋に差し込む夕焼け色の光を。

「これより緊急会合の開始を宣言いたします」

八伎の声に四方より緊張が漂う。

旅館の一室。本来十数人が宿泊できる大部屋に、現在四名家の組長、補佐が集っていた。いずれも威圧感を放ち、突き刺すような眼光で他の三家の様子を図っている。

かつては上位の悪魔としてその力を振るっていたが、現在は地主や治安を統括する立場を持つ彼ら。

花鳥風月。

雷を操る華島家。かしま
とりしま

氷を操る鳳島家。かざとき

風を操る風斎家。たかつき

そして、炎の嵩月。

四名家は牽制し合い、時には争い、時には助け合う。そんな力の均衡を持つ関係性を持っていた。

「で？ 結論だけ言ってくんね？ 何で俺達を呼び出したんだ――

――智春」

「蹴策殿。進行はこちらが行いますので、焦らないでもらいたい」
黒を基調とした蒼い氷の刺繍を纏った着物を乱した男が、眼前の男に問うが、それは男の補佐役であり、今回は進行役の八伎によって止められた。

「ちつ。さつさとしろよ」

頭をかき、面倒くさそうにだらける。

彼こそは鳳島家現組長・鳳島蹴策。とりしまひやく隣に並ぶ鳳島氷羽子の実兄で

ある。かつては悪魔として力を酷使し続けたが故に氷羽子の記憶を失ってしまったが、悪魔を含めた『一巡目』の遺産が消滅したことにより、記憶を失う大元の原因に矛盾が生じたのか、徐々に記憶を取り戻した。

そして、未だにぎこちなくはあるが、氷羽子と兄妹の絆を回復しつつある。

まあ、だからと言って猪突猛進な行動原理が修正されたわけではないので、彼は単純明快を好む故に話を先走りすぎる傾向がある。いつも一番に会合会場に現れ、一番に帰っていくのだ。

「言わなくても、お前以外は大体話そうとする議題について察して
るみたいけど？」

「ああ？」

間の抜けた声を上げ、他の二家を蹴策と智春は目を向ける。視線を見蹴られた両家は、ええ、まあ、と合間な返事をした。

「だったら、はやく話せよ！ もしくは酒を出せ！」

「無茶言うな！ 今は会合中だ！」

「知らねえよ！ 俺は早く帰って飯を食いたいんだよ！」

「先に食べてから来いよ！！」

そんな男二人のやり取りを横に、女性陣と残り二人の男性は、要点をまとめようとしていた。

これだから頼れる妻や妹たちは有り難い。彼らはもう少し彼女らを見習うべきだろう。

そう冷静に考える男二人は、華島迅^{じん}、風斎雨情^{うしよ}と言う。

彼らは、女組長である華島家と風斎家の婿養子である。性格は両者ともに、蹴策のような短気激情タイプでも、智春のように不幸に嘆く女々しい性格でもない。智春の女々しさも、組長となった今はほとんど形を潜^{なり}めたが、こういった顔見知った長い付き合いの人間の前では、姿を現すようだった。

「智直君の行方について、手掛かりは見つかりましたか……」
「……」

雨情はそつと奏に尋ねた。

だが、誰もが予想した通り、彼女は静かに首を振る。

「・・・・・・・・・・いえ、まだ——でも」

「ええ。大丈夫でしょう。何しろ貴女と彼のお子さんです。何があつても無事でしよう。——まあ、彼の不幸遭遇スキルは不安ですが」

氷羽子は、奏を慰めるつもりでいたが、兄と胸倉を？み合う嵩月組組長の姿にかつての少年の実態を見つめた。

幼馴染からヘタレと言われ、部活の先輩のパシリとなつたり、その他にもあらゆる厄介ごと（奇々怪々なオカルトチックな）を引き付ける薄幸少年だった。

「つ——、う~~~~つ」

氷羽子の言葉に、涙目ながら奏が恨めしく、けれど誰を恨むわけにもいかず、ただ唸っていた。

「いい加減、その反論できない時の癖をお止めなさい。いい年してはみつともない」

氷羽子は容赦なく、奏を諷める。

しかし、それを誰も咎めないし、止めない。これは鳳島氷羽子なりの優しさであり、愛の鞭という物だと理解しているからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「睨んだって駄目ですよ？」

「氷羽子さんのいじわる・・・・・・・・」

奏は口で氷羽子に敵わない。

これは長年の付き合いから、すでに判明している事だった。しかし、どうしても、お決まりでもいいからそう言わずにはいられない奏だった。

「まあまあそれくらいにしておきなさいな。それよりもお二人の兄さんと亭主がバカ騒ぎしている間に状況を簡潔にまとめましようよ」

そう言い出したのは、華島家現組長だった。

華島志織^{しおじ}。かつて雷獣キヤメロンといろいろあつた華島由璃子似の天真爛漫なタイプ。どこことなく、顔立ちも似ている面があり、一見ただけでは、由璃子の娘のようにも見間違ふけれど、実際は親戚関係であり、従兄妹でもなければ、姪でもないという。

「今までの最大被害があつたのは、洛校らしいですけど、こちらの学院も被害はあるようですよ。それに？悪魔？は確かに存在します」

志織の言葉を後押しするように、最後の女性が意見を述べた。

紫陽花柄^{あじさい}の紺色の着物を纏い、前髪や毛先は横一線に。いわゆるオカッパなものを後ろだけ伸ばした髪形。

風斎^{ふうさい}燐歌^{りんか}。彼女の手には、蝶を模した炎が散る愛用扇子。それを開いたり閉じたりを繰り返し、時折楽しそうに笑みを浮かべる。

「何か面白い事でもあつたのか」

迅^{じん}が妻にそう尋ねると、燐歌は最上級の微笑みで以て、

「智春様と蹴策様は、ホントに仲がよろしいと思ひまして。――
ほら、喧嘩するほど仲がいいと言ひますから」

燐歌の指摘に、全員がそちらを向く。

「表出ろや、白黒つけてやらあ！！」

「上等だ！ 今日こそ静かにしてもらうからな！！」

智春と蹴策は互いの襟首をつまみあげ、額をこすり付けるほどの至近距離で睨み合っていた。

その脇で八伎が静かに頭痛に苦しんでいるが、もはや彼に止められる状況じゃないので、仕方がないと言えよう。

「智春さん」

「お兄様」

八伎に止められないというだけで、その他にも止める事ができる人物はいる。

「いい加減にしてください！！！！」

「は、はいっ！！??」

妻と妹に一喝され、男二人は反射的に背筋を伸ばし、正座になる。それから五分ほどの間、奏と氷羽子によるお説教が行われ、場は収まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・それでは、改めて現状報告及び対策案の提示を各々してもらいたく思います。まずは華島家よりお願いします」

八伎の呼びかけに華島家組長華島志織が頷く。

「私どものところには、他の組にも入っている情報くらいしかありませんよ。強いて言えば、息子の在籍する学園にまで魔の手が伸びているということくらいでしょう。今月までに現れたのは、全部で三体。いずれも撃退できたようですが、被害状況から言って復旧には時間がかかると思いますよ」

今回の招集は、以前から知らされていたこの事項に加えて、とうとう洛芦和高校にも魔の手が伸びたためである。

だが、事務的な仕事を妹の氷羽子に頼りっぱなしの蹴策が騒いだために、先の騒動が生まれたのだった。

「確か華島家のご子息と風斎家のご息女は同じ学園に在学しているのでしたね」

「はい。二人とも頼りになりますよ」

悪魔でなければ、なお良かったんだけどね、と志織は苦笑いなが

らそう言った。

華島家組長の息子、華島^{よしみかず}誼和。

風齋家組長の息女、風齋^{みか}美伽。

この二人は、嵩月奏華とは別の学園に通っていた。

洛芦和高校と同じくらい有名な学園。

【聖ソフロニア学園】。

洛校に比べて歴史は浅いが、全寮制の学園で、洛高に引けを取らない敷地面積を持ち、設備も充実。相違点と言えば、洛校が各部門に生徒会を設立しているのに対し、聖ソフロニア学園は中高一貫の学園だという事だろう。

現在彼らは、高校二年と中学三年生である。

年齢でいえば、誼和^{よしみかず}が17。美伽^{みか}が14である。

二人は組長であるが、母親として志織と燐歌の中が良好だったために、幼馴染として過ごしていた。その為、自然と近い仲でもあり、同じ進路を歩んでいる。親の目線から見ても、仲睦まじく、しかし、組としては少々不安があり、この先跡取り問題などを踏まえるかどうかというのが不安要素だった。

だが、少なくとも卒業までは見守るつもりだった。

華島誼和に問題がなければ、だ。

それに対して、両親も警戒し、問題を知った当事者たちも視野に入れているが、それは先送りに過ぎない。

やはり、懸念しているのだ——悪魔の力を。

議題を再開させたのは、雨情だった。

「現状として、この被害を？はぐれ眷属^{ロスト・チャイルド}？の仕業と考えていいのか、

否か」

志織や燐歌の胸にある次世代の心配を知ってはいるが、それについてこの場で問うのはお門違いだ。

「しかし、？はぐれ眷属ロスト・チャイルド？が生まれるためには、悪魔との契約の後に契約者から見捨てられるという行程があります。しかも、現在悪魔ロストの数がどれほどかわかっていません。被害だけ見れば、？はぐれ眷属・チャイルド？が原因ですけれど、一概に彼らが現況とは言えせんわ」

「けれど、氷羽子。ここ数年僕たちが確認した悪魔の数は、かなりの数アスラ・マキナがいる。そりゃあ、昔に比べたら少ない。けれど、悪魔も機巧魔神も消滅したこの世界では、その存在はかなり異質だ。そして異形だ」

智春の言葉に、続いて奏も意見を唱える。

「自分の好きな人が悪魔だった。けれど、それでも一緒に居たい。」

——でも、使い魔ドクターの存在までは許容できなかったとしたら・・・

・・・？」

その結果は間違いなく、？はぐれ眷属ロスト・チャイルド？。

悪魔が再び生まれ始めたこの世界だからこそ、そんな現状が生まれてしまう。

「では、その大元の元凶も調べてみましょう」

「大元の元凶？」

燐歌の言葉に志織が聞き返す。

大元の元凶。

それは——

「何故、悪魔が生まれるようになったのでしょうか？」

その言葉に、誰もが口を閉ざす。

かつて己が信念を、理想を互いに突き通そうとして、二つの勢力

が生まれた。

一つは過去を捨て去り、傷を忘れて新たな世界を。

一つは過去を受け止め、抱えた痛みと想いと共に未来へ。

結果として、この世界は未来を得た。

過去とは未来へ続く道だ。

故に、過去を捨てたものに未来は来ない。

痛みも悲しみも胸に抱え、それでも未来を求めた者たち。

彼はこの世界も、この前の世界をも救ったのだ。

よって、かつての世界の遺産も消えた。

遺産とは滅んだり、引き継がれた者のことだ。だから、救われ、

持続し続けた「一巡目」の世界から残されるものはなくなったのだ。

その結果が悪魔の力の消失だった。

しかし、数年前。

異能の力を持った少年が現れた。

彼は自由自在に好きな場所へと移動できる、瞬間移動能力保持者だった。

彼をはじめとして、次々に世界に異能者が現れ始めた。

そして何の因果か。

悪魔の出現する場所の多くは、かつて悪魔と呼ばれた存在が多く存在していた場所だった。

そう。

此処に集う四名家の血縁者には、多くの悪魔が生まれていたのだ。

「智春、お前ん所はどうだ？」

蹴策の曖昧な問いに、智春は片眉を吊り上げて、目だけで問い返す。

「だから、嵩月組の知り合いでもある潮泉の方に異変はないかって聞いてんだよ」

「もしかして、一巡目の超絃重力炉のことを言ってるのか？ あれならものの見事になくなってただの洞窟になってるよ。でも、一応地崩れしたら大変だから、封鎖してる。けれど、調べたかどうか？ いえ、まだ調べてない。そもそもあそこが何か関係してるのか？ だってほんとに何も無いぞ？」

「いいから、そこを調べる。もしかしたら、何かあるかもしれない。お前が決着付けた時もあそこだったんだろ？ なら、何かしら縁^{えにし}つてもんがある。それこそ世界の綻びつてもんがな。杞憂だっつか？ そんなもんいくらあっても足りないんだよ。あり得ると少しでも思うなら、そこを当たれ。とにかく探せ。目的のモノじゃなくても何か見つかるかもしれないだろう。いつまでも息子に逃げられっぱなしでいるんじゃないよ」

「・・・・・・別に、逃げられてるわけじゃ・・・・・・」

蹴策のいう事は、調査法としての射ている。そのため複雑そうな顔を智春はする。

「智直くんと言えば、黒崎朱湊さんからの報告では、とても複雑な事情を持っているようですが？」

「ああ、途轍もなく厄介な状況になっているだろうな」

黒崎朱湊は、智直の両親である嵩月家をはじめ、他の四名家にも本部である王立科学狂会と同様の報告書を提出していた。本来は嵩月家にだけ送ろうと考えていたが、智春が送らせたのだ。

これまで嵩月組のみで搜索を少しずつやってきたが、今回の報告書によって、それでは手遅れになることが明らかになったからだ。

「・・・・・・演操者でありながら、悪魔か。いや、悪魔でありながら演操者になったのか？」

「どちらにしてもあいつがこれ以上能力を使い続ければ、通常の何倍もの速さで命を削ることになるだろう。その前に、こちらで保護

しなくちゃならない」

だが、そう言った智春だったが、誰にもそこには問題があることを知っていた。いや、問題という問題も明確にわかっていない。

「智直くんを見つけるにしても、まずは？ 神の分離者？^{デウス・メッセンジャー}という奴らを見つけないかならないな」

迅の言葉は適切であり、それ以上の考えが誰にも浮かばなかった。よって、誰もが口を閉ざし、会合は一時沈黙を孕む。

「ならば、差当りは潮泉家の地下洞窟の調査という事でよろしいでしょうか？」

沈黙を破り、会議内容をまとめようとする八伎。

しかし、そこにまた待ったがかかる。

「それだけでは足りないでしょう」

「何かあるの？」

志織の自分の夫の言葉に耳を傾ける。

「何事にも穴という物がある。調査も搜索もそうだ。けれど、それはある一定の目線をそろえているからであって、対処法としては目線を上下させればいい。だが、私たちの他に力を残している者はそう多くない。嵩月組の先代くらいだろう。よって、今回は目線を下げて、調査を行う事を提示しよう」

「つまり？」

迅の遠回しな言い分に、他の六人は集中する。

なんとなくわかつている者もいたようだが、まさかといった思いで彼の次の言葉を待っていた。

「子供たちにも協力してもらおう。幸い、そこそこ仲は良さそうだからな」

華島組の息子、^{かしましみかず}華島誼和。

風斎組の息女、^{かざときみか}風斎美伽。

この二人は同じ学園に通い、それなりの仲に発展しているため、

咄嗟に互いを助け合えるだろう。

嵩月組の息女、嵩月奏華。

彼女もそれなりに戦闘武術としての面を持つ「炎舞」の修行で、自分の安全を確保するくらいの危機察知はできるだろう。

しかし、問題は彼女が一人だという事。

なぜならば、

「……………蹴策も氷羽子も子供居ないよな」

「まあ、な。少し前までは見合いしろって言われてたが、もういいだろう？　いつそのこと分家から組長だしても」

「私も、今更見合いするのは面倒です。何よりも今は仕事の方が有意義ですから」

蹴策と氷羽子の意見を聞き、その他の全員が微妙な顔をする。

この二人は、どうも自由奔放というか、唯我独尊というか。とりあえず、似たり寄ったりな兄妹という事か。

「しかし、どうしましょう。これじゃ、嵩月さんの御嬢さんが一人あふれてしまいますね」

みんなで誰かほかに連れてこようかと相談している間、

「智春さん、環奈ちゃんはどうでしょうか？」

「僕もそれは考えたけれど、多分ダメだと思う。一応組の人間で動くわけだから、部外者がいたら、他の組から文句を言われると思う」

「そうですね。でも、他に……………」

「ないよな」

智春と奏が密かに話をしていると、

「黒崎さん呼べばいいんじゃないですか？」

誰が言い出したのかわからないが、その言葉に智春は思った。

波乱な予感がする。

『お願い、トモナオを悪く思わないで』

それが、彼女が自分の名前を名乗るよりも前に、口にしたことだった。

両側頭部にまとめられた黄金の麦穂のように輝く髪、トルマリンのような水の青を映した双眸。整った顔立ちに、やや病弱なものを感じさせる白い肌。

目を覚ますような青い衣服は、彼女のプロモーションをよく表している。つまり、彼女はわたしなんかよりもずっと大人の妖美を孕んだ凹凸の激しい体形をしていた。

一目で彼女は美人だし、自分より年上だとわかった。

『私とトモナオは、フランスのリヨンというところで出会いました。私は孤児院で過ごしていました。けれど、その日は……色々ありまして、孤児院を出て行くことになったのです。その理由というものが『これ』です』

彼女は不得意らしく、扱う日本語は綺麗すぎて、却って違和感を覚えさせた。

「ああ、……」

わたしは声を失うほど、目の前の女性に見入っていた。それを何と形容すれば、適当か。

それは、やっぱり、——鬼。

髪の一部をまとめた側頭部の団子。

そこに隠されていたものは、白く、鋭い二本の異物。

古来より妖怪の一種としてされていた異形の生き物。

『私はもともとは普通の人間、だったと思います』

そう言った彼女の言葉には、力強さというか、断言したという感じがなかった。

『17歳の誕生日が近づいた頃です。髪を洗っていると、硬い物が指先に当たりました。それが何なのか、わかりませんでした。年下の子供たちにはない感じです。けれど、痛くもなければ、具合が悪くなるわけでもなく、むしろ、日々力が付く感覚でした』

孤児院で彼女は生活し、他の子たちよりも年上で、子供の面倒見が良い彼女は、子供たちからも好かれ、院長も信頼を寄せていたらしい。

そのため、少しずつ力が強くなっても、ますます頼りになる程度にしか思われていなかったのだろう。

『そして半年後、友人が気が付くのです。私の頭から？角？が生えていると』

それから彼女はいつも髪を束ね、頭部の角を隠すようにしていた。幸いしたのは、角の長さがせいぜい五センチ程度で、髪を盛ればばれないかもしれない程度だったこと。そして、それを初めて知った友人が院長やほかの子供たちに言いふらさなかったことだ。

『それでも私が他と違うという事は、悪魔の力が制御し切れなかったために周知の事実となります。そして私は、とある組織に引き取られ、経営難だった孤児院はそのおかげで継続することができたそうです』

秘密とされていても、成長し続け、制御の難しい人外の力は通常社会の中では重荷にしかならなかった。そして、人離れた力を発揮する彼女を皆次第におかしいと思い始めた。

彼女はそう淡々と語るが、わたしはその証言に隠された真実に行

き着く。そして、なぜ彼女は、という思いを抱いた。

「……………それって、結局は身売りされたってことじゃないですか。わかってるの？」

自然とわたしの口調は強いものとなった。

それはわたしが彼女を憐れからの偽善か、それとも憤りを感じているのか。

どちらにしても、わたしはともその扱いに対して不満を抱いていた。

「あなたは孤児院経営のためにお金と交換された。それくらい解るでしょう？」

「はい。でも、私はあそこにいたらもっと、それこそ周りを巻き込んで不幸を招いていたと思いました。本当に任意同行のようなものでした。私は自ら進んで出ていくことを選びました」

「けれど――」

わたしが何かを言う前に、彼女はわたしにこぼれそうな笑顔を向けた。

「確かに私は追い出されたようなものでした。しかし、そうではなくては私は運命の人とは出会えなかったでしょう、その一年後に」

その人はとてもつらそうな表情をしたけれど、それでもその表情の裏には一時の幸福を味わい、満たされていたことのわかる光を瞳に宿していた。

『あなたのお兄さんは、嵩月智直は私の生涯唯一無二の愛した人です』

なんとなく、そんな気がしていた。

だって、この人の語る話には、理不尽でありながらも損ことを引き摺っている様子は少しもなかったから。

そして、その過去との決別に区切りをつける勇気を与えたのは、他ではない彼女の語る人物であると直感的にわかつていた。

『私の名前は、明之城琴葉あけのじょう ことばと言います。トモナオの妹さん、あなたは私が彼と伴ともに生きていくことを許してくださいますか？』

琴葉さんは、あの後すぐにいなくなってしまった。

幽霊なのかも知れないけれど、結局は彼女がどうして其処にいたのだろうという疑問に戻ってしまう。兄との関係性は、彼女自身が認め、断言した。

トモナオ君は、一人じゃなかった。

そのことがとてもうれしい。

けれど、兄を支える事が出来ない妹からしたら、齒がゆいものがある。

琴葉さんは、兄の居場所について何も教えてくれなかったし。何故か。

なぜ今更、わたしの前に現れて、揺るがすようなことをするのか。わたしはもう居ても立っても居られない。できる事ならば、すぐにでもここを飛び出して、兄の下へ駆けつけたい。

でも、それが正しいかどうか。

判断できるほどの余裕と勇気を、今の私は持ち合わせていなかった。

「奏華、いい加減それを見せてくれないか。その中にアイツの手がかりがあるかもしれないんだ」

父の声に、母の視線に、わたしは身を固く閉ざして日記を抱きしめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・でき、ない」
「何でだっ!？」

父と母がわたしの部屋の入り口を塞いでいる。

視界を閉ざし、何も見たくないと意思表示をし続けた。日記を両腕で抱きしめ、背を丸め、誰にも触れられないようにする。

しかし、不思議なことに、わたしはそうして、父に怒鳴られても、絶対に正しい事をしているという自信があった。

さながら、これはわたしのモノであるかのように。

「奏華っ!！」

父の荒げる声に、一度だけ身を震わせた。

何も見えない。それまで誰も触れる事がなかったのに、わたしの肩に触れるものがあつた。

この手。この温もり。

お母様だ。

閉ざした視界の代わりに働く触覚で、わたしは母を捉えていた。しかし、身は少しも緩むことはなく、きっと母は固い何かに触れているような感覚だったかもしれない。

「——智春さん。出直しましょう」

「だけどっ!！」

「ダメ、です」

「・・・・・・・・わかった」

人の動く気配の後、扉が、閉まった。

どれくらい経っただろう。

わたしは少しも身動きせずにいた。

気が付けば、夜になっていたのか。

消えた意識を覚醒へと導きつつ徐々に思い出して行った。

そう。わたしはこれを守っていたんだ。

わたしは琴葉さんから言われていたんだ。
だから、此处まで抗った。

初めて、両親と対立した。

「これを預けたいです、妹さん。でも、この本は開けては駄目です。あなたに渡しますのは、これがあなたにとっても、大切なものだからです。でも、決して開けないでください。もし、あなたがこれを開けるようなことがあるのであれば、それはとても、とても困ったときだけにしてください。お願いします」

そう言われた——気がする。

こういったのは、わたしと琴葉さんがいつ別れたのか。それが分からないからである。

けれど、あつたという事実は確かにわたしの中に存在していた。目の前から透明化が進んで見えなくなったのではなく、本当にいつ会話を区切り、視界から外し、聞く耳を他所へと向けたのか。まったく覚えていないのだ。

「それでも、開かなくちゃならない時。その時は決心してください。生きる事を、負けないことを、選ぶことを。あなたは全てを受け止める決意をしなくてはならないのです」

今は、命の危機でもなければ、どうしても困ったときでもない。けれど、どうしよう。

わたしはとても知りたくなかった。

最後に、わたしが見たのは、夜の闇よりも暗い、いつか見たとても真っ黒な影だった。

日記帳から現れたのは、すべての真実を孕んだもの。

そう。

これは、パンドラの箱だったんだ。

010: Nightmare 2 + Memorial Book + (後書き)

次回は「Nightmare 3 + Girl meets boy」になります。

ついに兄妹邂逅というところになると思います。

思っていた以上に、進みが悪くなっています。

一応、あれこれやってみてはいるのですが、「あれ？ これってメイン誰だったけ？」となっています（泣き）。

もう少しプロットを練り直してみますので、今回はこれで悪しからず。

「あれ？ 今だれか通らなかったか？」

「え？ いえ、誰もいなかったと思いますけれど……」

嵩月夫妻は、帰宅して間もない自宅の庭先を見やる。

しかし、手入れのされた木々や砂利文様だけで、そこには誰もいない。

「それよりも奏華のことです。話しておかないといけないことも、たくさんあったのに……」

「ああ、わかってるよ。さっきはごめん。取り乱しすぎたよな」

「いえ、私も本当は……」

「僕が話すよ。あの本のことも気にかかるけれど、まずは話を聞こうと思う。もし、あいつが行きたくないと言ったら、それは仕方ない。ペルセフォネと一緒に残ってもらおう。調査

が済んだらまた話をしに行こう。今度は何でも聞いてやる。アイツの考えている事を全部受け止めて、それから智直のことを考えていこう」

智春と奏は、執務室に書類を置き、自室で着替えてから、再度奏華の部屋に向かった。

一方、彼らとは別行動だった八伎は、部下に会議の内容を説明していたため、嵩月家の正面門が堂々と開かれたことに気が付かなかった。

しかし、不自然なことに門は開閉された事実はなく、見張りの部下も何も知らないことになっていた。

報告がないことにより、誰もが偽られた情報だと知り得ないのだった。

私にはおそらく秘密がある。

それは自分でも意識できない領域に隠された、真実ともいえ、正体ともいえる事実。

私は誰だろう。

私はどこの誰だろう。

——孤児である。これは是か否か。

最近違和感を覚えるようになった。

それは指のささくれがやや気にかかるような感覚。

記憶にも不具合がある可能性がある。

記憶の欠落があるのが良い証拠だ。

誰かは、夢遊病だと言う。

ある者は、二重人格だと言う。

どちらなのかもしれないし、両方なのかもしれない。

私は自分を保つために、それはあえて見ないようにしている。

己の心に何が住み着き、息を潜め、どこまで私の根幹に喰らいついてきているのか。

そもそも血縁なきこの身が、此処まであの人と似ているという事実だけでも驚くべきことであり、追及すべきことだと思う。

何を言えば、先祖の血縁を。

だが、問題は常に湧いて出たアイディアとともに生じる。

私は両親を知らない。

育てられた孤児院もどこか忘れてしまった / 果たして本当に記憶したのか。

物心着いたのはいつだったのか / そもそも成長の段階があったのか。

何よりも――。

+ + +

鉄材木材の山、未完成の建設現場に私はいた。

周囲をビニールシートが覆い、中の状況を隠している。
だから、誰も騒がない。

建設現場が騒がしいのは当たり前だから。
少し鉄材が崩れても、誰も気には留めない。

そこに子供が巻き込まれたとしても、人気がなく、作業時間外の
此処に人は来ない。

私は、自分の状況にさほど驚かなかった。

なぜ、私が此処にいるのか。なぜ、こんな状況になっているのか。
そう考えても、わからないからだ。

そしてより大きな疑問は、何故、私の裂けた腕の中にあるものが、
筋肉繊維ではなく、機械のコードなのかだった。

確かに筋肉の部分はあったらう。

その証拠に赤く生暖かい物がある。より赤い液体がこぼれてくる。
けれど、不思議なことに痛いと思うことも、命が失われていく気
もしない。

だというのに、一瞬でこの腕が自分のものだ理解できたことが
恐ろしい。

一般的に、自分の腕が、体が機械だったと知ったら、拒絶するの
が通例だ。拒絶故に痛みを感じる。

だが、私はこれを受け止めた。
受け入れた。

一部として認識した。

認めたのだ。

奏華、私は普通の——いえ、生き物ですらなかったんです
ね……………。

洛芦和高校は、多くのものの始まり。

多くのモノがこの学園でいろんなものを学んできた。

それは勉強に限らず、人生という大きな道でもたくさんのモノを学ぶ。学生生活というものは、少なからずそういう面を持っている。洛校という場所は、ある人にとって、そういう勉強以外の人生を左右する大きなイベントが多々ある学園であると、僕は考えている。

洛校の地下に建設した個人実験室。

ここは訪問を許可されたものにしか侵入を許されていない場所。

数重のセキユリティ^{トラップ}ロック。

それよりも多大な^{トラップ}数の数々。

しかし、どうしたことだろう。

此処、モニター兼研究室に自分以外の人間が二人もいるのである。

「やあ、少年。どれくらいぶりだろうね、こうした顔を合わせるの
は。おや？ その状況を見る限り、二人はなかなかの仲に発展した
と見える。どうだい？ 当たっているかな？」

眼鏡をかけ、髪をすべて掻き上げた、いわゆるオールバックな髪
形をした男。

不健康に見える蒼白とした肌と、身なりに気を使わず、機械に埋
もれる姿はまさしく研究者の気配を放っていた。

「そういう話をしに来たんじゃない。それで、登校していたのか？」
訪問者は、彼の言葉を流して本題に入ろうとする。

彼も出来心で、そうちょっと変わった挨拶代わりのつもりだった
のだろう。でなければ、正確によるものだ。

「いや、登校はしていない。先ほど報告を受けて調べ始めたが、ど
うやら目的を持って行動しているらしいよ。けれど、それが何処ま
でかは判断できないね。だが、それほど離れていな

い」

画面には、町の全体図が映し出されていた。そのほかにも、数字
の羅列や携帯の管理会社のものも見られた。

「位置の特定は？」

「現在は………此処洛芦和高校より東北。しかし、その移動速度は歩きではないな。これは、車か。そうでなければ、何者かの手を、それこそ風を司る悪魔とともに

いるのか。何にしても、このままでは『彼女』に追いつくまでに時間がかかるだろう。今すぐ向かったほうがいい。彼女の目的が何であるかは、本人と対面した時にでも聞き出せばいい

だろう」

拡大された街の地図に点滅する赤い点。それは300mの距離を数秒で移動していた。

「美伽、行こう」

それまで部屋の中を右へ左へうろついていたもう一人の訪問者。黒髪の少女。あどけない笑顔を見せ、自分と呼ぶ少年にすり寄る。その姿は黒猫のような印象を思わせた。

「お話、終わった？」

「ああ、それではな、——塔貴也」

そう言われた男は、一度だけ手を振り、画面へ向く。

「君たちも気を付けるんだよ。美伽ちゃんよしみがずは特に誼和君を気にしてあげた方が良い」

美伽という少女は、いわれるまでもないと満面の笑みを見せ、少年の腕をとった。

「勿論。私の気持ちは日々増大します。心配はいりませんよー。あ、透さんによろしくー」

木浪神美更は、現在洛高前に停車していた車の中に乗り込もうと
していた。

「奏華さんの形態のJPSを利用して現在位置を割り出した。結果
としてそこが『鳴桜邸』であることが判明した」

「『鳴桜邸』ですか。そこはかつて母や智春、奏さんが住んでいた
という場所ですね。なぜ、そんな所に……」

「詳細については、俺たちも知らない。俺たちが言いつけられたの
は、？早急に嵩月奏華を連れ戻す事？だ。そのためには、初対面の
俺たちよりも顔見知りの君たちに応援を頼んだほう

がいいだろうというのが、上からの助言だ」

そういったのは、華島^{かしまじみかず}誼和という少年。

彼の隣で息をひそめて、眠りに着くの女の子は風齋^{かざとぎ}美伽^{みか}という。

この人は乗車してからずっと彼に寄りかかって眠っている。

私たちがこうして、風齋家の車に乗り込み、友人の足跡を負うこ
とになったのは、数時間前のことだった。

登校してすぐ私と奏華が一緒にいないことに、美更が気にしだし
た。

そして、HRになってもやってこないとなれば、担任もクラス全
員も普段無遅刻無欠席のクラスメイトのことを気にする。

嵩月奏華と水無神環奈が住まいを共通していることは大半の人間
が知っている事。

必然私に理由を問う者が群がるというわけだ。

クラスメイトには風邪だと言いつけをしたが、廊下に出たところで

美更たちに「奏華はどこへ行つたのか」と問われた。そして『昨夜、独りでどこかに行くところを見た』という話を聞

かされたのだ。

もはや、嵩月奏華は行方を眩ませたことを隠すことはできなかった。

人気のないところでなら話すことができるだろうと、科学部の部屋に行こうとしたところで、

『1年9組、水無神環奈、1年6組木浪神美更、1年4組、朱鷺川正。至急事務室に來なさい』

その呼び出しに応じるため、私たちは勇み足で事務室に向かった。

「来たか。話は歩きながらでもできるだろう？ 自体は火急なんだ、行くぞ」

事務室で待ち構えていたのは、一組の男女。

年の頃は自分たちと大きな差異はないだろう。

その証拠に彼らは他校の制服を着ていた。茶色のブレザーに黒のネクタイとリボン、深緑チェックのズボンとスカート。此処洛校と同じくらい知名度を持つ【聖ソフロニア学園】の制

服だと美更が小声で言う。

事務室から出て、向かったのは応接室でもなければ、科学部部室

でもなく、校門前に停車していた黒塗りの、良く奏華の父やその部下が出入りする時に乗る、怪しげな車だった。

乗り込んですぐ、

「じゃあ、改めて。初めまして！。私は風齋美伽。かざとき みか こっちは華島誼和ね。かしまよし みかず」

彼らの苗字を聞き、私はやや考える。

しかし、その事について何かを言う前に、風齋美伽は話し始めた。「本題だけだね、嵩月奏華さんは、今現在此処洛芦和高校より東北方面に進行中なの。けれど、その移動速度が速くて走ってじゃ駄目。追いつけないの」

「そこで車ですか。けれど、私たちを迎える意味は？ それに風齋と華島という事は、本格的に四名家が動くという事ですか？」

それに答えたのは、対面した時から粗野な態度を取り続けた少年の方だった。

華島誼和。短髪のしかめっ面。眉間に刻まれた皺が険しい表情を一層恐ろしく見せている。

「組長をはじめとした大人たちは、全ての根幹の追及に向かった。そして俺達は嵩月奏華の搜索及び彼女から真相を聞き出すことを任された。けれど、俺達は彼女との面識は皆無。有っ

ても総会時に会場の控室でちらりとお互いを確認する程度だった。そこで学友であるお前たちが接触した方が何かと都合じゃないかと思っただけ」

少しだけ口元を歪めて笑う誼和。

それがあまりの悪役ぶりの表情に私たちは、少しだけ萎縮する。しかし、そんな張りつめた空気も、美伽のほんわかしだ声に緩んだ。

「そんな顔しないのー。悪者の顔だよー？」

それによつて、今まで話すことのなかった二人にも緊張が緩んだらしい。

「全ての根幹の追及といったな、それは何だ？」

「それに奏華がどうしていなくなったのかも私たちは知らないわ」
正と美更が問う。

前者については私も聞きたい議題だった。
しかし、後者については――。

「何だ？ 水無神環奈は嵩月奏華の失踪について何も話していないのか」

その言葉に正と美更の視線がこちらへ向いたのを感じた。
実際、目と鼻の先程の距離だ。二人に向かい合うように、わたし達は優々と三人で並んで座っているこの状況。

けれど、私は隣へ顔を向けることなく、顔を伏せ、ため息を吐く仕草をした。

「その言い方では、まるで私が友人二人に奏華の失踪原因を隠していたかのようではないですか。訂正しなさい」

「いいや、しないね。実際隠されていたことだったんだろう」

「隠していません。話す前にあなたが来たんですよ」

そついうと、誼和はなるほどという顔をする。

直感だが、絶対こいつは人をからかう事を楽しむ人間だ。

「奏華は、昨日から少し様子がおかしいように思えました。それも今にして思えばという事ですが。しかし、心此処に在らずというような具合だったのは確かです」

私はそれから止まる事無く、昨日のことを話した。

そして、嵩月奏華は、午後10時半自室から誰にも気づかれないことなく、姿を眩ませたのだった。

「——やっぱり、あなたは副葬処女ベリアル・ドールだったんですね」

『はい。そうです。でも、後悔はありません。彼とずっと一緒だからです』

青い服に金髪、そして宝石のような緑の瞳。

日々機巧魔神アスラ・マキナの力と引き換えに感情の振れ幅を失う存在の彼女は、消えそうな儚い笑顔をわたしに見せてくれた。

半透明な彼女が一時も離れず傍に居る一人の少年。

自分よりも年上で、その姿も記憶の中にある姿とあまりも変わっていたが、髪はボサボサの伸び放題、肌も手入れがされていなくて、服は着ているみたいだけど、その上にマントの

ように羽織る白い布は端がボロボロで、初めは白かったんだろうけれど、今は汚れて灰色に変色してしまって、これまでどれだけの障

害があつたのかと窺える姿をしていたけれど、――

――すぐに誰だかわかってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・トモナ才君・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

けれど、彼がわたしの言葉に返事を返すことはなかった。

まるで、永遠の眠りにについているのかのように静かに、ひっそりと息をする実兄。

「・・・・・・・・トモナ才君はどうなったの・・・・・・・・」

「

『回復できるまで眠り続けます。わたしの力も、トモナ才自身の力も使いすぎたからです』

石の寝台に寝かされた彼の周りには、熱を持たない？黒い炎？が燃え上がっていた。

それは全てを飲み込むような、奥の知れない深さのある黒。

琴葉さんの話によれば、これがトモナ才君の？悪魔の能力？なのだという。

炎としての特性を持ちつつも、《重力崩壊の力》があるのだという。それはシュバルツシュルトの間と同義だとも聞かされた。

シュバルツシュルトの間。別名ブラックホールとも。光すらも呑み込む重力の塊。機巧魔神の贄となる副葬処女を取り込む際にイクストラクタ

アスラ・マキナ

ベリアル・ドール

から出てくる黒い影。

この炎にも同じ性質があり、任意で炎に包まれたものを飲み込むことができる。

つまり、これは、トモナオ君の自衛行動という事なのだろう。

拒絶の現れ。

彼はこれまで訳も分からず逃げていた。

本当に、身に覚えのない罪を着せられたように。

『トモナオは何も覚えていません。これまで自分の家族のことは、何も一つ話してくれませんでした。それも悪魔の力の所為です』

「……………ぜん、ぶ、なの……………」

琴葉さんは何も答える事はない。

だが、その態度、表情は否定をありありと表現していた。

「……………トモナオ君のこと、聞かせて……………
ずっと一緒にいたんでしょ？」

トモナオの妹さん。

嵩月奏華さん。

私が初めて恋した人の妹さん。

だからかもしれない。私は彼女に親近感を抱く。

けれど、それは気のせいかもしれないし、勘違いかもしれない。

トモナオは悪魔だけれど、優しい人だった。

記憶をなくしてもそれは同じで、知らない内に私の想いはより一層強いモノになっていった。

けれど、トモナオは彼女をわたし達が関わっていることに触れさせることを酷く嫌がっていた。

『ソウカっていう子だった。そうだ。その子が誰だかもう解らないけれど、俺はその子には普通の平穩の中にいて欲しいと思っていたはずだ』

まだ会って間もない頃、彼は私のそう言った。

自分はいつ記憶を失ってしまうかわからないからだと言って。

だから、もし自分が「ソウカ」に逢えなくても、私があった時に忠告をしてくれって、何か巻き込まれそうになっていたら、平穩に引き戻してくれと言われていた。

「聞かせて下さい」

記憶を辿るのをやめて、顔を上げると、彼女と視線が交わった。

でも、そこにあつたのは、血のように、けれど夜の光のように輝く真つ赤な月。

「妹さん、その眼――」

私はそれ以上の言葉を述べることはできず、妹さんの瞳に魅入っていた。

彼女の左目が、より一層赤く、輝く。

それが何を意味しているのか。

深く考えるまでもなく、それは異形のモノだと直感できた。

自分自身が異形であるだけに、同類は同類を知る。

何よりも、悪魔であるトモナオの妹なら、その彼女もまた、悪魔であることに何らおかしいことはないのだから。

「教えて、トモナ君のこと。他にも私の知らない沢山の？真実？を」

私ハ全テノ過去ヲ彼女ニ話シテシマッタ。

ソレニ何ノ違和感モ抱カズニ。

私ハトモナオガ知ッテイル事、私ガ知ッテイル事、ソシテ――

――
デウス
？神？との契約のことを話してしまった。

何かご質問や此処をもう少し詳しく知りたいという場面があれば、何なりとお申し付けください。

もし、時間とアイデアがあれば、各登場人物の短編くらいは作ります。

予定: 次回「012: Nightmare 4 + Friend
s Anxiety+」

舞台は鳴桜邸。

役者は、すれ違う友。

題目「ライフ」

私が生きるために、犠牲になったモノ。

俺の願いのために、犠牲にしたモノ。

「生きよう、見苦しくも、妬まれようとも、
.....俺は変わ
らない」

+
+
+

では、またの更新を乞うご期待♪

前回までを振り返って、視点がコロコロ変わっていたことを反省しました。

キャラが多くなってきたからかな。

まあ、できるようにやります。

「……………どういことなの……………」

閑散とした屋内に、困惑を隠しきれない声が響く。

近所より幽霊屋敷、おんぼろ屋敷などと称された館——？鳴
桜邸？。

だが、白く埃の降り積もった廊下には、確かに一組の足跡があつた。

これが誰のものであるかなど、誰も尋ねることなく理解できていたが、それ以上に期待も沸いた。

それだというのに——

「どこにも見当たらない。地下室にも気配はなかった」

地下室へつながる奥部屋から帰ってきた正とただしよしみかず誼和。

その報告に、女子三人は肩をえらく落とした。

屋敷の搜索を開始して数分、集合場所であるリビングに全員が集った。正確には、正面で見張り役として風斎の構成員が車の中で鳴桜邸を注視していた。これは屋敷内にいた奏華がもしも逃走を図ろうとした際に対する美伽の配慮だった。

「———そうですか、ありがとう。引き続きお願いします」

現在、美伽は表の構成員からの報告を受けていた。

その様子を見て、誼和は結果を明示した。

「どうやら、本格的にここにはいないようだな」

しかし、その結果に美伽は疑わざるを得ない心境だった。

なぜなら、ここへ向かうようになった原因は、とある筋からの情報をもとにしたものであるからだ。性格や人間的相性はあれど、信用はできる人物だ。彼の情報が間違っているとは思えない。

だが、現状として、こうなってしまうっているわけだ。

自分たちが予想していない事態が起こっていることは確かだ。

その時、まるでこちらの状況を知っていてタイミングを計ったかのように誰かの携帯が音を鳴らす。

「………塔貴^{しげや}也か。一応聞いておこう。これはいったいどういう事だ、嵩月奏華の予測値点であるはずの鳴欧邸はもぬけの殻だったか？」

誼和の質問に対して、スピーカーから吐き出されたのは、まず舌打ちだった。

『やはりそうか！こちらでも予想外の事態だ。何しろ、この事態を起こしているのは、僕らの探し人だからね。全く以て信じられない状況だよ』

驚きに混じった驚嘆。

電話の向こうの相手は何かを喜んでいるような雰囲気を出していた。

それが、また誼和の心境を荒立てることになるのだが、それは塔貴也もわかったことだろう。

『良いかい、よく聴くんだ』

故に、此処からは真剣な態度へと移行する。

『現在こちらでも予期しない出来事が起こっている。それは先ほど話だろう？ 実は、こちらでは探索していた嵩月奏華の反応が多数映し出されているんだ。この状況が君にはわかるだろう？』

「……機械の故障という可能性は」

『ないよ。そんなヘマを僕がするわけないだろう。探査プログラムには問題はない。言うまでもないけれど、嵩月奏華という存在は一人だ。しかし、彼女の現在位置を示すGPS反応は目測20は浮かび上がっているんだ』

誼和はこの状況に対する分析をすぐにした。

想像するに、塔貴也は未だにあの地下室でモニタリングする男の姿を浮かべる。

そして彼が見ているモニターには、町全体の地図とGPS反応が映し出されているのだろう。

此处で彼が言う問題が理解できた。

本来反応したGPS反応は、一つであるべきなのだ。だがというのに、彼が？多数？見られると言った。

何の冗談だ、とは言えない。

これはある種の任務にも近い行動を自分たちはしている。

それは、自分たちの父、母——つまりは、組織の頭が直々に自分たちに命じたことでもあるわけだ。

嵩月奏華の搜索に当たれ。彼女に近い者の協力を要請しても構わない。

その命を受け、自分たちはまず、洛芦和高校の地下・？塔貴也の

下へ行くことを促された。

父たちが信用する人物ならば、その提供される情報にも信用できるだろうと思っていた。

実際、彼の話は正しく思えた。

『かつて両親が過ごした思い出の場所』 〓 鳴桜邸。

この図式には、確かに一般的な少女が引かれる要素は十分だった。

しかし、鳴桜邸には、何者かの侵入跡はあれど、人っ子一人として気配も姿もなかったのだ。

「結論を」

問題が発生した。

こちらの予想をはるかに上回る、いや、度外視していた可能性とでもいうのだろうか。

嵩月奏華が浚われたのか。

そう考えると、彼女のついていたGPSの信号を複製、増殖させたことで塔貴也のモニター異常は納得できる。

だが、この場合、相手側にそれなりの技術がなければならない。そして、誘拐犯がこちらの探査に気付いていなければならない。

また、この短時間でそれだけのことをする技術者は、そうそう存在しない。少なくとも、こんな平凡とは言えなくとも、別段発展都市でもない場所にそんな人材が埋もれているはずはないだろう。

『これは、僕の勘だけだね』

思考に耽っていると、塔貴也があまりにも言い辛そうにつぶやいた。

それもそのはずだろう。

鳴桜邸にいる者にはわからないだろうが、塔貴也の地下室には、彼だけではなく――

「アンタが言葉に詰まるとは、よほどこの状況下で回答を告げづらい相手がいるのか――高月夫妻か？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、ね』

塔貴也は疲れたような溜息を吐いた。

40過ぎたばかりだが、疲労感や不健康さは有れど、年月の堀はそれほど深くない外見の男・？塔貴也。

恐らく、昔話に聞くとおころの気まずい間柄が彼の精神的疲労をこの数時間で飛躍的増大しているのだろう。

『ともかく、話を整理しよう。高月奏華、彼女の目的はちりばめられた情報のかけらから【兄・高月智直との接触】にあるとみて間違いないだろう。これは彼女の両親から得た情報、昨夜兄のアルバムらしきものを頑なに隠し続けたこと、そして水無神環奈くんが本人から聞いていた話を総合した結果だ』

「ならば、高月奏華はどこにいる？ 確かその兄は数年前から行方知れずだったのだろう。そんなものと何処で、そしていつ打ち合わせたというんだ。――いや、まさか、此処で第三者か」

誼和は、？神の分離体？の存在を知っていた。
ゼウス・メッセンジャー
ロスト・チャイルド

何度も在学する学園に？はぐれ眷属？が現れたのを確認しているし、それが普通とは異なることも知っていた

。

彼が遭遇した？はぐれ眷属？はどれも小さい物だった。故に対処も特段というほどの難はなかったし、校舎破壊の騒ぎはあっても死傷者は出ていない。

だが、他と異なる点。

それは、その体の部位が機械化されていたことだった。本来、悪魔の使い魔である物が見捨てられた果ての姿である？はぐれ眷属？だが、その姿の一部が機械であるという例は今までにない。無形状の使い魔はいても生き物として生々しかった。

その報告をしてしばらくして、洛芦和高校へ？彼ら？の襲撃があったことを知った。

後日、組長から警戒の旨として伝えられた。

そして、実例のない？はぐれ眷属？と？彼ら？が機械の身体を持っていたことに対する共通点。

？神の分離体？は嵩月智直を浚っていったらしい。

ならば、その妹である彼女も十分可能性はあるのではないか？

『それは分らない。可能性がないとは言わない。しかし、嵩月智直をさらった理由もわからないんだ。その基準も今のところ計り知れないよ』

塔貴也はすぐに自分の考えを否定した。

『ただ言える事は、嵩月奏華は何かを知っているだろう。これは確定とは言えないけれどね、彼女は兄の日記帳らしきものを持っているらしい。彼の行方不明と今回の騒動。関連性がないとは言えないだから――』

その時、携帯からノイズが強く響いた。

「? どうした、おい塔貴也っ」

『ギッ——ジッ——』

そこで、鳴桜邸と実質捜査本部との連絡はいったん終了する。
誼和は、最後に聞こえた大きな物音——おそらく何かが崩れた音——と、鈍い重音を鳴らす機械らしきものの音を耳にした。

同時刻：洛芦和高校

唐突の事態に対し、生徒職員は混乱しているものの、三生徒会が鈍る事無く機能していた。

「教職員、学級長は避難先で人員の数を確認しろっ!!」
愛用の黒い扇子を振り回し、次々に手近な者へ指示を下していく。
その姿は、審判を下す裁判官のように洗礼されていた。

「少し足止めしてくれないかい、狐さん？」

混乱の中、気の抜けた緊張感のかけらもない男の声。

その声が自分に向けられていることは、わかっていたが、彼女は振り返らず、状況を分析しようとする。

避難状況——九割方完了。

撃退状況——未完、しかも対象は二体以上。

撃退組織の被害状況——そもそも撃退組織の数が少ない。悪魔生徒は無事だとしても、一般生徒の部隊が危ぶまれる。

「おい、桃太郎。相方と雪丸はどうした、一緒にいただろう」

「アイツらなら、一般人の安全確保に尽力しているはずだぜ？俺らとは違うからな、実戦等はこっちの本分だろ？」

その情報に、彼女は一人納得する。

あの二人が向かったのなら、一般人はもはやこの場には残っていないだろう。

第一と第二の生徒会長がいるのだ。

それくらいのことは終わっているはずだ。

「さて、狐さん。俺らは俺らでやろうぜ。犬猿雉じゃないのは微妙だが、狐ってのも面白いかもな」

「黙れ。その減らず口を閉じなければ、お前も化かすぞ」

扇子を突き付け、睨む。

そいつはやれやれと言った感じで肩を上下させた。

「今じゃやることはないだろうし、こういう機会じゃなけれりゃ、無いだろうからな」

そういうと、そいつは肩幅に足を開き、正面に対して斜めを向く形で腰を低く下ろして格好をつけた体制を取る。

「我こそは、魔より生まれし科學を解き明かす長なる者——百^も々^{もいじま}似鳥卷砂^{ますな}。いざ、参る——！」

巻き付くように地面の砂や小石が踊りだし、宛ら砂の大蛇が何匹も踊っている様。

自分たちの前には、校舎二階分の高さにも勝る猿を思わせる化け物がいた。

毛深い体表やむき出す牙は獣のそれだが、その四肢は鋭い爪の装甲。その一つは胴体へと回り、わき腹にまで届いていた。

百々似鳥卷砂の操る砂塵の大蛇たちは、大猿へと襲いかかる。巻き付く砂は大猿の四肢を塞ごうとするが、豪快に、そして一目で協力だとわかる鋼の爪を振り回していた。

だが、それは空気や水を切るのと同義。何度も崩される砂塵はすぐにかたちを取り戻していった。

じわじわと大猿の体力を削っていき、

「捕えたぜ」

いったん崩された砂塵が一つにまとまり、大猿にも負けない大蛇へと形作る。

「グオオオオオオオオツ！！??」

大蛇によつて縛り上げられた大猿は悲痛な声を上げ、ついには光の粉のように消滅した。

「へっ、どうつてことないじゃねえか！ お狐様は何もする必要なかつたな！」

百々似鳥巻砂は大声を上げて笑い出す。
勝利に酔う馬鹿だ。

「アホでバカだな」

口に出すまで、その落胆とも苛立ちとも取れる感情は治まらない。

だが、一先ず――

「マキサ、そいつを狐扱いするな。それでいて打たれ弱いんだ」

「げっ、雪丸っ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

百々似鳥巻砂は氣まずそうに後ずさり、彼女はただ沈黙を以て、彼に視線を向けていた。

上から下まで真っ白。

普段は活力のなさそうな、何処かつまらなさそうな瞳にも、今は力がこもっている。

「來已咲、状況は」

「一体撃破。残りはまだ、だと思う。今派手に動いたからおのずとこの近くに集まってくるはず」

そういった矢先に、校舎の影から犬を模した、これも巨体なもの。

彼女が次は自分が仕掛けようとした時、

「お前はここら一带に術をかけたら、地下で待機。アドバイザーとともに状況の分析をしろ」

「……………どういう意味、ですか」

千々丘の言いつけは、実質前線を退けというものだった。

來已咲にとつて、それはあまり快くない。

自分はまだいけると考えているし、何よりも悪魔の能力を持っていない千々丘を残していくことが気がかりで仕方がない。

加えて、一般人と比べて指揮力のみに秀でているだけの男にそういわれることが癪に障った。

「嵩月奏華の搜索が難航している。この事態を収拾する手段として、機巧魔神を所持している朱鷺川正に連絡を入れる。そしてそのまま地下で捜査の協力を」

もはや、ここにいるのは口うるさい男ではないことを來已咲はわかっていた。

その指揮はもう自分が有無をいうことは許されない。かなわない。というより、彼の指揮が今のところ最善なのだ。

「音姫」
オトメ

行動は迅速に。

それに則りすぐに学園地下へ向かうとしたが、なぜか呼び止められる。

彼から送られた言葉は何気ない気遣いだった。

「……………無理はするな」

「了解ッ！」

来已咲は距離をとり、はぐれ眷属がすべて視界に入る位置までの高台まで上る。

彼女の周りには、数人の隊員が警戒態勢をとっている。

自分は一人、はぐれ眷属をにらみつける。

「さあ、狂っ……てしまえ!!」

彼女のその言葉を合図に、周囲の隊員ははぐれ眷属に向かって一斉射撃。

当然、それによつてはぐれ眷属たちは、自分たちを攻撃してきた者を捉えようとする。

しかし、それが彼らを狂わせることになるのだ。

敵を捉える際、必然それは相手の顔を視界に入れてしまうだろう。それが自分よりも小さきものならば、目と目が合うことなど容易いこと。

それから数秒の時差を置いて、獣の錯乱した声——悲痛な叫びが学園を満たした。

此处で、幻惑というものを掛ける手段として、視覚的なものが一般的に用いられることが多いという話をしよう。

たとえば、奇怪な紋様を見せて、錯覚を作り出す。

これも立派なまやかしであり、惑わせるもの。

催眠術でもコインや時計を見せて術をかける場合が多い。

そもそも幻惑というものは、五感を狂わせることに通じている。

視覚を持つ生き物にとって、視覚から得られる情報量というものは、他の感覚に比べて圧倒的に多い。

そして、現在狂ったように自分の身体をかきむしるはぐれ眷属たち。

彼らは見たのだ。

来已咲音姫の見せる幻惑を。

自分たちを攻撃した相手を探し、そして目を合わせてしまったのだ。

彼女は、幻を見せる悪魔だったのだ。

恐らく彼らには、今自身の体内を、肉を突き破り、花を咲かす痛みに悶えているのだろう。

残りのはぐれ眷属に幻惑をかけた來已咲は、すぐに洛芦和高校校舎地下にある個人研究所へ向かった。

しかし、彼女どころか地上で戦闘をしている者は、誰として知らないだろう。

？研究所と称されていた場所が、今にも崩壊しそうになっているなど。

鳴桜邸：リビング

顔を合わせて半日もしない相手という居心地の悪さを感じつつ、私は彼女の行方を考える。

『あの子を見つけたら絶対に話すんじゃないわよ、殴ってでも引き止めさない！』

そう言い残して二人の知人は、学園の応援に行ってしまった。

彼らの戦力が戦況に大きく左右することは、知っていたし、それは仕方のない事だと思った。

だが、やはり不安は残る。

美更の言った事も不安につながる一因だった。

自分には彼女を引き留めるだけの要素があるだろうか、と。

その不安と何もできない歯がゆさ。

加えて、こんなときの対処の仕方が分からない。

自分は何をすればいいのだろう。

何やら話し合っている風斎と華島の男女に声をかけた法が良いのだろうか。

そんなことを考えていると、

偽リニ隠サレタ現実ヲ探セ

頭に響く。

視界を覆う。

唐突に訪れた、まるで機械の誤作動のように展開される文字の羅列。

それまで埃の多少かぶっていたリビングを数秒の後には黒で覆われていた。

自分の視界は文字の羅列によって埋められたのだ。

『認識障害排除命令受諾。魔力濃度察知による探查を開始します』

+
+
+
+
+

「ん？ どうしたの」

環奈の様子に違和感を感じた美伽は、彼女の顔を覗き込むように屈み込んだ。

美伽の問いに、環奈はなんでもないと風を首を振る。

その態度を友人がいなくなつて、情緒不安定になっているのだからと受け取つて、それ以上の心配はしなかった。

一方、洛芦和高校へ応援に呼び戻された朱鷺川正と木浪神美更。彼らは風斎家の用意していた車に乗つて、現場へ向かっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・本当によかつたのかな」

「やれることがあるなら、そっちに行つた方がいい」

美更の疑問に、正はただそういうしかなかった。
だが、彼女の言う事には少し思うところがあるのは真実だ。

自分たちの目的は、友人の搜索のはずだった。
それは何よりも優先する事だろう。

しかし、それは手段がある内だけのことだ。

現状として、嵩月奏華を見つける手段は何もない。

そもそも何故、彼女が隠れるように行方を眩ませているのかすら、
自分たちにはわからない。

何も知らない。

そう考えると、自分たちはいったい彼女の何を知っていたのだろ
うという思いに駆られる。

友人として、部の仲間として。

自分たちはいつの間にかに彼女との距離を開いていたようだ。

あの日、初めてはぐれ眷属を彼女の前で相手した時から、自分た
ちと彼女の間にはどこことなく複雑な空気が漂っていた感が否めない。

「・・・・・・・・正くん？」

「何でもない。ただ、俺達は少しばかり怖がっていただけなんだろ
うって思っ」

「かなちゃんのこと、だよな？」

「ああ。俺たちがあれこれしていたら、今の状況が変わっていたかもしれないって思うし、変わらなかったかもしれない。でも、結局はあまりにも伝えられなかったことが悔やまれる気がするんだ」

美更は結局ちゃんと話そうと決意した日より嵩月奏華には会えていない。

ちゃんと学校に来ているらしいのだが、部活には顔を出さなかった。

「着きましたよ」

運転席から声がかかった。

どうやら少ない試案をしているうちに、洛校についてしまったらしい。

中からは獣の吠える声がいくつから聞こえた。

「美更、今はここを片づけよう」

「うん」

012: Nightmare 4 + Friends Anxiety + (後

なかなか話が進みませんでした(苦笑)。

舞台に真実が上がるのは、もう二、三話かかりそうです。

+登場人物+（前書き）

一旦状況を整理しようと思います

+ 登場人物 +

たかつき
嵩月 奏華 そづか

年齢15歳。

夏目智春と嵩月奏の娘。

奏を思わせる黒のボブカット。

特技は、舞踊と剣術。母と曾祖母より嵩月流舞踊『炎舞』を習い、母から実戦経験を基に剣術を教授される。

意外と大喰らい。

洛芦和高校1年9組在席。

科学部員。

水無神操緒とはメル友。

・悪魔としての能力はあるらしい？

みなかみ
水無神 環奈 かなな

年齢16歳

みなかみ みさお
水無神操緒に育てられた孤児。

育ての親に影響されたのか外見はとても似ている。

ただ髪形がサイドテールである事とそっけないくらいの落ち着きを持っている事を除いて。

成績は優秀。アニアに教鞭をとってもらっただけあり、高卒レベルは余裕でこなせる実力を持っていた。

奏華と同じクラスで科学部にも入部している。

たかつき
ともなお
嵩月 智直

年齢は17歳。

夏目智春と嵩月奏の息子であり、奏華の兄。

智春のアホ毛と翡翠の両目が印象的。

奏華と同様に父の容姿を受け継いでいる。

ただ智春というより、「一巡目の智春」に似ていて、ヘタレなところはあるが、基本冷めている。

生後10年間は何も問題はなく過ごしていたが、10歳の誕生日を迎えた日に『悪魔の力』に目覚める。それ以降行方不明となっていた。

「悪魔の力「黒炎」」

嵩月奏の炎と夏目智春の闇の混合能力。

地獄の業火よりは温度が下がるものの、捕えたものをすべて飲み込む闇が対象を跡形もなく消し去る。

燃焼時にも炎の色は黒だが、任意で闇の能力を付加できる。

「家族の記憶を喪失」

十歳の時、自身の力を恐れ、一人家を出た。

行く先々で、父の不幸体質を受け継いだのか、災難に見舞われ続ける。

そして数年間、少しずつ悪魔の力を使い続けた結果、「嵩月組」と「奏華」の存在を忘れる。自分は一般家庭に生まれ、両親と妹の4人暮らし程度にしか覚えていない。

「機巧魔神「螢石」」
フローライト

・空間促進能力。空間弱体能力。

機巧魔神の作り出す魔法陣と重なる座標は全て有効範囲。

水は涸れ、木は成長の後に枯れるという具合に。

・副葬処女は明之城琴葉

闇より重き沈黙より這い出でし——其は科学の時が弱めし万物の理
ことわり

明之城 あけのじょう 琴葉 ことば

18歳。

外国にて智直に拾われた孤児の少女。

智直の不思議な力に恐れず接したことから、二人は行動を共にしていた。

現在の智直にとって唯一愛する者の記憶を生み続けている存在。

・頭に突起があり、その尋常ならぬ力はまさに？鬼？と形容できる。

・嵩月智直の機巧魔神の贄となる。

とき かわ
朱鷺川 正 だし

やや目つきの悪い黒髪長身の男子。
それを隠すためかは定かではないが、緑のサングラス常備。

「機巧魔神「紺碧玉」」
ザファイリア

・特定結界。

演操者の出す条件を最低限可能にした世界を生み出す。
有効範囲は、半径500m圏内。

・投影装置
プロジェクター

紺碧玉に使用されているプラグイン。

本来プロジェクターは、画像をスクリーンに大なり小なりして
映し出すというもの。

だが、この装置は映像のみならず、質量まで作り出そうとする。
これにより木浪神美更の疑似的肉体、第二の身体が出現する。
美更の疑似的肉体と魂を定着させるための機巧魔神の能力で？
2つの対象を結合？。

本来は幽霊が人形に取り付くと同じ原理だが、紺碧玉の能力
でそれをより完璧なものにしたのだ。

闇より虚しき伽藍より広がりし——其は科学の祝詞が治める理想郷

木浪神 きら かみ 美更 みさら

きめ細かなライムグリーンの長髪。

好奇心旺盛な子供そのものの性格をしている。

噂好き。

微妙に弄られキャラかもしれない。

そして、何故か奏華を「かなちゃん」とよぶ。

・朱鷺川正の機巧魔神の副葬処女。

投影装置と能力によって、対人関係を成り立たせている。

百々似鳥 ももいじま 巻砂 ますな

科学部部长。

第三生徒会長・青井丁巳と友人関係。

飄々としていて一見遊んでばかりのようにも見える。

「悪魔の力「砂の魔精霊」」

土ではなく、乾燥した砂のみを操作できる。

基本的には、小鳥か蛇を形作る。

「洛芦和高校」

「第一生徒会」

校内の治安に維持を主務とし、運動部を管轄している。
堅物キャラが多いかも？

学園の治安維持という正義漢が集まるため、男子の相談所となっている。

・現生徒会長「千々丘 雪丸」
ちぢおか ゆきまる

ぼさぼさの白髪頭で、明後日の方を見る視線から、何処か幽霊じみているとも噂される。
しかし、その一方で、指揮官としての才を持ち、現場では滞りなく人が機能している。

「第二生徒会」

学校内の委員会を管轄している。

より効率的、高収入な運営を目的としている。
女子が多いため、女子生徒の学校生活相談所として親しまれている。

・現生徒会長「來已咲 音姫」
くるいさき おとめ

紺のスーツに身を包む高校生とは思えない威圧感。

黒の扇子を愛着する女子。

どこか偉そうで、何事にも面白そうに笑みを浮かべる。

一部では「2代目守銭奴」などとも。

「悪魔の力「幻惑」」

視覚からの催眠。

第三生徒会

校内の文化系クラブや学業を取り仕切る。

科學部部長の百々ももいじま似鳥まきと卷砂との親交は深い。

・現生徒会長「青井あおい 丁巳ひのとみ」

緩みきつた友人（卷砂）の影響を受け、好き生真面目で面倒見のいい人柄。

ロスト・チャイルド
はぐれ眷属が出現し始めたことにより、その活動も悪魔が在学していた時のように戻りつつある。

第一生徒会はそうでもないが、第三生徒会の背後にいた王立科学狂会が再興し始め、再び悪魔の研究に力を進めようとしている。

「洛芦和高校地下」

現在は地下にあった古代遺跡があった場所を改装して、？塔貴也の個人研究所として使用されている。

それというのも、悪魔や機巧魔神が再び世界に現れたため、その研究をするため。

王立科学狂会ともつながりが多少ある。

デウス・メッセンジャー
？神の分離体？

ノン・ヒューマン
【非人間】

人と機械の身体を持った少女。

『神より産み落とされし——我は血肉に憑きし科学の魂』

【機獣^{シン}子】

獣を模した、かつての自立型・機巧護衛機^{カスタム・マキナ}を思わせる獅子の機械獣。

『神によって拾われし——我、世界の律に加えられし者』

【機神^{チルド・マキナ}子】

まがう事無く、機巧魔神^{アスラ・マキナ}。

『神が手によって操られし——我が身は科学に染まり悪魔の力』

朱湮に捕縛された智直を浚った正体不明。

世界の修正により干渉が困難になった母体の代わりに、この世界の仕組みを再考し直すことを目的としている。その際、修正者及びその関係者の一時的な排除、無理ならば抹殺もプログラムされている。

+ 登場人物 + (後書き)

とりあえず、こんなところだろうと思います。

操緒やアニアは囚われの身というか、まだ先に回さないとあれな
ので。

悪しからず。

014：霧晴し行く、ナラバ幸力不幸力（前書き）

長らく更新できませんでしたが、スランプは継続中です。
どうもしっくりきません。

なんというか、穴を埋めずに飛び飛びしている感じです。

014：霧晴レ行ク、ナラバ幸力不幸力

機械仕掛けの神様、デウス・エクス・マキナ。

それは、ある人の記憶を盗み見るに機械の巨腕だった。その根元はあるのかどうか、それはわからない。一説によると、デウスという存在はギリシャの逸話にも接点があるらしい。

演出技法の一つであり、ラテン語で「機械仕掛けから出てくる神」を意味する。一般には「機械仕掛けの神」と表現される。

古代ギリシアの演劇において、劇の内容が錯綜して、もつれた糸のように解決困難な局面に陥った時、絶対的な力を持つ神が現れ、混乱した状況に解決を下して物語を収束させるといふ手法を指した。悲劇にしばしば登場し、特に盛期以降の悲劇で多く用いられる。アテナイでは紀元前5世紀半ばから用いられ、特にエウリピデスが好んだ手法としても知られる。

機械によつて——エクス・マキナとは、この場面において神を演じる役者がクレーンのような仕掛けで舞台上に登場し、このからくりが「機械仕掛け」と呼ばれたことによる。由来は、「機械仕掛けで登場する神」ないし、舞台装置としての解決に導く神そのものが機械仕掛けであることも解される。日本語で思いがけない展開を指す「どんでん返し」（歌舞伎において、大道具の背景を倒し、瞬時に場面転換する「強盗返」から来た）あるいは「超展開」とも発想は類似している。

言わば、デウス・エクス・マキナはすべてを白紙に戻す、『抹消機』だといってもいい。

しかし、それは大掛かりなものであり、その分消費するエネルギーも大きい。

それこそ世界規模の供給源がいるのだ。

故に未来を望まれた世界はデウスにとって、とても都合が悪い。

何しろ、わたしの父、かつての夏目智春はその修正力を目的こそ違えども、成り行き上拒絶したのだ。

絃塔貴也の思い人であり、幼馴染の橘高秋希を求め、二巡目の世界を捨て、三巡目を作ろうとしていた人物。当時、父と彼は同じ部活の先輩後輩という関係から、敵対関係になっていた。

しかし、彼は父に敗れた。

その時だ。

因果律制御装置、イグナイター。またの名を点火装置。

機巧魔神のプラグインであり、世界の因果を狂わせ、手にしたものの思い通りの世界を作り出す。そしてそうなれば、現存したプラグインの中では比較にならない威力を発揮できるだろう。

軽く無敵になれる。誰も逆らうことはできない。

そんな強力かつ凶悪な代物を持ったのが、当時の父でよかったと思う。

父はただ願った。

『この世界に未来を』と。

しかし、それが今回の事態を招いた。

いや、これは必然的な出来事だったのかもしれない。

父たちには何の罪も責任もない。

すべては然るべくして起こったこと。

始まりがあるから、終わりもあるのだから。

■

■

「お前は何も悪くない。然るべき事態だとも言わない。ただ、こうなってしまった、自然と。だから、気に病むな」

そういつて、兄は拳に真つ黒な炎を点した。

キーツ、キーツと錆びついた金属のこすれあう音を鳴らしながら、周囲を散開する翼をもつ機械。それはよく見れば、蝙蝠のようだった。何匹にも、この場合は何体といったほうがいいのかもわからないが、それは数えようと思っても、数えられるような数ではなかった。「ハッ！」

炎の手刀が一体一体狩っていく。

だが、まだ数十体はいた。

「……………」

わたしは、自分を妹と完全に認識してもらえていない兄の背に守られながら、扉に立つ複数の人影を睨む。

人と機械の半分をもつ女の影。

扉から差し込む光に透かされた白い髪は長く、逆光になっていてもその素顔がうかがえた。顔半部が機械で、あごから顔のラインに沿って、頬、こめかみ、右目が機械のそれ。

ほかに右腕、左足も同じで、まるで義肢だ。加えて、服の裾から伸びているAV端子のようなもの。時よりくねりと振られ、その様子は尻尾のようだった。

『機獣^{シン}子、急ぎなさい。騒ぎになっています。物理結界が持ちません』

機械の瞳を発光させる機械の女は、飛び交う機械の獣に語りかける。

しかし、それに言葉で答えるものではなく、飛び交う獣型の機械が金切声を上げる。

それから状況が一転した。

これまで何度か蝙蝠型のそれがわたしに迫ってくることはあったけれど、すべて彼が撃破してくれた。

しかし、それが終わった。

はじめに比べれば、半分は減った。

けれど、今度は数ではなかった。

「■■■■——ッ！！！」

「■■■■——ッ！！！」

拡散していた部品が二か所に収束された。

目の前に現れたのは、世界最大のトカゲを模した機械の獣と猿のような人型を模した機械の獣だった。

かばうように回された腕から感じる。

これはまずい、と。

わたしの恐怖は一層増して、片足を引いてしまう。

それにならって、二体の獣が詰め寄ってきた。

「っ——、下がれっ！！！」

彼はより一層巨大な炎を生み出すと、横一線に腕を振る。

それによって、黒い境界線ができた。メラメラと陽炎によって向こう側の景色がゆがんでいた。

記憶を見たから知っている。この炎は触れた対象を飲み込み、別次元に送ってしまう。異空間と同じ世界の別の座標かはわからないが、とにかくこの場から消してしまうのだ。

よって、誰もこの部屋を二分する境界線を越えることは敵わなくなつた。

だが、

「■■■■ーッ！！！」

「■■■■ーッ！！！」

あろうことか、敵は境界線を越えようとしたのだ。

「ひうっ!？」

わたしは差し迫る脅威に身が竦み、委縮してしまうが、それも一瞬で、万が一を考えた彼が部屋の壁にぶち当たるまで壁と自分の背で私を押しつぶすように後退した。

「――」

だが、実際炎に突入した二体は消えた。

しかし、境界線は二体を包み込むために収束し、消えてしまった。残ったのは、部屋の門で身を寄せ合っているわたし達と、機械の女。それに扉の影になって見えないが、スカートと髪をのぞかせた人影。

『最初に宣言しておくが、この個体にそちらに匹敵する戦闘力は備わっていない』

「関係ない。俺が見るにこの状況ではお前が一番脅威だ」

再び、黒炎を手に点す彼。

「……………しかし、わからない」

女はまるで考えているかのようにあごに手を当てて、片足に重心を置いた。そして目を閉じ、本当に問題を前に回答を探るような態度をとった。

「恰好だけするならやめろ。お前ら機械にはわからない。たとえ神デウスであろうとも。お前らには家族愛なんてものはないだろう」

彼がそういうと、女はふむふむと頷いて、

『無し。該当情報なし。そも、この個体はおるかこちらには感情はない。故に、人間は不特定であり、対応の面倒な存在であり、観察対象に最も適した生体であると考えられる。故に、それが滅びる瞬間を観察する必要は十二分だ』

「とんでもなく、迷惑だ」

そういうが早いか、トモナオ君は駆けた。

『しかし、つくづくわからない。真実を知った後だというのに――』

炎の拳が迫りくる状況下で女は体制を変えない。

けれど、彼女は、にたりと気持ち悪い笑みを浮かべた。

「トモナオ君っ!？」

『トモナオッ!』

わたしと琴葉さんの声が部屋に響く。

しかし、彼は答えずに、血の池に沈んだ。

『どうして、神が与えた力で神の使徒たる私たちに勝てると思うのかしらね』

何が起こったのか。

血をどくどくと流し続ける彼。

不敵な笑みを絶やさず、倒れる彼を踏みつける機械の女。

そして、消えたはずの機械の獣が、最初と同じ獅子の姿で現れている。

フラッシュバックする数瞬前のこと。

炎の拳が女を捉えるその寸前、空間をゆがめて現れた機械の獅子が鋭利な牙を彼の体に突き立てた。

それで終わり。

彼は死んだのか。

血があんなにいっぱい。血がいっぱい。

『妹さんっ！？』

崩れるわたし。

通り抜けてしまう琴葉さんの腕。

頬を伝う、とめどなく流れる恐怖のしずく。

彼を失うことに対する不安が止まらない。

震える。揺れる。壊れてしまう。

わたしの日常は、この時、はつきりと砕けた。

『機獣子、オルタネータ永久機関を回収。撤退する。——ああ、そうか。その個体ももう用済みか。破壊しろ』

女の声の後、何か機械が壊れるような音がした。
扉の向こうの様子はよくわからなかったが、霞行く視界がとらえたのは、血液と筋肉繊維の間に仕込まれたちぎれたケーブルの数々。それと、見覚えのある制服と分断された少女の下半身らしきものが見えた。

■ ■ ■

『……………ひどい』

ぼつりとこぼれた言葉だったけれど。

その子がどんな状況にあったのか、何者だったのかもわからなかったけれど、憐れむ以外の感情が浮かばなかった。

否応なく、抵抗する間もなく。

一人に少女が惨殺された。

胴体を真つ二つに切断され、上半身が床に落ちる。そしてすぐに血を噴水のように吹き出す下半身が倒れた。

その瞬間は口を手で覆い、こみ上げる吐き気に耐えるのみ。

これは実体のない私でも、内からあふれてきた。

ひどくきもちわるい。

何もできない自分を恨んだ。

ひたすら、何もできない自分。できたできなかったではなく、する努力すらやらせてもらえない自分の運命を恨んだ。

垂れる人影は二つ。

それはこの空間において実体のある人の数と同等であり、どうしようもなく無情な現実を証明していた。

「——っ」

『トモナオっ！？』

背後で息を吹き返した彼に、わたしはすぐに振り返った。

しかし、安心できるような状態じゃなかった。なにしろ彼は腹部に穴をいくつもあけているのだ。獅子型の機獣子の牙が突き刺した体からは未だに血が流れているし、とても起き上げるような状態ではなかった。

『動いてはダメです！ それ以上動いたら失血死してしまいます！』
私のとめる声が聞こえていないのか、彼の視線が私をなかなかとらえてくれない。

血液を失ったせいで目が見えていないのかもしれない。

私は一気に体感温度が下がった。このままでは本当に死んでしま
う。

『絶対安静です。私が人を呼んでくるまで絶対に動かないで——！』
そう言い捨てて、私は自分が射影体であることを利用して壁を通り抜けた。

「——、——、——」

彼の倒れている奥部屋を出て、通路に。

そこには上の下を切り離された少女が虚ろな瞳を宙に向けていた。
いや、もはや死んでいる。

顔には恐怖もなく、本当に人形のような印象を受ける。

サイドテールだった髪も輪ゴムが半ばまでゆるんで、髪が乱れていた。

『――』

ふと、見つけてしまった。

廊下を人並みの速さで飛んでいたが、顔や特徴をわずかにとらえるくらいはできた。

しかし、これを見つけたことによって、私は完全に飛ぶことを一時停止させてしまった。

倒れるその瞬間まで握っていたであろう彼女の携帯。

それは床に上半身が叩きつけられたときに手から逃れてしまったのだろつ、彼女の手からわずか十センチ程度離れていた。

そして、手から離れ、床に落ちた時作動したのだろつ。

未だに画面が光を持っていた。

彼女自身と嵩月奏華が顔をくっつけて笑っている待ち受け。

とても楽しそうな日常。

切り離された日常。

二度と戻ることのない日常。

身勝手に使われ、廃棄処分された少女の生涯。

それに再度心の中で、安らかにという思いを込めた。

『 A m e n 』

私は動く気配に向かって飛んだ。

+ + + + + + +

「事後報告：嵩月奏華捜査班」 記者：風斎構成員

洛芦和高校に戦闘の目が向けられている時を突かれた。

13：48——鳴桜邸内に結界の発動を感知。お嬢様と華島の坊ちゃんが独断専行するも、結界に拒まれ、リビング前の廊下より先に進むことができなかった。

この時点で構成員を除く人物：風斎美伽、華島誼和の存在を確認されるも、協力者である水無神環奈の所在が不明となっていた。

14：11——

二十数分ののち、結界の消滅を感知。すぐさま先行する。そこで射影体を発見。重傷者がいることを聞かされるも、警戒して選考を再開する。

14：13——

行方知れずになっていた水無神環奈の遺体を発見。加えて、奥部屋にて搜索対象および重要関係者である嵩月智直を発見するも、嵩月奏華の存在は確認できず。

室内は戦闘の形跡があり、何者かが侵入した可能性がある。

・嵩月智直は、腹部を複数貫かれ、出血多量。重症。

・水無神環奈は、腰より両断され、即死だが、その断面より機械的な部品が覗いていた。これにより、彼女が普通の人間ではなく、黒崎朱理同様の機巧化人間ではないかと推測されるが、その技術は多

フェミテ・エクス・マキナ

く広まっていなかったため、一般人ではないことは明白。

14:30――

嵩月智直を四名家の利用する病院に搬送。一命を取り留める。

16:02――

お嬢様が気分を害され、これ以上の搜索、調査は無理と判断し、一時この場より近い華島家へ向かい、介抱してもらう。

・水無神環奈の遺体は一時的に風斎が預かるものとする。必要とならば、すぐ運べるように安置、保存している。

以上を持って、今回の風斎及び華島の搜索班による報告とする。

014：霧晴レ行ク、ナラバ幸力不幸力（後書き）

さて、ご無沙汰しています。

この回だけでは、どんな状況になっているのか、いきなりすぎだ
と思う人もいるでしょうが、申し訳ない。

一応報告書形式でやってみたけれど、どうでしょうね。

いろいろ言いたいこと、あると思います。わかります。
けれど、話を進展させたかった。

一応言っておくと、本敵に兄妹が見つかったということ。

洛高のほうは次回で。

ではでは、悪しからず。次回も乞うご期待あれ♪

015：彼思ウ 故ニ彼ラノ縁、此処ニ在リ（前書き）

長い間更新できずにすみませんでした。

中々アイデアといいますが、指が動かず、気が進まず、といった感じだったんです。

今回より、智直が主柱となって物語が展開します。

まずこの話は、現状をわずかながら整理しようといったものです。

では、どうぞ。

015：彼思ウ 故ニ彼ラノ縁、此処ニ在リ

「事後報告：洛芦和高校防衛陣」 記載者：神聖防衛隊組員

嵩月奏華の搜索が開始されて約四十分後、洛芦和高校にはぐれ眷属の襲撃が集中した。

当初、2、4体のはぐれ眷属が現れ、学生の避難、襲撃の鎮圧が行われ、即戦力にも関わらず、撃沈できると踏んでいた。

しかし、遅れて出現した？擬態能力を持つ個体？に部隊は苦戦する。

擬態を行う事により、接近及び攻撃される気配を感じ取れず、不意打ちによる被害が相次ぐ。

鎮圧が難しくなったことにより、状況の変化、調査の成果が未だ見られていなかった創作部隊の演操者・朱鷺川正^{ハンドラー}へ救難要請を求める。

「結果」

洛芦和高校の当面の休校

校舎設備に激しい損傷が見られ、日々の生活に支障が出るとの事で、その間、生徒には近隣の学校へ一時的な編入してもらう事を思案している。

または、仮設校舎としてプレハブ製の物を用意するかを検討中。

洛芦和高校地下施設・？研究所の完全崩壊

擬態能力のある個体により襲撃された。これまでの個体に比べ、知能が格段にあっただけ、統率機関を狙われたのではという推測が立っている。

今回の事態において、我々は何者かの意図を感じる事を認めない。はぐれ眷属は基本的に集団で現れる事はあっても、統率は取れていない事の恒例だった。

今後は新たな情報源となり得る嵩月智直についても詳しい情報提供を四名家に要求する案を提示する。

+ + + +

【 ———— 三日後 ———— 】

「智直」

不意に彼は名前を呼ばれる。

その声に応えるべきか、智直は判断が着かなかった。

悲しいわけでもなし。けれど、決して嬉しいわけでもない。

心の穴を覗きこまれているようで、心の中を調べられているようで、言葉に形容しがたい不安感と焦燥感。

一言で言えば、虚しい。

自分の罪を告発されているかのような感覚でもあった。

事実、自分は罪人だと感じてしまう。

家族である人の顔も声も、思い出すら忘れてしまった事が罪ではないはずがない。

「顔を見せてくれませんか」

応えるべき言葉を持っていなくとも、要求を否定する理由はない。こちらを向けと言うのであれば、それに応えるのはやぶさかではなかった。

なぜならば、実の母親だというのは、否応を問うまでもないからだ。

実家だと言うが、今の智直にはここは他人の同然。
所在なさ気に、けれど、人様の家をうろつくわけにもいかない。
そういう心境で一先ずという理由で与えられた和室の前の縁側から
庭園を眺めているところを彼女に声を掛けられたのだ。

たかつかなで
嵩月奏。

彼女を見た途端、智直の脳裏に有る少女の姿が思い出される。

あの子と同じ夜を映す黒髪が熟成された妖艶さを放ち、黒曜石
のごとき黒瞳があの子と異なる容姿で、残りは本当にあの子を成長
させた生き写し——いや、あの子がこの人の生き写しと言った
方が正しいのか。

彼は認識できていないが、彼女は自分たちの母親であることに何
ら間違いがなく、血の繋がった者同士ならば自然と似てもおかしく
ない。

「隣、良いですか？」

「……………」

智直は静かに頷いた。

事実上母である彼女は、そんなことを確認するまでもない。そう
思つて、智直は口に出さなかった。

世間一般の町並みで見る母親というものは、どこか図々しく、け
れど、それ以上に包容力のある優しさとぬくもりのある存在ではな
いかと考えていただけに、彼女のそっけないというか、よそよそし
い態度が気にかかった。

「何か、話しておかなければならないことでもあったんじゃないん
ですか」

智直は、基本的に誰に対しても敬語を使う事はない。それは誰に対しても敬うという事はなく、等しく対等な立場を持つという気概があった。

それというのも、彼は十年の時頼る当てもなく、視れる者、特別能力ある者でなければ、彼は天涯孤独で過ごしているように見えただろう。

「言葉、崩してくれていいですよ？」

「……………」

「やっぱり、居心地悪いですか？」

「……………」

正直に答えるべきか。

それは悩むべきところだった。

はっきり言えば、居心地が悪すぎる。恐らくこの屋敷にいる誰と会おうともそれは変わらない。

だが、しかし――。

「私だから、余計気まずい、ですか……………」

否定はできなかった。

母親だから、父親もそうだが、それ以上に彼女には失礼があつてはならないとでもいうような感覚に襲われる。

これは、そう。

以前、琴葉が語ってくれたことだ。
親交が故に。

友好が故に。
恋慕が故に。

どれにしても、相手を想う愛情があるからこそなのだと。

突然放浪し、行方を眩ませた息子に何の対価を求めない愛情。
それが親の愛なのだろうか、疑問を持たずにはいられない。

周囲の、特に嵩月という家の括りでは、確かに感じる1つの想い。

もし今感じているのが、 家族愛 というものなのだろうか。

そういえば、と思い出すのは、目が覚めてすぐのことだった。



目が覚める。

それを安心していいのか、どうか。

今までの人生で、目が覚める事よりも、完全に熟睡してしまう事の方が恐ろしいと思った。

勿論、そうならないように気を付けてはいたし、そうなくても起こしてくれる人がいた。

『おはよう』

そういつて、いつも起こしてくれる人の影が目映る。

彼女の背に光る電燈は、彼女の顔に影を落とすことなく、ぼかした光を放っていた。

いつも通りの眼覚めの挨拶。

何の変哲もない。

そう感じたけれど、それは間違いだと自身の体の異常が告げていた。

真っ白で簡素な部屋。

一定のリズムで刻まれる電子音。

想像よりも幾分か堅いベッド。

自分の身体から伸びた2、3本の管が若干の異物感を与えている。

『憶えてる？』

琴葉は明確に何をとは言わず、けれど、それだけで彼女が言わんとしている事を悟った。

加えて、それが夢ではなく、今こうしていることも現実だという事を自分の身体が叫び、照明していた。

ズキリと全身を硬直させるまでに至る明確な激痛。

痛みに導かれて、最後の記憶が連鎖的に頭を駆けまわる。

機械の敵と守るべき人。

何が何でも守ると、そういったはずだったが、結局はこうして言った事を実現できず、もはや手遅れとなった。

『泣かないで、トモナオ』

そう言われ、再び広げた視界には、切なそうに表情を歪めた彼女が触れる事の出来ない手で顔を包んでくれている姿だった。

「――

ガシャン。

「先生つ、嵩月さんがっ！ 402号室の嵩月さんの意識が戻りましたー！」

感謝を口にしようとした矢先に、書類等を落とした音が派手に響いた。

その次に、女性の叫ぶ声と駆ける足音。

開かれたままの病室の扉。予想はしていたが、どうやらここは本当に病院らしい。ちらりと見えた女性が着用していた薄い桃色の衣服が、より一層この場所を明確に示していた。

「琴葉、俺の意識がない間のことを教えてくれ」

『全部は知らない。でも、現状くらいなら』

「それでいい」

看護婦が戻るまでのわずかな時間。

琴葉は明確に、端的に今の状況を説明してくれた。

此处は、花鳥風月の四名家の一つ、風斎家が鼻肩にしてる医療施設。

嵩月智直は、今やこれまでの事態のカギを握るであろう重要人物として、その身柄を現在風斎家が保管。

実質は軟禁状態であること。

一方で、洛芦和高校の被害は甚大。

校舎を含めた設備の多くが襲来した？はぐれ眷属？に破壊され、学校生活を送ることは難しいとの事だった。

『その時、貴方のご両親も被害に遭った。でも、実際はかすり傷程度の軽傷。学園にいた理由は、妹さんの搜索要請のため』

安心して、そう言われたが、自分の両親だという自覚がない。名前を今彼女に言われて？初めて知った？ような感覚だった。

それよりも、智直が気にしたのは、洛高に現れた？はぐれ眷属？だった。

複数同時に現れたと言っても、それはいくらか確立のある話で、实例もあったことだろう。

しかし、複数が暴れ、一体が不可視になつての隠密行動。偶然だとしても、洛高が壊滅状態になったほど無抵抗にやられるとは思えない。

そして、1つの予想を立てた。

この事件の裏には、『？神の分離体？が糸を引いていたのではないか？』ということだ。

奴らの中の一体は、自在に複数に変形する獣型がいた。

そして、不確かだが、空間制御の能力がある可能性があった。

何よりも。

三体いるはずの？神の分離体？が、二体しか姿を現していなかつ

た。

もしや、最後に自分を襲った奴は、姿を現さなかったものによって空間を超えてきたのかもしれない。

異空間での同時展開。

洛高を攻めつつ、咄嗟に黒炎の効力を無効化した。
そんな考えが頭を過ぎる。

どちらにしても。

人の姿に似せた『ノン・ヒューマン非人間』
獣の姿を模った『ソーン機獣子』

そして、神の姿を知らしめる『チルド・マキナ機神子』

この三体が？デウス・メッセンジャー神の分離体？であることは確か。

その確証は、彼の記憶だけではない。

明之城琴葉。

嵩月奏華。

奴らとの遭遇を証明することは、彼女らの存在証明と同義だ。
今の彼女らを説明するという事は、奴らの存在を絡ませなくては

完全なものとは言えない。

二度の遭遇。

二人の少女。

10年前に妹を。

3年前に愛しき人を。

すべての始まりは、10年前だった。

嵩月智直は、神の計画を阻害したことによって、契約という名の呪詛を受けたのだ。

その後、看護婦に呼ばれて駆けつけた医師がやって来て、その後相次いで風斎家の者が風斎の当主と他家の当主らを引き付けてやってきた。

勿論、例の嵩月家の当主、自分の両親に当たる夫妻もやって来ていたのは当然と言えば当たり前のことだった。

智直にまず起こった事は、敵の詳細を言及する声でもなく、すべ

てを忘れた自分への辛辣な叱咤でもなかった。

母の抱擁だった。

誰の目を気にすることもなく、その行為を惜しむようなことなどもなく、ただひたすら、恐らくは自分のために泣いているのだろうと、未だ実感のない感覚で智直はその行為を受けていた。

己の母であるというのに。

その傍らで、頭をなでる男が父であるという実感もなく。

何故、という戸惑いを抱き、そして、智直は思った。

『長い間、心配させて、——ごめんなさい』

記憶のない己を恥じ、しかし、どうすればいいか戸惑う中、自然

とそういつのが正しいと彼は感じたのだ。

015：彼思ウ 故ニ彼ヲノ縁、此処ニ在リ（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

わずかではありますが、ちよつとずつアイデアと文字を積み重ねて作成に当たりますので、更新が遅れることがありますようにしても、気長にお願いしますね？

ちなみに、琴葉が言葉短めなのは、トモナオにだけですよ？
理由はまた、後程、作中の誰かが指摘する予定ですので、それまでお待ちください。

では、次回の更新を乞つご期待下さいませ。

悪しからずです。

016：存在理由（前書き）

なるべくまとめて投稿しようと、当初は考えていたのですが、そうすると、ネタがたまるまでの期間が長引いてしまう。

よって、これからは、小出しにしようと思います。

それでは、短いですが、どうぞ。

016：存在理由

非在化。

それは、悪魔たる者にとって、例外なく起こる現象。

世界との摩擦により、存在が希薄化される症状。

そもそも悪魔とは。

人の形を持ちながら、人間離れした能力を持ち、人との契約により使い魔を生み出す。

しかし、その実態、起源は神話や御伽噺に登場するようなものではない。

彼らは異世界からやってきた人間。

もっと言つのであれば、一巡目の世界の人間だ。

世界の境界線を越えた者は、皆悪魔になる。

これは本来この世界に居てはならない異物とみなされ、世界が拒絶している現象。

それこそが、非在化なのだ。

この現象には多くの悪魔が悩まされてきた。

しかも、性別による非在化によって削られる対象が異なり、濃緑も異なっている。

男性の場合、魔精霊サノバ・ジンと呼ばれる生物を模った魔力の塊。使い魔と

異なる点は意思がないこと。そしてその数もその物の能力に見合った数だけ同時召喚が可能だった。

そして、非在化の対象は、愛する者の記憶。

それは、恋人、妻、家族が対象になる。

その対象がない場合、もしくはそれほど思い入れがない場合などには、恋愛小説を読み、愛情という思いを一時的に変換する者も過去にはいたらしい。

これまでは雄型悪魔の話だ。

記憶を失い、人との関係性を失うことは、自他ともに酷なことがあるだろう。

だが、雌型悪魔、女性の場合は、その存在そのものを失う。

彼女らは魔精霊サノバ・ジンを召喚することではなく、純粹に魔力の性質の身で戦闘を行う。雷、氷、風、炎などといったものを自在に操る。魔力の性質は雄型悪魔も変わらないため、実際目にとると、魔精霊を使用しているかしていないかの違いにも思えるが、それは応用性に優れた能力と言える。

しかし、それは未契約の悪魔の場合である。

雌型悪魔はその存在そのものを希薄化され続けるため、早い段階で契約者を見つけないければならない。コントラクター

契約することにより、彼女らは非在化に対する抵抗力が増す。

しかし、これにもメリットとデメリットが生じる。

メリットは、非在化の抵抗と魔力の上昇とあるが、何よりも使い魔タだろう。悪魔の能力を具現化した、契約者に従属する獣。その能

力は、ことによると機巧魔人にも匹敵する戦闘力を持つ個体が生み出される。

そして、デメリット。

これは、非在化が完全になることはない事、そして契約者が雌型悪魔に対する愛情が薄れる事があるという点だった。最後には、悪魔が消滅する時、契約者の心は悪魔と完全に離れている事があるという。

もう一度だけ記しておこう。

悪魔とは、世界の異物だ。

異世界から来た人間を世界が拒絶している。

故に、世界との摩擦で存在が薄れていく。

「ならば、何故、現代の悪魔は、非在化による消滅例がないのか。その矛盾点に疑問を持ったことはないか？」

彼は未だ血色の悪い顔つきで、僕らの視線に応えた。

彼が病院を出て、まだ一日しか経っていない。

目が覚めた三日前とその次の日は身体検査を行い、昨日は嵩月家に居てもらった。

本来ならば、退院ともに事情聴取をするのだが、彼は10年間行方知れずだった。

ぎこちない、どう接すればいいのかわからない。

それでも、親子の触れ合いをする程度の時間があってもいいだろうという調査側からの配慮だ。

たった一日でその成果はあったかと訊かれれば、それは微妙としか答えるしかないだろう。

今こうして、取調室として宛がった部屋でも、嵩月夫妻の姿ないそれが彼と負債の関係があまり進展していないのではないかという疑念がぬぐえない要因であった。

「身内に悪魔の子は？」

彼は僕を真っ直ぐ見てそう尋ねていた。

「いいえ。僕には娘がいますが、彼女は悪魔ではありませんでした」
そう答えると、彼はいかにも驚いた様子だった。

「風斎組組長の娘が悪魔ではない？ それは—— 幸か不幸かわからない結果だ」

僅かに鼻から笑いをもらした彼、嵩月智直。

彼が今何を思っ、こうしているのか。

この取調べに包み隠さず応じるのか。

しかし、そんな言い知れぬ不安は杞憂に過ぎなかった。

『真面目に応答。 トモナオ』

わずかに身構えた気配を感じたが、現れたのが彼女と知って、南方から力を抜いた。

この場には、風斎組組長・組長補佐、華島組組長・組長補佐の四人に加え、取調べ対象の嵩月智直の五人だけだった。

主な質問役として今回、風斎組組長補佐である自分が彼と真向いの位置に座っている。

そして、テーブルの存在を度外視した登場をしたのは、青基調の金髪の少女。ゆったりとした趣で、自分たちに背を向けた形で彼に語りかけていた。

「…………… 君は、確か明之城琴葉君でよかったかな？」

『是。 ワイ 嵩月智直の副葬処女であり、彼に救われた人ならざる者です』

胸に手を構え、自信を主張するように、ハッキリ彼女は言葉を発した。

「？人ならざるもの？？それは一体、どついう意味だい？」

「……………」

その問いかけに、明之城さんは視線を逸らした。答える事に何か抵抗のあるような態度。

「答えたくなければ、べつに——」

「琴葉は？鬼？と呼ばれる存在だ」

こちらの言葉を遮った彼から告げられたのは、思いもしない回答だった。

その為だろう。

一瞬何について言われているか、わからなかった。

「……………それは今言うべきだった事？」

こちらが何と尋ねる前に動いたのは、自分の正体をばらされた明之城琴葉だった。

また、その声には怒気があった。

了解もなしに明かされたのだから、怒りを覚える事はおかしなところじゃない。

しかし、この時、僕が驚いたのは、未だに彼女が表現できるほどの感情の起伏があるという事だ。

機巧魔神アスラ・マキナの贅である副葬処女は、力を使用すればするほど魂を削られ、いずれ感情表現すらなくなり、消滅してしまう。

だが、どうだろう。

今の彼女は、眉を吊り上げ、彼に頭突きをする勢いで睨みつけていた。その顔には確かに怒りが見て取れる。おまけに腰へ手を添え

た格好までしている。

何時彼と彼女が出会い、いつ彼女が機巧魔人に取り込まれたのかは知らない。

だが、報告によれば、彼が研究所を破壊してまわったという事は数年以上も前空のことだったが、その被害規模は一年と少し前から激変した。

もしかしたらそれ以前からかもしれないが、その行動理念は分かっていなくても、その行動内容は彼自身の能力の身では完遂できる内容じゃない。

激変した要因。それは彼が一年以上前から機巧魔神の力を使用していたということ。

ならば、その副葬処女たる彼女も一年以上の間、魂をすり減らし続けていたという事だ。

それが可能か不可能かで言うなれば、不可能だと言いたい。
様々な事象がそれを否定しているにもかかわらず、現実はそのを覆している。

それに加えて、彼女が 本物の鬼 だというのか？

『情報の共有。それが第一。些事はなし。E s t - c e q u e
v o u s c o m p r e n e z ? 』

「小さなことでも不明瞭なことがあれば、それが相互間の理解度は異なる。それはその分だけ回答をたたき出す時間が長くなる。なら、初めからすべての情報を提供することが最も効率的だ」

怒鳴り散らすような言い合いではなく、純粹な意見のぶつけ合い。それが幾度か繰り返された今、彼女は痺れを切らしたらしい。

『——ふっ——！』

「なっ、おま——」

副葬処女と演操者は一時的な身体共有ができる場合がある。

自分は機巧魔人について其処まで詳しい人間ではないため、その理屈は分からない。けれど、できる者がいたという事例は存在するのだ。

「ちょっとあなた達——」

「あまり乱暴は——」

組長の女性二人が彼らを止めようと席を立とうとしたが、それもわずかに遅し。

『Cock sucker!!』

明之城琴葉は、そういつて姿を消してしまった。

そして、残ったのは、背中から倒れた嵩月智直。

一瞬のことだったけれど、それは彼が一人芝居をしているような状況だった。

いや、そんな事ではないことは分かっているのだが、そう思っても仕方がないような状況だった。

二人が良い合い、怒りが頂点に達したらしい彼女が、きっと睨み

を利かせたと思ったら、突然嵩月智直は十分に動かせる左手で己の顔を殴ったのだ。

現在、テーブルの影に隠れて仕舞ってはいるが、うめき声と文句をもらしている事から気絶するほどの威力ではなかったようだ。

「あなた、大丈夫？」

「立てるかしら、と聞くのも無意味ね。ほら、手を貸してあげるから立ちなさいな」

燐歌と志織さんの手を借り、彼は不自由な身体を起こし、椅子に座り直す。

「お茶、飲む？」

「……………お構いなく」

燐歌は、そう、と笑みをこぼしてもとの席に戻る。

「あんた、聞き手は右なんだろう？　なら、遠慮せずにいいなよ？」

志織さんがそう気遣い、彼は僅かに会釈する。

嵩月智直は現在、先日的一件より利き腕を含めた右半身に負荷を与えないように右腕を包帯で吊っている。若干罅が入っているため吊っているが、見かけほど酷い物じゃない。

彼が負った怪我の中で最も重症なのは、大型の獣にでも書きつかれたかのような右脇腹。肋骨の骨折、内臓負傷。

救出がわずかにでも遅れれば、失血死していたらとも言われていただけに、一命を取り留めた時の嵩月夫妻の安堵感が大きかったことだろう。

「議題を戻そう」

本来なら、この場は彼の持つ情報をこちらに提供してもらったものだった。

そして、彼が初めに告げたのは、『悪魔は非在化する』という今

の世界と矛盾した疑問。

「……………非在化、僕はその現象を見たことがないな」

「確かに。今の世界の悪魔は、非在化する気配がない。疲労はする、能力の限界もある。しかし、ならば、今の悪魔は何を代替にして、能力を行使しているのか」

「体力や精神力ではないの？」

「前時代の悪魔達は、それに加えて、【世界との摩擦】があった。ならば、今の悪魔たちは【世界との摩擦】の代わりに何を受けているのか。【世界との摩擦】がなければ、能力がもつと強化されるのか。それとただ能力を使い続けられるだけなのか」

世界と拒絶され続けた存在。

その代償が非在化。

ならば、それが亡くなった今。

悪魔とは、世界から認可された存在となったのか。

「もしそうならば、俺は未だ世界から弾かれる存在だな」

彼は嘲笑気味にそう呟いた。

「……………それは、どういう意味なのかな……………？　あなたは悪魔なのよね？　それで演操者。あまり実例はないわねえ。だとしたら

」

志織さんのゆったりとした口調の後に、この時初めて言葉を発した迅が続ける。

「嵩月智直。君は他と違うようだ。悪魔らしい悪魔、それが君だ」

彼の言葉の意味。

それは言われた彼が最も早く理解した。

そして、ふっと笑みを浮かべる。

「非在化をする悪魔。それが俺の正体だ」

016：存在理由（後書き）

風斎雨情の視点で書きました。

女性二人は少しだけ口調に変化を加え、華島迅の方は全くと言っていいほどもしゃべりませんでした。

彼は会合内容を書きとめる役でした。もともと無口キャラというか、そんな感じなので。

・Est-ce que vous comprenez ?

「わかりましたか？

・Cocksucker

「くそつたれ、バカ野郎

ネットの翻訳を使用したので、時々英語とフランス語がこっちゃんになっていることがあると思いますが、意味重視で使っていますので。

それでは悪しからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7311t/>

リターンズ・クライン ～生まれる筈のない悪魔の子～

2011年11月17日19時16分発行